桜花忍法帖

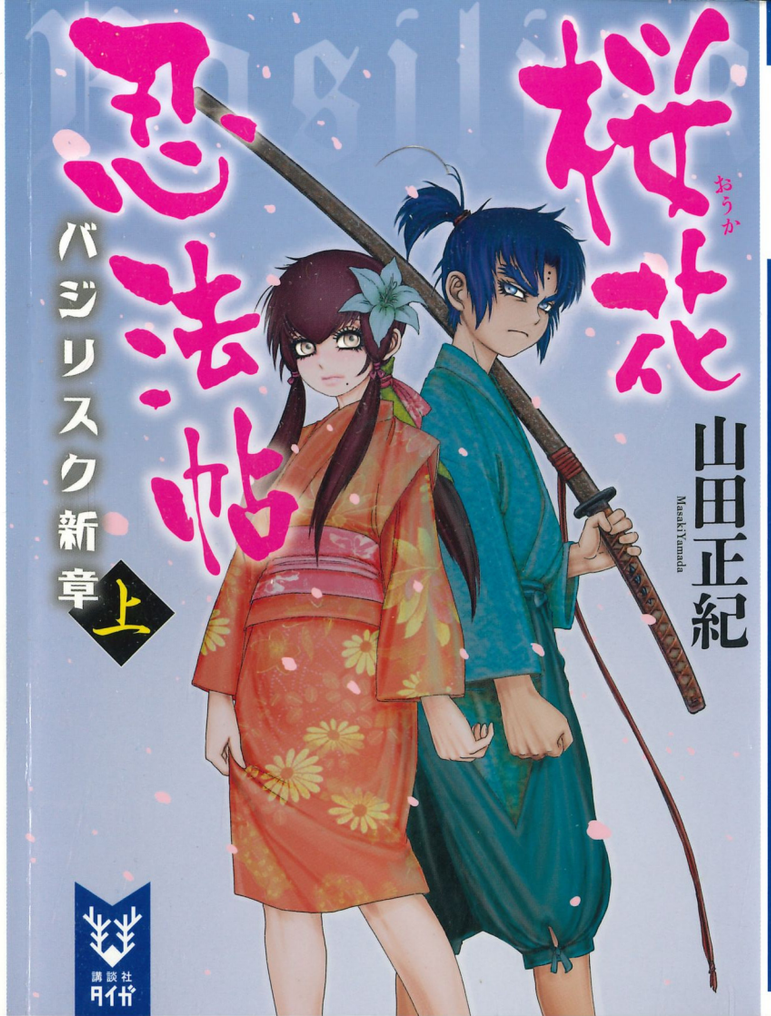
バジリスク新章 上

山田正紀
Masaki Yamada

講談社
タイガ

山田正紀　やまだ・まさき

1974年、『神狩り』（早川書房）でデビュー、同作は第６回星雲賞日本短編部門を受賞した。『最後の敵』（徳間書店）で第３回日本ＳＦ大賞を受賞、『ミステリ・オペラ』（早川書房）で第２回本格ミステリ大賞と第55回日本推理作家協会賞を受賞。「神獣聖戦シリーズ」「五感推理シリーズ」など、多数の著作がある。



山田正紀
A01
桜花忍法帖
バジリスク新章（上）
講談社ライガ
Y720

9784062940078
1920193007206

ISBN978-4-06-294007-8
C0193 ¥720E (0)

桜花忍法帖　バジリスク新章（上）
山田正紀

講談社ライガ
定価：本体720円（税別）

天下の座を争い歴史の裏側で行われた甲賀vs.伊賀の忍法殺戮合戦は双方全滅という血に塗れた結末で幕を閉じた。十年の時が過ぎ、寛永三年、再び甲賀伊賀の精鋭が結集する。甲賀五宝連を束ねる矛眼術を操る少年、甲賀八郎。伊賀五花撰を率いる盾眼術使いの少女、伊賀響。運命の双子である二人は、成尋衆と名乗る、人外の力を操る正体不明の集団との戦いに巻き込まれていく――。

講談社ライガ

山田正紀の作品

桜花忍法帖　バジリスク新章（上）

次作以降の予定

桜花忍法帖　バジリスク新章（下）

講談社
タイガ

新情報
続々更新中!

http://taiga.kodansha.co.jp
Twitter @kodansha_taiga

講談社
タイガ
創刊!

されば
皆みな様、
オン立派に、
死に
候え!

「甲賀忍法帖」「バジリスク」その先へ——
忍法殺戮合戦、開幕。

講談社タイガ創刊!
Y720

講談社タイガは毎月20日ごろ発売! 【全点新作書き下ろし】

綾崎 隼
君と時計と嘘の塔
第一幕

山田正紀
桜花忍法帖
バジリスク新章(上)

天野頌子
僕と死神の黒い系
(ボディガード)

似鳥 鶏
シャーロック・ホームズの
不均衡

桜花忍法帖
バジリスク新章(上)
294007-8

桜花忍法帖
バジリスク新章
（上）
山田正紀

講談社
ライガ

山田正紀

桜花忍法帖 バジリスク新章（上）

講談社
ライガ

一

桜花忍法帖

バジリスク新章

（上）

山田正紀

講談社
ライガ

原案

『甲賀忍法帖』山田風太郎／講談社文庫
『バジリスク～甲賀忍法帖～（1）～（5）』せがわまさき／講談社

目次

甲賀、散るべし……13
成尋衆、現る……84
伊賀、散るべし……124
伊賀・甲賀連合忍者隊十人……217

登場人物紹介

徳川　忠長――二代将軍秀忠の次男。幼名は国千代。駿河大納言。

徳川　家光――三代将軍。秀忠の長男。幼名は竹千代。

江――忠長の生母。大御台所。または、江与。

◇甲賀五宝連

草薙　一馬――忍法『天竪琴』の使い手。

緋文字　火送――忍法『草生炎』の使い手。

七斗　典膳――忍法『蛍烏賊』の使い手。

遊左　天信――忍法『千手観音』の使い手。

甲賀　八郎――甲賀五宝連の棟梁。矛眼術の使い手の少年。

◇伊賀五花撰

諸行　枯葉――忍法『曼珠沙華』の使い手。

蔦　法悦――忍法『蔦投網』の使い手。

色衰　逸馬――忍法『黄泉返し』の使い手。

水蓮　秋月――忍法『睡蓮掌』『死花化粧』の使い手。

伊賀　響――伊賀五花撰の棟梁。盾眼術の使い手の少女。

◇成尋五人衆

孔雀　啄――美少年。忍法『時逆鉾』の使い手。

輪廻　孫六――忍法『金剛楼閣』の使い手。

涅哩　底王――忍法『魔獣召喚』の使い手。

夜叉　至――美女。忍法『宿命通』の使い手。

成尋――謎の僧侶。

根来　転寝――甲賀の忍者。

滑婆――伊賀の女忍。

◇少年少女忍者たち

碁石　才蔵

甲羅　式部

蜩　七弦

蓮

涙

現

桜花忍法帖　バジリスク新章（上）

イラスト　せがわまさき
デザイン　坂野公一（welle design）

慶長十九年――西暦にして一六一四年――、言うまでもなく、この年は「大坂冬の陣」が起こった年として、人の世に長く記憶をとどめることになる。

この年をさかいに、豊臣家はあえかな光芒を曳きながら滅亡の淵へと落ちていき、と同時に、そののち二百五十余年にもおよぶ徳川の世が、その悠然たる歩みの第一歩を誇らしげに歴史に刻むことになるのだった。

しかし光あるところ、かならずその背後に影を残すのが、世のならわしでもあって、このときにも影が――それも陰々と深く暗い影が――歴史の暗部にそれよりさらに黒く、ひっそりと落とされることとなった。不吉な紙魚のように。

この年にそれが起こった――。それはじつに大坂冬の陣にも匹敵する、あるいはそれ以上の重大事であったのだが、にもかかわらず、そのことは痕跡の一片すら歴史に記されることはなかったのだ。

たしかに時の権勢者たちはそのことについて厳重な箝口令を敷きはした。敷かざるをえ

なかったのだ。徳川家最大の秘事として封印にこれ努めた。それが、その秘事が世に洩れるのをよく防いだのは否定しえないだろう。

が、おそらく、そんなことがなくても、その事件が人の口の端にのぼることはなかったろうと思われる。というのも、それはあまりに凄絶にして陰惨、残酷なことでありすぎたからだ。かりそめにも、この世にあり得べからざることだったからだ。

ゆえに、それにかかわった者たちは、みな一様に面をそむけ、口をつぐみ、ただひたすら忘れてしまいたい、とそのことをのみ念じることになった。誰もがいっさい記憶から抹消しようとした。その結果、事実としていったい何が起こったのか、何がそれほどまでに関係者たちをことごとく恐怖せしめたのか、後世の人間がそのことを正確に知るのを困難にした。

が、それでもひそかに囁かれることはある、人づてにヒソヒソと伝えられることはある。

それはこういうことだ。

三代将軍たるべきは、兄の竹千代（家光）か、それとも弟の国千代（忠長）か、そのことをめぐって家中が真っ二つに割れ、ついには徳川の礎石さえをも揺るがせかねない仕儀にいたったのは、なかば公然の秘密となっている。

一説には、その二年前、慶長十七年にはすでに竹千代が将軍家世嗣に定まっていた、ともされるが——慶長十九年の正月においてさえ、諸大名は竹千代、国千代の二人に同額の進物を贈っているという事実があり、跡継ぎ問題はぎりぎりまでこじれにこじれたと見るべきだろう。

それを決するのに、徳川の最大権力者・家康がとった策はまさに空前絶後にして、奇策中の奇策とでもいうべきものであった。伊賀、甲賀の忍者いずれも粒よりの精鋭を、双方ともに十名ずつ選び出し、これを最後の一人まで戦わせたのだという。すなわち、その死闘を経て、最後に伊賀が残れば竹千代君を、甲賀が残れば国千代君を三代将軍に選ぶことにしたのだ。

その結果は驚くべきものであって、あたら伊賀、甲賀の精鋭二十名が、ただもう殺意の牙を研ぎすまし、死闘につぐ死闘をくりひろげたのだという。その凄まじきこと、容赦なきこと、あたかも死神が狂笑とともに大鎌を一閃させたかのごとく！　たがいに目に爪をたて、喉に食らいつき、血をすすりあい、死出の旅路をひたすら急ぎに急いだ。惨なり！　非情なり！　修羅の地、屍山血河の荒野に、忍びたちの死骸が一体、また一体と、うち捨てられていって……ついには全員が無残にあい果てることとなった。わずかに伊賀の若い棟梁が——女性だったという——ただ一人、どうにか生を拾ったということだが、それも時をおかずに息を引き取ったということなのだ。

まさに血風ふきすさび、死臭たちこめる地獄絵図——かろうじて伊賀が勝利をおさめ、

三代将軍には竹千代が選ばれることとなったが、あまりに凄惨な結末に、寂として、それを寿ぐ声さえなかったという。

人々はその地獄絵図から顔をそむけ、ただひたすら、そのことをなかったことにしたい、ただもう忘れたいとのみ念じて、この十余年の歳月を過ごしてきたのであるが……。

それがはからずもまた現世に舞い戻ってくることとなったのである。同じことがくり返される。血なまぐさい地獄の颶風がまたしても暗黒の地上に吹きあれることとなった。

――ときに寛永三年（一六二六）九月のことである。

甲賀、散るべし

一

金谷宿は旧東海道の二十四番目の宿場町になる。江戸日本橋から五十三里（約二百十キロ）の距離にあって、遠江国の最東端に位置する宿場である。――というより遠江国側（京側）の大井川・渡しの宿場町といったほうがいいかもしれない。

――箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川――

この歌からも知られるように大井川には橋がない。渡し舟もない。江戸側からは島田宿、京側からは金谷宿にてしかるべき川越え人足を雇い入れ、あるいは肩車に乗り、あるいは蓮台に乗って、川幅およそ一キロを渡るほかはない。

むろん人足が無限にいるわけではない。当然、その数にはかぎりがあって、人足の手配がつくまで半日、一日、待たされるのはざらだったという。毎朝、役人が水深と川幅をはかって、その日の川札（切符）の値段を決める。旅人に交渉の余地はないし、川を渡らずしては旅をつづけることもできない。いっさい選択肢はない。

じつに不便きわまりないが、不便はそれのみにとどまらない。ひとたび増水し、それが脇以上の深さに達すると、たちどころに川留めになってしまう。何日も足留めを強いられる旅人の迷惑は大変なものだった。

とりわけ総勢二百人にも達する参勤交代の大名たちの、これがために費やす余分の出費は、ほとんど藩財政を破綻させかねないまでの巨額に達したという。

不経済ではあるし——いや、参勤交代の目的の一つが、大名たちに盛大に浪費させ、その経済力を削ぐことにあるのだから、それ自体はそもそもの目的にかなうことではあるかもしれないが——物流という観点からしてもはなはだ不合理なシステムといわざるをえない。どうしてこんな不合理がまかり通ることになったのか。

江戸幕府が交通網の整備に関心を払わなかったわけではない。宿場を整え、街道を普請し、植樹をし、場所によっては荷駄のために石畳を敷きつめるまでした。——徳川の官僚たちはきわめて有能で、経済を順調に発展させるためには、交通網を整備させることがかに重要か十分によく心得ていた。

それがどうしてこの大井川にかぎって架橋しなかったのか。もちろん、一キロにもおよぶ広大な川幅がそれを妨げたということはあるだろう。たやすく増水し、それにともなって瞬時、流れも早まるから、この時代の建築技術では、なかなかに架橋がむずかしかった、ということもあったかもしれない。——が、そうであれば渡し舟を常駐させればいいだけのことだし、それすら禁じた、というのはやはり理屈にあわない。それはどうしてなのか。

一般に、大井川を渡る手段を徒歩にのみかぎったのは——箱根に関所を設けたのと同じく——軍事的な意味あいがあってのこと、という解釈がなされることが多い。

箱根、それに大井川という東海道要害を設けることで、外様大名たちの江戸への進攻を困難にさせる意図があった、というのである。

たしかに当初は、そんな意図もあったかもしれないが、江戸期も中盤にさしかかると、むしろ幕府は大井川に橋を渡すのをこそ望んだのだという。さすがに旅人たちの怨嗟の声を無視しきれなかったのだろうし、上方と江戸との交通、物流をより円滑ならしめるためには川越え人足になど頼ってはいられない、という——きわめて妥当な——判断も働いたのにちがいない。架橋が無理なら、せめて渡し舟を常駐させることはできないか、と島田宿、金谷宿双方に申し入れたという記録が残されている。それが結局かなわなかったのは、既得権の保持に執着する宿場衆の強硬な反対運動に手こずったからなのだという。

つまり外様大名が江戸に攻め上るのを困却せしめるために渡橋を許可しない、という理由は、表向きのいわばたてまえにすぎなかったわけなのだろう。——それではどうして江戸初期には、幕府は大井川に橋を架けることも、渡し舟を常駐させることもかたくなに許そうとはしなかったのか。それは——

考えられる理由があるとしたらただ一つ、いま、その人物を警戒してのことではなかったか。

その人物――すなわち駿河大納言を――大御所・秀忠の次男であり、当代将軍・徳川家光公の弟でもある徳川忠長卿を。

徳川忠長は、二十歳になったかならずかの若さで、すでに駿河、遠江、総石高五十五万石を領する身になり、のみならず、この年、寛永三年（一六二六）には、従二位権大納言を授かって、まさに人生の得意絶頂期を迎えることとなる。

この年、八月――

天皇から昇進の伝達を受けるために、先に上洛していた父秀忠と兄家光のあとを追って京に向かった。忠長にしてみれば天にも昇る心地であったにちがいない。

九月六日、後水尾天皇が徳川家が京に所持する二条城に行幸する運びとなった。

これは幕府と朝廷の融和を世に周知させるための最大のイベントといっていい。――もちろん、これを計画したのは幕府側である。

まずは朝廷のオン女人たるべき中宮、中和門院、女一宮が行列をつらねて二条城に入ることからこの日のイベントが始まった。

つづいて二条城から家光が天皇を迎えに禁裏に向かう。

そのときの行列のじつに華やかで、壮観だったことは、後々まで京雀たちの語りぐさになったという。

まずは京都所司代を先頭に、長刀持ち、烏帽子着、馬添、傘持ちなどを召し具した馬上の武家二百六十二人が整然と行進した。ついで老臣二人を先がけに、番頭と旗本がかためた家光の牛車が行進し、そのあとを徳川忠長、御三家が従い、さらには伊達政宗以下四十九人の大名が続いた。

が、とりわけ衆人の目を惹いたのは、家光の牛車の前に陣取った鳳輦であった。鳳輦とは天皇が出御なさるときの神輿である。この日の行幸のためにわざわざ幕府が用意したものだった。

もとより、徳川家が持てる力のかぎりをつくし、数寄を凝らした鳳輦であれば、その壮麗たること、華やかたることはいうまでもない。が、なにより人々の耳目を集めたのは、その鳳輦は巨大な車輪を擁し、しかも人が曳いているわけでもなければ、牛が曳いているわけでもないのに、こともあろうに自力で動いているように見えることであった。ために、それを鳳輦ではなく、鳳輦車と呼ぶむきもあったという。

行幸のために二条城から禁裏までの道路はきれいに整備されている。鳳輦車はその平坦な道をまるで凪いだ海を舟が渡るように滑らかに移動しているのだった。その車輪が静かに回転している。

そのうえに、壮麗にして精密なる伽藍の模型を載せ、両翼に二塔を擁する。特筆すべきは両塔の屋根がいずれも四周を鏡で覆われていることだ。――その鏡のきらめきが痛いまでに人々の目を刺す。これが幕府の威光であろうか。思わず知らず合掌して祈る人があとを絶たない。

屋根には巨大な鳳凰の造り物が翼をひろげている。その姿はあたかも蒼々たる空に悠々と飛びたたんばかりのようである。いや、人々の目を驚かせたことに、現実に、それは羽ばたいたのである。それも何度も――。屋根を支える回廊列柱にはいずれも竜がその身を巻いている。水竜、地竜、火竜、風竜が、それぞれに雲を呼び、雨を誘い、珠を追い、火炎を吐く姿が活写されている。さらに伽藍の奥には唐獅子が牡丹の花にたわむれる姿を見ることができる……。

――あれは何や？　何でひとりで動いとるんや？

人々がその目を疑ったのは当然であった。その精緻な飾り、絢爛たる細工は、いずれ名人をうたわれる宮大工――あるいはあの左甚五郎ででもあろうか――の手によるものであろうが、あり得ることか、その鳳輦車がひとりで動いているのをどう理解すればいいのか。これは何か？　精密な機械をことのほか得意とすると聞く根来僧のわざであろうか。あるいは噂に聞くバテレンの妖術ででもあろうか。

野次馬たちの、なかに一人、

「あ……あの若衆は何や？　何と、まあ、美しい若衆やないか」

そう素っ頓狂な声をあげた者がいる。

「何や、どないしたんや」

連れがけげんそうにそう尋ねる。

「いや、いま、あの神輿にな、それはもう美しい若衆が乗ってたんや。大振袖に、きれいな袴の……鳥のようにふわりと乗ってた。それはもうきれいな――」

「何をアホなことを……どこにそんな若衆がいるんや。どこにもおらんやないか」

「いたのや、ホンマにおったんや……それはもうきれいな……」

「アホか、どうせ夢でも見たんやろ」

「いたんや、ホンマにおったんや……」

その声は、しかし、ひとりで動く鳳輦車を見て、あれよ、あれよ、と驚く群衆の声にかき消されていった。

が――

それがいかなる技術細工によるものか、ついに京の人々がそれを見とどけることはかなわなかった。群衆があれよあれよと騒いでいる間に、鳳輦車は悠々と禁裏に吸い込まれ消えてしまったからである。巨大なる夢魔のように。

ただ群衆のなかの何人かが後にこんな証言を残している。

「あれは――」

何者かがそうつぶやいたのだという。その声はふしぎな神韻をおび、どこかこの世のものならぬ、人外の響きと翳りをおびていたのだという。

「おうか」

おうか？　おうかとは何か。桜花の意味であろうか……が、それを確かめようにも、もうその声は二度と聞こえず、すでに鳳輦車の姿もなかった……。

迎えを受け、天皇は家光を先導にし、楽人たちを先頭に、公卿をしたがえて、二条城に入った。その際、鳳輦に座して二条城に向かった、という記録はあるが、それがはたして自力で動く鳳輦車であったかどうか、そこまでの記載はない。

というか、徳川方にしてみれば、内実、それどころではない、という突発事態が勃発したのである。

江戸から、生母・浅井夫人（江与）の病状悪化の報が届いたのである。

――大御台所様（江与）御気色よろしからず、ご遺言、以下のように申しつけられござ候にて……

遺言まで残した、というのはすでに浅井夫人は死を覚悟したということだろう。明日をも知れない命、ということか。

一読、忠長は顔色を変えた。

もちろん、その報せに、夫たる秀忠、長兄たる家光も蒼然と色を失ったことには変わりない。が、その衝撃の大きさにおいて、忠長のそれはとうていこの二人の比ではなかったはずなのだ。座敷にヘタヘタとくずおれてしまったほどだった。

それも無理はない。忠長はじつにあきれるほどの母親っ子なのだった。

駿河大納言・忠長の、母を敬慕すること、さながら観音菩薩に合掌するがごとし、女神に拝跪するがごとし――とまで伝えられる。その孝母心の篤きこと神仏に接するにも似たり、と称されているほどなのだ。

どうしてこれほどまでに忠長の孝母の心が篤いのか？　それはじつは忠長自身にもよくはわからないことだ。

兄、家光は乳母の福に育てられ、忠長は生母の江与に育てられたからだという説もあるが、もとよりこれはためにする俗説でしかない。いやしくも将軍の正室ともあろう女性が手ずから子供を育てたりするはずがないからだ。――当然、忠長も乳母に育てられたことに変わりない。

それよりも忠長は江与の実子であるが、家光はそうではなかった、という説のほうがまだしも説得力がある。それでは家光の実母は誰なのか？　いまのところ、それを証する史料は発見されていないのだが。――ここでも福こそが家光の実母であった、という怪説があるが、これもまたありそうにない。福が家光の実母であれば、そのまま家光の乳母にと

どめ置かれるはずがないからである。

実母は男児の養育にかかわってはならない、というのが当時の高級武家のならわしである。実母に慈しまれ、育てられた者は、いつしかわが身の命を尊ぶようになる。それでは戦場にあって、いつなりと果敢に命を捨てることができる覚悟のほどが育たない、という配慮からのことのようだ。

が、事実はどうあれ、忠長自身、自分は乳母にではなく、生母に育てられたのだという自負がある。つまりはそれだけ母に慈しまれたという思いが強いからなのだろう。瞼を閉じればそこに浮かぶは母の優しい面影である。

――そのお母上が……。

命旦夕に迫る危篤なのだという。しかも何たる不運か、おりあしく徳川の男たちがそろって上洛しているこの隙をうかがうようにして。――これには忠長も度を失わざるをえない。知らずして嗚咽が洩れる。

将軍である家光はもちろん、大御所である秀忠にしても、天皇を二条城に迎えての饗応を背後にうち捨てて、即座に帰府することなどできようはずがない。忠長のみが、天皇の御意を得、父、兄の許しを得て、ひとり京を発することとなった。

昼夜をわかたず、伝馬を乗りついで、鞭を鳴らし、蹄を轟かせ、ひたすら東海道を走った。江戸へ、江戸へ……。そのあまりの強行軍に、供奉の者たちはひとり脱落し、ふたり脱落し、すでに三河に入ったときには、わずかに数名を余すのみとなった。

それでも忠長はかまわずに馬を走らせる。目は吊りあがり、頬は殺げたようにこけ、すでに形相が変わっていた。

これでもう馬上に不眠不休で身を置いてから二日が過ぎようとしている、わずかに水を飲む以外はもとより何も食べていない。食べられない。食べれば嘔吐するだろう。体力もぎりぎり限界に達している。全身が石のようにこわばっていた。

「母上様、なにとぞ、お気を確かにお持ちくださいませ――」

天に向かって哭いた。吼えた。

「ただいま、ただいま――いま忠長めが罷りこします。参上つかまつります」

江戸へ、江戸へ、ひたすら江戸へ……。

馬をもっての急の遠乗りは一日三十六里を限りとす、という。

一日百四十キロ強――

事実、このとき忠長の一行は、東海道四百九十キロ強の距離を九月十二日から十五日までの四日間で駆け抜けている。

ただし、これが頑強な成人男子の体力さえをもぎりぎりまで削ぎ落とす強行軍であることはいうまでもない。

人も落伍すれば、馬もつぶれる。

夜なのか、朝なのか、雨か、風か、月が冴えるか、日が照るか——それすら覚えず、馬と共に空を行く。野を走り尽くせば山へといたり、山を走り尽くせば谷へといたり、谷を走り尽くして宿場へといたる……。

そして、ここは——

すでに忠長が領する遠江国である。さすがにおのが領国に踏み入れたときには安堵の思いがこみあげてくるのを覚えた。が、江戸まではまだ五十余里の距離を余しているのだ。このまま夜を徹して走りつづけても明晩に江戸に入ることができるかどうか。ここで気をゆるめてはならない。

いや、気をゆるめるどころか——

金谷宿にさしかかったころ、急に天気が崩れた。——轟ッ、と空がどよもした。

馬がおびえていないた。それを必死になだめてなおも走る。地に甲走る蹄の音が乱れた。それでもかまわずに走りつづける。

にわかに黒雲立ち迷い、天地を深黒晦冥のうちに閉ざす。気がつけば雨は車軸を流し、金谷宿が轟きながら奈落の底に沈んだ。暴風強雨の大闇黒——凄まじい豪雨に突っ込んだ。たちどころに視覚も聴覚も奪われた。

「怯むな、ただ走れ——」

金谷宿には長い坂がある。街道を普請したときに宿に命じて石畳を敷きつめさせた。歩行者の便を考慮してのことだろう。が、疾駆する馬にはこの石畳は不都合だ。雨に濡れれば石畳に蹄が滑る。ましてやこの坂だ。それを下りるのにこの速さで一気に走り抜けるのはあまりに乱暴すぎる。危険だ。

しかし忠長に手綱をゆるめるつもりはない。想うは病床にある母のことばかり。すでにわが身は捨てた。ましてや家来たちのことなど顧みる余裕すらない。

「者ども、遅れるな」

叫んで鞭を入れた。馬がいきりたつ。

背後に人馬の崩れる音がした。それに後続の騎馬が突っ込んだようだ。それも崩れた。バシャバシャ、という水音に馬の悲しげないななきが重なった。「殿!」という悲鳴の声が追いすがってくる。それを振り切ってさらに走った。振り返りもしない。坂を下りて大井川に向かう。

まえの宿で馬を乗り換えた。ワラ沓も履かせた。それがよかったのだろう。疲れた馬のままだったら坂道の石畳に転倒をまぬがれなかったにちがいない。が、極度の疲労に、亡者のようにやつれたいまの忠長に、それを喜ぶだけの余力はない。

暗夜を引き裂いて稲妻がひらめいた。その青白い閃光に忠長の姿が浮かびあがる。ほかに人馬の姿はない。いつのまにか忠長一人が馬を走らせている。供の者はすべて落伍したのだろうか。ふがいない奴バラではある。

それにしてもこれは世にありうべきことか。——大御所の実子、当代将軍の弟、駿河・遠江五十五万石の大領主、駿河大納言ともあろう者が、単騎、夜の豪雨のなかをひた走りに走っているなどということが。

しかし——

これより先、それよりさらにありうべからざることが彼の身に起こったのだった。

まさか、こともあろうに、おのれが領する駿河、遠江の藩境を流れる大井川に、行く手を阻まれることになろうなどとは夢にも思わないことだった。

すでに夜が更けた。川越え人足たちは大井川の渡し場から引き払っている。豪雨に揺れる夜闇に人の姿はない。そうでなくてもこの豪雨なのだ。明日は川留めになるのは間違いないだろう。つまり、いかに駿河大納言卿であろうとこの大井川を渡るすべはない。

それはもちろん、代官所に命じさえすれば、何十人でも人足の手配はしてくれるだろうが、忠長の目から見ても、この豪雨のなか川を越えるのはとうてい無理だ。しかもマズいことに、これだけ増水してしまうと、これからさき何日ものあいだ川留めになることは間違いない。

つまり忠長は、母の——ことここにいたってこれまで無意識のうちに心の底に封印してきたその言葉を胸中に吐き出さざるをえなくなってしまった——臨終に間にあわないことになる。

「ば、馬鹿な——」

忠長はただ呆然とするほかはなかった。血を吐かんばかりに叫んだ。

「余は駿河大納言であるぞ」

たしかに、それに相違ない。しかし、それがこの場合には何の意味もなさないのだ。

——将軍であろうが、大納言であろうが、この大自然の暴威をまえにしては、地を這う一匹のちっぽけな虫であることに何ら変わりない。

この時代の人間であれば、もちろん不条理などという語彙の持ちあわせはないが、このときの彼はまさに不条理ともいうべき喪失感に完膚なきまでに打ちのめされていた。

自分はこの駿河、遠江国の領主たる身ではないか。徳川御三家よりもさらに石高は高い。その身分をもってしてもこの大井川を渡ることができないというのか。——天下の大御台所がオン危篤であらせられるというのに、その子たる大納言卿の自分がそれを見舞うこともできないというのか……。

悲憤に胸を裂かれた。慟哭の声が豪雨降りしきる闇夜に放たれた。

二

「そうだ。あれがあった」

無念の形相すさまじく、轟々と流れ去る大井川を、あたかも仇敵のように睨みつけていた忠長の顔にフッと生気がよみがえった。

「あれが――浮橋が」

思い立つなり即座に手綱を引いて馬首を転じた。そのまま川筋に沿って蹄を響かせて疾走する。速い。雨中を一直線に飛ぶ矢のように水しぶきが茫々と白い縁飾りを曳いた。

大井川はおのれの領内にあり、川筋地形はよく心得ているはずなのに、この漆黒の風雨にあっては勝手が違い、あたかも見知らぬ地を疾るかのように地理が覚つかない。

――どこだ、どこだ、浮橋はどこにある。

早くも忠長の表情は焦燥感にかきたてられ、悽愴の色をにじませていた。

浮橋、あるいは舟橋ともいう。要するに常設の橋ではなしに臨時にかけ渡す橋のことだ。

その川幅に応じて、筏、あるいは小舟何十隻かを、鉄の鎖――あるいは麻縄、フジツル、ブドウツルなど――で繋ぎあわせ、そのうえに幅二間（三メートルあまり）ほどの厚板を並べ敷いて、これを橋の代用とする。戦国の世に広く流布した橋・作事の技術である。

いま――大井川にはその浮橋が渡されているのだ。正確に言えば、渡されようとして、結果、とり外しになった、それらの資材が残されているのだ。

今回、兄にして将軍たる家光が上洛するにあたって、忠長はそれに先だち、おのが領内にある大井川に浮橋を架設し、家光の大家臣団が渡川するに際しての負担を軽減することをはかった。――そのために作事奉行に命じ、諸国に号令を発して、敷き舟、船頭を召集し、浮橋の請負業者たちを集めての入札をはかった。

忠長にしてみれば、一にかかって、家光・大家臣団の旅の易からんことを願ってのはからいであり、それ以外に何の下心もなかったのであるが、意外にも家光はこれに不快の念を示した。

――大井川は箱根と並ぶ関東の要害である。それあるゆえにこれまで橋も渡船も置かずにきた。それをおのれ一人の裁量から浮橋を渡すなどもってのほか、言語道断の所業である。

というのがそのときの家光の言だ。

これが家光の本心からの言であったのか、それとも忠長のおりにふれて発揮される才覚の冴えを不快に感じてのことか、それは何とも判断しようがない。

家光は（幼名）竹千代のころ、人前に出てもろくに口もきけず、吃音ぎみで、人から愛されることのとぼしい子供だったという。それに反して、忠長・（幼名）国千代は聡明、明朗で、おのずと人の好意を誘わずにはいられない子供だったらしい。

そのことが、いずれを三代目・世継ぎたらしめるべきか、徳川家の混乱を招き、慶長十

九年春の伊賀・甲賀総勢二十名の壮絶な死闘を誘うことになるわけなのだが……。

あるいは家光には幼少時の弟に対する劣等感が成長したいまも尾を曳いて残っているのかもしれない。それが家光をして、ときに弟に対する怒りを爆発させる遠因になっている、という可能性は十分に考えられる。

が、家光の心理がどうあれ、その身が将軍職にある以上、忠長の浅慮からなる行為を不快に思い、咎めるのは当然のことであったろう。上の許しを得ずに、勝手に大井川に架橋するは、不穏不当、幕府体制を根底から揺るがしかねない仕儀である。それこそ尾籠の沙汰というほかはない。「武家諸法度」に照らしても断じて許されるべきことではないのだった。

忠長の家老が主君をさとすかのように、

「世に、奇貨居くべし、の言葉もございますれば……これをよきご教訓になされて、どうかこれよりは軽挙妄動をおつつしみなされませ。大納言様が当代将軍様のオン弟君であらせられたは、じつに不幸中の幸いでござりました。これがほかのご身分の方であれば、よしんばどちらかのご譜代様であらせられようと、よくて改易、悪ければお取り潰しの憂き目に遭うは必定でございます。それをお叱りだけでとどめおかれたは、何と申してもご兄弟ゆえ。ご当代様・家光公なればこそのご厚情でございましょう。大納言様には、どうか、オン兄上様のご厚誼に報いるためにも、これからも将軍家のためにお励みなさいますように――」

白髪頭を振りたてながら、縷々そう妄言をつらねたということであるが、まさに浅慮のかぎり。――それが余人にあらず、まさに忠長のしたことであるだけに、なおさら家光の怒りを煽ることになった、ということにまで配慮がとどかなかった。

それというのも――。

たしかに家康、秀忠の代であれば、大井川の架橋、渡船が許されなかったのは、西国大名が江戸に攻め上るのを警戒してのこと、という意味あいが強かったかもしれないが……家光の代にあっては、幕府は有能な官僚たちの結束のもと、着々と大名支配を強め、すでに盤石のかまえをかためつつあった。――もはや西国大名らはその謀反を警戒する対象ではなしに、いかにそれを締めつけ、改易・取り潰しをはかるか、という対象になり下がっていたのだった。幕府と外様大名とでは、その戦力、経済力に圧倒的なまでに差が生じつつあった。

この時世に、大井川に架橋、渡船を許さない理由があるとしたら、それは唯一、駿、遠両国を領する弟・忠長を警戒してのことでしかなかったろう。

その最も警戒すべき「敵」であるところの忠長が、こともあろうに浮橋を架橋したというのだから、これを家光がよしとするはずはなかったのである。

忠長が、兄の心の機微に配慮を働かすまでの思慮がとどかず、うかうか浮橋を渡してし

まったのは、やはり不用意なことであり、浅はかなことであったろう。幼いころより、まわりから聡明を称えられ、神童とまで呼ばれたのが、かえって仇となり、知恵が深きにとどくのをさまたげる結果になったのかもしれない。もっとも――逆に考えれば、これほどまでに忠長が兄に対して不用意だったのは、将軍に対して逆心がない、何よりのあかしだったといえぬこともないのだが。

ともあれ豪毅、明朗な忠長も、この兄の思いがけない叱声だけは、さすがにこたえたようである。わが身の未熟を思い知らされる一方で、よかれと思ってしたことを、そのように頭ごなし、一方的に叱られるのを理不尽なものとも感じた。――その屈辱には、この明朗闊達な一代の快男児も、いや、それだけになおさら、耐えがたいものがあったにちがいない。怒りに身を震わせ、

「この橋、不要！　ええい、目ざわりじゃ。即刻、取り払え」

そう言い捨てるや、その首尾も見とどけずに、憤然、上洛の途についたのであるが――思うに、あれだけのものをそうもたやすく解体できるはずがない。

――いまもまだ大井川に残されているのではあるまいか。

そのことに一縷の望みを託し、暗夜、暴風吹きあれ、豪雨降りしきる大井川に、馬を走らせたのだ。

ただ、これだけは留意しておいたほうがいいかもしれない。このときのことを記した史料を渉猟しても、そこにはただ「浮橋」とのみ記されているだけで、それが具体的にどんな「橋」であったのかは、いまにいたるまでついに明らかにされていない。そのことに関しての記録がいっさい残されていないからだ。

駿河大納言が当代将軍のために渡した浮橋がかりそめにも粗雑なものであったはずはない。

事実――。

「駿・遠は忠長卿しろしめす所なれば、ことさらオン心をお配りになられ、さしも早瀬の大井川に浮橋を渡し、平地のごとく往来たやすくかまえらる。供奉の者たちいずれも忠長卿、巧智を感ぜざる者なし」

という記録がある。

この一文をもってしても、それが尋常一様の「浮橋」ではなかったことは容易に想像がつこうというものだろう。ただ、それが具体的にどういうものであったのか、その詳細が知れないだけなのだ。

このとき忠長が家光の機嫌を損じたことへの遠慮が働いたからなのか、それともすぐに解体されたためにそもそもの記録に欠けているのか、この「浮橋」の実体がどんなものであったのか、ついにそれが後世に知られることはなかったのだった。奇妙なことに。

ともあれ――

それはそこにあったのだ！　ついに浮橋を見つけたのだった。

豪雨に増水し、満々と膨れあがって、暗天に咆吼を轟かせながら、ただもう荒れ狂うばかりの大井川――。

恐ろしいほどの急流をなし、見るまに流れ来て、流れ去る、その彼方に視線を放てば、目路の達するかぎり、どこまでも波、波、波が白い牙のように逆だって、岩を食み、河原を削って、その猛威、とどまるところを知らず……。

ただ、暴風雨にさらされた大井川は、ふしぎに青い微光をおびていて、視線を凝らせば、ボウと全体の輪郭が浮かびあがるのを、どうにか見てとることができる。そのために馬上提灯なしでもかろうじて馬を走らせることができるのだった。

岸の一端に、人工の支流が刻まれ、河原から陸へと溝が掘られ、その奥に馬の水飲み場が設けられている。

その途中に人の背丈を倍したほどの高さの水車がある。ゆっくりと回転していた。雨が音をたてて滝のように流れ落ちていた。――その水車小屋の軒下に川かがりの明かりが一灯のみ心細げにはためいている。

その明かりに、何十隻もの敷き舟が岸に積みあげられ、乗りあげているのが、ぼんやり照らし出されていた。まるで難破したかのようでもあるが、見たところ、敷き舟にはいずれも異常はないようだ。

どうやら敷き舟を一つにつなぐ縄を力ずくに引き寄せて、すべての舟を河原に運び上げたものらしい。それら敷き舟の横に、何十枚もの厚板が積み重ねられているのだが、もとより忠長にはそれらを舟のうえに敷いて、浮橋を仕立てる必要などない。一隻の舟があれば、それに乗り込み、何とか対岸まで行き着ける自信がある。

いや、貴人として生まれた忠長なれば、これまで自分で舟を操った経験などないが、それでも何としてもこの川を渡らなければならない。渡ってみせる、という気概がある。大井川の濁流など恐れはせぬ。

「南無八幡、ありがたや、これでオン母上様のもとに馳せ参じることができようほどに――」

忠長は馬を乗り捨て、浮橋に走り寄ろうとしたのであるが、そのとき――

ふいに川かがりの明かりが何灯か、一斉にともり、あかあかと河原を浮かびあがらせたのだった。河原と、それから、そこにたたずむ十人あまりの人影を。――

いずれも菅笠に、ミノをまとい、野袴を裾くくりにこしらえての、尋常な雨支度のいでたちではあるが、その笠の下から覗いている顔が、小鬢に矢傷のあるのや、刀傷あとが顔を両断しているのまで、見るからに不敵な面がまえの者ばかりである。

藩士のようではない。誰もが野太刀を無造作に腰に落とし込んでいる。こんな武士はい

ない。かといって領民のようでもない。その腰のすわりがいかにも太刀の重さになじんで落ち着いている。こんな領民はいない。

武士でもなければ領民でもない。それでは何なのか？　忠長には見当もつかない。見当もつかない——といえば、この豪雨のなか、いかにして、かがり火をそのように盛大に燃やすことができるのか、それもまた見当がつかない。ふしぎな術を心得ている者たちではある。

「……」

男たちは忠長を半円に取り囲んでいる。まるで忠長が敷き舟のところまで行くのを阻もうとしているかのようだ。——その無言の威圧感のようなものがヒシヒシと忠長を押し包んでいる。が、忠長はそんなことを恐れはしない。生まれながらの貴人であり、幼少のころより麒麟児とうたわれた忠長には、この世に恐れるべきものなど何もない。たぶん、当代将軍たる兄の家光を除いては……。

「何やつであるか。すざりおろう。無礼であろう」

忠長がそう叱りつけると、なかの一人が地に足を摺るように踏み出してきて、やにわにハハァ、と平伏し、

「われらがごとき、とるにたらぬ下賤のやからが、オン前にかように卑しい姿をさらすはお目汚しでございましょう。かように言上つかまつるさえお耳汚しであろうことは十分に心得ておりまする。さぞかしご不快のことであらせられましょう。あまりの申し訳なさ、勿体なさに、この身がすくみ、しゃれこうべの鳴る思いさえいたします。ご無礼の段は、ひらに、ひらにご容赦のほどを。まことにもって恐れ多きことながら、あえてお尋ねいたしたき儀がございますれば——お尋ねいたしまする。あなた様は駿河大納言様であらせられましょうや」

そう訊いてきたのだった。

妙なのは、この暴風雨のなかにあって、しかも男の声は地を這うように低いのに、それが不自然なほどはっきりと耳に伝わってきたことだった。

三

しかし忠長が不審を覚えたのはそのことではなかった。

——駿河大納言？

その呼ばれ方に不審を感じた。何がなし違和感を覚えた。

後世、たしかに忠長はその名で呼ばれるようになるが、このときはまだ従二位権大納言の昇進を許されたばかりで、その尊称が世に流布するまでにいたってはいない。それをこの時点ですでに正確に心得ているのは胡乱である。その一事のみをもってしても、この者

たちがただ者ではないことが知れようというものだ。何者か。
「余にものを問いただすというか。重ねがさねも無礼なやつ――」
さすがに忠長はひたいに怒りの青筋を刻んだ。甲走った声をあげる。
「うぬら何者であるか。追って沙汰をいたすほどに。きっと仕置き申しつけるほどに――神妙に名を申し述べよ」
「その儀はひらにご容赦を――われら駿河大納言様に申しあげるほどの名前の持ちあわせはござらぬゆえに、な」
「な、何――何だと」
いまだかつて忠長にこれほどまでに無礼の言を吐き、これほどまでに無礼のふるまいをした者はいなかった。さすがに忠長はあまりの怒りに目の昏む思いがしている。無礼討ちにしてくれようかと思わず刀の柄に手をかけた。
男にしてもその気配のほどは察したはずなのだ。それなのに臆する様子も見せずに、いや、それどころか、ヒョイと顔をあげると、まじまじと忠長の顔を見上げて、
「はて、お答えあらぬは、失礼ながら、駿河様ご当人と承知してもよろしいのでございましょうなあ」
その顔に薄笑いさえ浮かべてそうぶしつけに念を押してきたのだ。いうまでもなく、このような身分の者が――許しも得ぬままに――忠長ほどの貴人の顔を真正面から見上げるなどあってはならぬことだった。
「ご無礼ついでに、いま一つ、お尋ねしたき儀がございます。お見受けしたところ、大納言様にはこの敷き舟にご執心のご様子――この敷き舟をいかがなされるご所存か」
「う、うぬら下郎の知ったことか。ええい、目ざわりである。下がれ、下がれ、下がりおろう」
「下がろうにもみどもの後ろは川でございましてな」
その諧謔に、背後に居ながれる男たちのあいだから笑いが洩れた。――忠長はカッと目を見ひらいた。ありうることか。この者どもは将軍の弟たる忠長をからかっているようなのだ。
「敷き舟に乗って大井川をお渡りになろうというおつもりなら、悪いことは申しませぬ。おやめなさいませ。この雨でございます。この風でございます。恐れながら、大納言様がいまの荒れに荒れたる大井川に舟をお漕ぎ出しになられるは――さあ、左様、さしずめイヌがネズミを捕ろうとするようなものでありましょう。ご遭難なさるは必定かと。――慣れぬことはなさらぬほうがよろしゅうございますよ。ネズミを捕るはネコにおまかせになられたほうがご賢明かと――」
「余をイヌと申すか」
「なに、もののたとえでございますれば――本心から申しあげたわけではございませんの

で……」

「下郎！」

忠長の腰に鞘鳴りの音がなった。銀光がこぼれるように迸る。そのまま抜き打ちに男の首に剣を振りおろした。

忠長はこれでも徳川家指南、柳生宗矩から免許皆伝を授かっている。それはもちろん、多少、いや、おおいにゲタを履かせられてはいるが、まったくの未熟というわけではない。地に伏している者の首を斬るぐらいは造作もないことだった。そのはずだったのだが――

何と、男の体が平伏したままの姿勢で宙に浮いてフワフワと後ろに漂ったのだ。物理的にありえない姿勢、ありえない動きだった。忠長の剣尖を間一髪に見切って――しかし息を切らすでもなく涼しげな表情で――そのままそこにふわりと着地したのだ。

忠長の剣尖は河原の石に食い込んでいる。勢いあまって体がまえにつんのめった。危うく足の指を切るところだ。

「これは重ねがさねのご無礼のほどを」

男はその場に平伏した。その顔に薄笑いを張りつけたままで――。

「おのれ」

忠長は逆上した。

さらに踏み込んで男の首に剣を送った。男の体がフワリと浮かぶ。さらに踏み込み、踏み込みして、男の首めがけて二刀、三刀を放つ。フワリ、フワリ……男の体が座したままの姿勢で鬼火のように右に左に流れる。

「無礼者、そこになおれ」

「いや、その儀だけはご勘弁を――」

忠長が追う。男は逃げる……。

刀身が雨を撥ねて、二閃、三閃、銀の軌跡を残す。しかし何たる体術、何たる妙技であることか！　まるでタンポポの綿帽子を指でつかまえようとしてもその指先からそれてフワフワと逃げ行くかのように――いかにしても忠長の刀は男の首をとらえることができぬのだ。

ついに忠長は力尽きて、刀を杖がわりにしてかろうじて体を支え、河原にへなへなとくずおれた。ゼイゼイと息を切らしていた。そのときになってようやくその場の男たちが全員ゲラゲラと笑っているのに気がついたのだが――もはや、それを屈辱に思うほどの余力さえ残されていない。

「老婆心ながらご忠告申しあげまする――恐れながら、大納言様にはくれぐれもこれを剣の未熟、恥だなどとお思いにはなられませぬように――」

男はあいかわらず地に伏したままの姿勢でそういう。含み笑いの声だ。

「いかなる剣の達人、そのわざ神技の域に達した剣聖とうたわれるほどのお方であろうと――その手にあるのが剣であるかぎり、万に一つも、それがみどもの肌に触れることはございません。なに、大したことではないので……ただ、みどもの体はそのようにできておりますだけのことでな。名づけて、忍法『浮き雲』と申します」

「忍法――うぬは忍びであるのか」

男は顔をあげた。ニヤリと笑う、その唇が開きかけた。しかし――、聞こえてきたその声は男からではなしに忠長の背後からのものだった。

「左様、忍びでござる。ただし、大した忍びではございませぬ。せいぜい腕は並みの下というところでござろうか」

男の喉から、しゃあ、という声が洩れた。悲鳴に近かった。平伏したままの姿勢で浮きあがり後ろに漂おうとした。

その体めがけて雨を撥ねつつ――忠長の背後から――銀光が飛んだ。いかなる名人の手になるものであろうと、それが刀であるかぎり、絶対にその身に触れることはない……男はそう豪語したはずだった。が、あいにくそれは刀ではなかった。

一瞬、琴の音に似た、しかし琴ではない、妙なる調べが雨のなかに鳴り響いた。それはすぐさま余韻に変わり、ピーン、という金属音を残した。銀光が男の首を存分に薙いだ。ゴボッ、という音とともに、その首が飛んだ。降りしきる雨に虚ろな視線を投げかけながら遠くに落ちた。そのあとを追うように盛大に血が噴きあがった。虹のように弧をえがいた。べしょべしょと音をたてて河原に降りそそいだ。石を真っ赤に染めた。

忠長の歓喜の声が雨に轟いた。

「おお、忍法『天竪琴』！　そこにおるのか。草薙一馬――」

「オン前に」

雨のなかに人影が浮かんだ。剽悍きわまりない野性の男だ。まだ三十歳には届いていまい。その両手に長い、長い鋼の鞭を持っていた。鞭の先端から血が滴り落ちていた。

草薙一馬――と呼ばれた男は、いまや胴体だけを残した「浮き雲」の忍者の体に、足をかけると、それをドウと蹴たおした。

「おれの『天竪琴』に敗れたるを身の果報と思え。このわざに斃れる者はみな死するまえに妙なる天上の調べを聞くことができるゆえに、のう」

一馬はニヤリと笑うと、

「この鞭はもともとはバテレン竪琴の弦を、刀鍛冶が火入れをし、たたき、たたいて、さらに火を入れ、また、たたいて、何重にも縒りあわせたものでな。世にこれに抗しうるものはない。肌に触れればザクロのようにそれを裂き、骨に触れれば粉々にそれを砕き、刀に触れれば氷柱のようにそれを折る――どうだ。おぬしらも天上の調べに送られて死出の旅路につく気はないか。極楽往生したくはないか」

「……！」

男たちが一斉に立ちあがった。無言だ。殺気がみなぎった。刀を抜き払い、すばやく左右に分かれ、扇型に布陣を展開した。これほど機敏に動きながら河原の小石をいささかも鳴らすことがない。豪雨に打たれながらもその体からほとんど水しぶきがあがってもいない。つまり、この男たちはみな忍びということだろう。それも見るからに精鋭ぞろいのようだった。

四

「甲賀者か」

男たちの一人が低い声でそう訊いた。——いや、訊くというより、うちなる確信をあらためて自分自身に確認した、という意味あいのほうが強いようだ。

「なるほど、やはり噂はほんとうであったのか」

「いかさまな。駿河様がひそかに甲賀者を召しかかえている、という噂はほんとうであったのさ」

と一馬はうそぶいて、

「将軍家は、うぬら伊賀者を大量に召しかかえ、諸藩に不始末あらば——いや、たとえなくとも火のないところに無理やりに煙をたてて、それを——陋劣なるかな——お取り潰しの口実に利用する所存……その最大の標的たるは、口に出すのも恐れ多きことながら、ここにおわす忠長様であろう。ご当代・家光様にあらせられては、ご幼少のみぎりより、なにかとご自分と比べられ、そのご英邁なことを称えられた忠長様は、いわば目のうえのタンコブであろうからな。できれば早いうちに取り除いておきたい——であれば、忠長様とて、それに対抗して忍者を召しかかえるのに何のふしぎがあろうや」

「われらに対抗するとはようういうた。笑止なり——すぐる慶長十九年の忍法合戦において、うぬら甲賀者、われら伊賀者に完膚なきまでに敗れたるを忘れたか。そのために当代様が三代お世継ぎとなられ、恐れながら、そこにおわす駿河様がオン遅れをとられることになられたのを、よもや忘れたわけではあるまい。うぬら甲賀者こそ、その最大の戦犯ではないか」

「それがじつは敗れたるは甲賀にあらず——二十人の忍者のうち、最後まで生き残り、最後に一人、人別帖に名をとどめたるは、じつは甲賀の若き棟梁だったという。それがなにゆえに、伊賀が勝利をおさめたことになったのか、そのあたりのことはおれにも——いや、誰にも不可解のきわみではあるが……忠長様にあられては、もろもろの事情をよくよくご熟慮、ご判断のうえで、われら甲賀者をお召しかかえになられたのだ。うぬら伊賀者ごときが口をはさむ筋のことではないわ」

忠長がそれを聞いて、伊賀者？　こやつら伊賀者であるか、と訊いた。

「左様、それも黒鍬衆と呼ばれる者どもでございましてな。忍びのご用は絶えてなし。もっぱら江戸城の作事、普請に従事する……はは、忍びというより、まあ、人足といったほうがいいような者どもでございますよ」

と、これは一馬ではなしに、やはり忠長の背後の闇のなかから、だれか別人がそう声を送ってきた。なにか妙におどけた響きのある声だ。

「おお、その声は」

と忠長が歓声をあげるやいなや、

「緋文字火送、伺候つかまつる――」

そう陽気な声がかえってきて、ふいに豪雨の河原が真昼のようにあかあかと浮かびあがったのだ。

真昼のように――いや、地獄のように、といおうか。それも骨、肉ともに焼きつくす紅蓮地獄だ。

轟っ、という音をたてて、凄まじい火炎が忠長たちの頭上を越え、伊賀の忍びたちに放射されたのだ。橋を架けるように曲線を描きながら伊賀者たちのうえに降り注いだ。それはまさに放射としかいいようのない勢いで、しかも赤い鎌で薙ぐように二人、三人、いや、たしかに四人までも焼いた。一瞬のうちに体が燃えあがり消し炭のように瞬にくずおれる。豪雨のなかにかすかに肉の焦げるにおいがたちのぼった。

「忍法『草生炎』」

明らかに笑いをまじえた声だ。いま四人もの人間に放火したというのに楽しそうに笑っている。

石油の古称を草生水という。その忍法名はそこから取ったのか。――つまりそれは、胃のなかの石油を噴霧状にして吐き、口のまえに火をかざし、それに引火させる術なのだろう。たんに火炎を吐くだけであれば、しょせんはこけおどしの大道芸の域を出ない。が、この緋文字火送なる忍者は、ほとんど超人的なまでの嘔吐力を持っていて、それを十数メートルまで吹きかけることができるらしい。しかも、いかなる妙技によるものか、一瞬のうちに人体を焼滅せしめるまでの高温を発することができるようなのだ。まさに人間火炎放射器だ。

緋文字の放射する火炎は、風を呼び、その風がさらに火炎をあおって、暴風雨にさらされた磧は炎々と浮かびあがった。

が、闇を払い、豪雨を蒸発させるはずの火炎放射のなかにあって、「闇よ来たれ！」の声とともにかかり火が一斉に消え、そこにいかなる猛火さえも火明かりの届かない漆黒の闇が出現したのだった。

まったく物理法則に反したことであるが、彼ら伊賀者たちは意のままに闇を生み出すこ

とができるらしい。

「忍法『闇提灯』」

その声とともに伊賀者たちが闇のなかに颯然と動いた。気配だけを残してまるで姿が見えない。その気配もすぐに絶った。一斉に襲撃してきた。が――

「心得たり」

なにやら力のない低い声がそう闇のなかに響いて――

ぼんやりと人の姿が浮かんだのだ。これは変だ。どうしてこの漆黒の闇のなかにその姿を認めることなどできるのか？　それはその姿を燐のように青ざめた光がほのかに縁どっているからだ。輝線にかたどられた人の姿が闇のなかを漂い、そして――まるで雨に濡れたムク犬が体をブルブル震わせて雨滴を散らすようにその全身から青い燐光を四方八方に飛び散らせたのだ。

「わあ！」

いましも襲いかかろうとしていた男たちが一斉に声をあげて飛びすさった。飛びすさったとわかったのは――彼らの体に点々と燐光が付着したからだ。それが豪雨に打たれても消えないからだ。どんなに懸命に拭っても拭いされないからだ。

「闇提灯」もあらばこそ、その光点が体に付いているかぎり、何人といえども闇にまぎれて動くのは不可能だろう。――

なかでも何人か機敏な者は、とっさに忍び装束を脱ぎ捨てたのだが、あろうことかその光点は衣装を透かし、裸身にこびりついて消えようとはしない。まるで聖痕のように闇のなかにありありと光を放っている。

男たちの奮闘悪戦ぶりを見て、青白い輝線に縁どられた人影はクスクスと笑いを洩らし、おやめ、おやめ、という。

「どんなに消そうとしてもムダなこと――それはおれの七斗の汗じゃもの。消すに消せない忍法『蛍烏賊』じゃもの」

おお、と忠長が声をあげる。

「七斗典膳――そちも来たか」

「殿、お懐かしゅうございます。典膳めが――いや、われら『甲賀五宝連』が、かくオンまえに参上つかまつりましたからは、大船にご乗船あそばしたも同然、もはや何のご心配も要りませぬ、どうかご安心めされませ」

ボソボソという。

その光点はこの七斗典膳なる忍者の汗が付着したものなのだという。消すに消せない「蛍烏賊」！　……体内のいかなる化学物質が混入されたものなのか、いや、なによりそれほどまでに大量の汗をいかにして分泌しうるものなのか、これもまた超絶の術というほかはない。

「甲賀五宝連！」

男たちのなかからたまぎるような悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴から察するにこの甲賀五宝連なる忍者たちは伊賀黒鍬衆にも相当にその名がとどろいているらしい。しかも一斉に逃げ腰になったところを見るとその術がひどく恐れられてもいるらしい。

が――。

「ええい、怯むな、恐れるな、甲賀五宝連が何ほどのものか。われら黒鍬の名にかけて、彼らを斃せぬ法やある」

その叱咤の声に背を押されたように、残りの黒鍬衆が忍び刀を刺突にかまえ、肉も裂けよ、骨も折れよ、とばかりの勢いでドッと殺到してきた。

と、雨のなかに水しぶきを曳きながら、数えきれないほどの銀光が投網のようにひろがって、彼らのまえにバッと網の目をかたどったのだ。

すべては一瞬のことだった。それら銀光が雨粒をはじき、そのはじかれた雨が地に落ちたかどうかの刹那のことだった。

黒鍬衆の何人がそれを視認することができたものか。よしんば目の角にとどめたところで、それが何なのか、そのうちの何人が自問しえたものか疑問である。ましてや、その銀光が物理的にありえないほどの数、角度、ひろがりで投じられたマキビシだなどと確認できた者など皆無だったにちがいない。

銀光はことごとく男たちの体に吸い込まれていき、血の噴水を雨のなかにたちのぼらせた。悲鳴をあげるいとまさえない。赤い恐ろしい湯気がシューと音をたててたちこめる。

男たちは膝を屈し、背を折って、いずれも前のめりに泥のなかに倒れ込んだ。泥水に血が滲む。死してなお彼らの体には「蛍烏賊」の光点が青白く浮かんでいた……。

「馬鹿めらが。七斗の『蛍烏賊』をただの闇のなかの目印とのみ思うたか。あれらはみなうぬらを地獄に誘う一灯であったのだ。わがマキビシの『千手観音』――うぬらを天界に導く法灯であったとさように心得よ」

笑いを含んだ声が雨降り夜に染み入る。

それを聞いて、

「おう、遊左天信、そちも居るのか」

忠長がそう歓喜の声をあげた。

「大儀である、甲賀五宝連、よくぞわがもとに馳せ参じてくれた」

「はは」

四つの影が地に伏した。

「身に余るお言葉でございます」

雨に打たれ、地に伏しながら、彼らは息さえ乱していない。静かに、穏やかに、微笑みすら湛えているのであった……。

五

沛然たる豪雨のなかを、一陣、忍びの魔風が引き裂いて、血風吹きすさび――凄絶というのも愚かしい――あとに十数体もの惨たる屍のみが残された。

いや、正確には屍すら残されなかったというべきかもしれない――「こう、お待ちあれ」四人の忍者たちはよほどこういうことに慣れているらしい。手分けして動き、死体を運び、次から次に無造作に大井川に投げ込んで、河原の血はすべて雨に流されるままにまかせた。

わずか四人の「甲賀五宝連」が十数人もの黒鍬衆を殲滅し、かつその死体を片づけ終わるのに、ほんの十分と要さなかった。

そのうえで雨を避け、河原のさしかけ小屋に、忠長を案内する。

すでに小屋のなかに火は焚かれ、乾いた衣類、菅笠、ミノが用意されている手回しのよさである。

「要らざる忠義だてをいたすな――余は先を急ぐ。このようなところで悠長に時を過ごしてはおられぬのだ。すぐにも江戸に向かう。一刻も早く、母上にお会いせねばならぬのだ。さもないと――」

間にあわぬかもしれぬ、とはさすがに口に出せずにいる。考えただけでも身の毛がよだつ思いがする。

「いさい承知つかまつってござる。いますぐに浮橋の用意をさせますほどに――恐れながら、どうか四半時、お待ちなされますように。なに、われらが江戸まで供奉いたします。さすれば、明日早々には、お城にオン到着の運びとあいなりましょう」

なかでも、もっとも年かさの七斗典膳がそう口上し、ちらり、と若い草雉一馬、遊左天信に視線を投げる。二人は忠長に叩頭し、すばやく外に出ていった。浮橋の支度に向かうのであろう。

忠長は火に両手をかざし、

「それにしても解せぬ。なにゆえに伊賀の黒鍬衆が余が大井川を渡るのをじゃませねばならぬのか」

「さあ、恐れながら、あやつらに謀反するほどの度胸があるとも思われず、またその理由があるとも思われず……伊賀の黒鍬衆といえば、とるにたりぬ虫けら同然の軽輩ではあっても、一応は幕府直参の身――それがなにゆえにオン殿のご意向にそむいたのか。道理がつきませぬ」

「うむ、そのことよ。そもそもあやつら、何者の意を受けて、余の行く手を阻もうとしたのであるか。駿河、遠江五十五万石を領する――いや、いまはもう天下の大納言たるべき

忠長がことを何ゆえもって恐れもなしにじゃまだてしたのか」
「それはわれらにもわかりかねますが――なに、すぐにも探り出しまするほどに、ご安心なされませ。たかが黒鍬衆、なにほどのことがありましょうや。われら甲賀五宝連にかかれば赤子の手をひねるようなものでございますれば――」
べつに大言壮語を吐いているわけではない、彼らにしてみればたんに事実を述べているにすぎない。その証拠に、七斗典膳は緋文字火送と顔を見あわせ、たがいに自信満々の笑いを洩らした。
「左様か」
忠長はいまさらながらに――わが子飼いの忍者ながら――この甲賀五宝連の凄まじさに瞠目させられる思いがしている。
が、それでもなお、このとき忠長の口をついて出たのは、彼らをねぎらう言葉ではなしに、もう一人、甲賀五宝連の棟梁を気づかう言葉であった。
「どうしたのだ、甲賀五宝連、ひとり足りぬではないか。かんじんの棟梁の姿が見えぬ。甲賀八郎はいかがいたしたのだ」
「は……」
剽悍無比、何者をも恐れぬかのような二人の男たちが、一瞬、返事に窮し、言葉につまったかのように見えた。

バツが悪そうに、たがいに顔を見あわせ、まるで乙女のように――彼らにこれほど似あわぬ言葉もないだろうが――モジモジしていたが、そのうちに緋文字火送が重い口を開いて、
「われらが棟梁・八郎めには是非もない用向きがございまして……恐れながら、大井川にてオン殿をお迎えし、お送りするのには、われら四人が出張れば、それで十分であろうかと、われら、そのように愚考いたしました次第でありまして――あいや、ご不快のほどはごもっともなれど、どうか、どうか、お叱りあるな」
忠長が何か言いかけるのをさえぎるように火送は片手をあげると、
「オン殿もご承知のように、甲賀組・棟梁の重責にあるとは申せ、八郎はまだほんの十二の子供にてございますれば――われらとともに出動したところで、とうていオン殿のお役に立つとも思われず――いや、それどころか足手まといになるのは必至にて……」
「かばうな」
「あ、いや、それがし、かまえて棟梁をかばうなどという気持ちはさらさらなく――ただ八郎めは、まだまだ刀を持つよりは、鞠で遊ぶほうが似あいの年頃にて……のう、七斗典膳老」
「おうよ。そのことよ。尾籠ながら申しあげまする。われらが棟梁は、ついこのあいだまで――かく申しあげるもまことにはばかられることながら――ね、寝小便を洩らしていた

ほどで……」
「馬鹿を申すな」
忠長は笑った。
「十二歳といえばもう子供ではない。武将の子であれば初陣に出てもおかしくはない年齢ぞ。ましてや、あの甲賀八郎ではないか。何であれが寝小便など洩らすものか」
「は……」
二人の忍者はまた平伏する。
彼らにしてみれば忠長は息子、どうかすると孫のような年齢なのだが、それでもその言葉に恐れ入ってひれ伏すのは、さすがに生まれながらの貴人の、おのずからそなわった威厳ゆえだろう。それに——
これは忠長の言葉のほうが正しい。このころ男児の元服は十一歳から十六歳の間とされたし、女児は十二歳になればもう実質的な嫁入りの年齢とされた。数えで十二歳——現代の満年齢からいえば十一歳——になる男児を子供と呼ぶのはすこし、いや、大いに無理がある。
「それにあれには例の術があるではないか」
との忠長の言葉に、
「例の術？」

二人の忍者はけげんそうに顔を見あわせる。
「さればよ、八郎にはあのまかふしぎな瞳術がある」
「おお！」
「いかにも——」
「余はまだ見たことはないが、話に聞く。聞いただけでも恐ろしい。考えるだに身の毛がよだつ——ここに八郎に害意を持つ者あり、八郎にあだをなそうとする者あり……されど、ひとたび八郎が念をこめて見つめれば、その害意、そのあだは、そっくりそのままその者に返ってくることになる、と聞いた。あたかも魔にとり憑かれたように——とのことであった。それはほんとうのことであるか」
「神明に誓ってほんとうでござる」
火送は重々しくうなずいて、
「わが棟梁ながら、まことにあのお方の瞳術は凄まじい。刃を向ける者はその刃でおのれの肉を切ることになる。弓を射ようとする者はその矢尖でおのれの喉を突くことになる。いかなる兵法者、術者であろうと、あのお方の瞳術にかなうものではございません」
「そうであろう。そう聞いた。さればよ、それほどの者が何で子供でなどあるものか。あの瞳術、何といったか」
「は——敵のいかなる術も一突きにつらぬき通す矛のような術でありますれば、われら、

それを矛眼術と呼んでおります――」

いまのいままで棟梁の八郎を子供よばわりしていたはずの火送が、これはもうさすがに言い逃れはできない、と観念したのか、ついにそう公言するにいたった。その声に誇らしげな響きを隠し切れずにいるのがおかしい。

「それほどの瞳術を持ちながら……あやつ、横着なやつ――面倒事はすべて部下に押しつけて、自分はどこでどう遊び呆けているものやら……」

忠長はさらにそういいつのったが、その口調は怒っているようではない。それどころか、笑みを含んでいるようにさえ見えた。それも苦笑混じりというより、多分に好意をはらんだ笑みのように見えるのだ。――どうやら忠長はその甲賀八郎という少年を嫌ってはいないようだ。それどころか、あやつ、横着なやつ、といいながら、その声には懐かしさえ滲ませている。

好意、といえば、甲賀八郎を懸命にかばおうとする緋文字火送、七斗典膳のほうも、その口調に若い棟梁に対する好意を隠し切れずにいる。まだ十二歳の若さで、駿・遠五十五万石を領する貴人、それに剽悍きわまりない忍者二人の好意をこれほどまでに全幅に勝ち取っている甲賀八郎、並みの若者ではなさそうだ。

「まことに、わが棟梁ながら、どこでどう遊び呆けているものやら――甲賀にも、もはやその名をあげ、指を折るべきほどの術者は少のうござる。われらのほかに何人かを数えるのみ。それもわれらよりはだいぶ腕が落ち申す。しかるに――なにゆえか棟梁はきゃつらと一緒にいるほうを好んでおいでのようでござる。あたら、あれほどの瞳術を持ちながら、なにを物好きにあのような者たちとつるんでおいでなのか。それがしにはそれがどうにも解せませぬ」

火送は顔をしかめながらそういう。

要するに二軍ということか。忍者の世界もかなり人材が枯渇しているらしい。八郎という少年は甲賀の二軍と共にあるのを好んでいるらしい。――慶長十九年の伊賀と甲賀の死闘が忍者という存在のその後の衰運を招いたことは否めない。それがその後に影響を及ぼさないはずがない。なにより、戦国時代の終焉が忍者という存在を必要としなくなったことがその衰運の最大の要因になったのかもしれない。

「もはや忍者の時代ではない、ということのようでござる。棟梁はポツリとそのように洩らしたことがござる……」

と七斗典膳がいう。

「だからというて、典膳老、なにゆえそれが、棟梁があやつらと一緒にいなければならぬ理由になるのか。わしにはそれがわからぬわい――」

火送は納得しかねるようだ。

と、そのとき――ガタン、と音をたてて引き戸が開けられた。風が吹き込む。雨が降り

込む。炎が揺れる……その揺れる火あかりのなかに遊左天信が入ってきた。妙にフラフラとした足どりだ。その目は火を映してはいるが、空の一点にボウと向けられ、洞のように虚ろだ。なにか心ここにあらず、といった様子だ。いつもの若さと生気に満ちあふれた天信とは別人のような印象がある。

ふとその様子に不審でも覚えたのか、

「これ、早く戸を閉めぬか。殿のオン身に風が当たる。雨が当たる――」

七斗典膳がそう咎めるように声をかけるのに、

「おれもそうしたいのは山々なのだが……あいにく、いまのおれにはそれができかねるのだ――」

天信はボソボソと低い声で応じる。

「何？　いま何と申した？」

「どうかしたのか、天信、なぜに戸を閉めることができぬというのだ」

ふたり同時に何らかの異常を感じとったようだ。顔色を変えた。口々にそう質問しながら立ちあがった。忠長をかばってその前に立ちはだかる。

「さればさ、それは――」

天信の首がゆっくり前に傾いていった。見れば「千手観音」のマキビシがその首をグルリと縫い目のようにとりまいている。マキビシの縫い目が、ピッ、ピッ、と弾けるように

裂けた。血が飛び散る。見るみる血が滲んで赤い首輪がその頸部をとりまいた。胴から離れて落ちた。落ちながらもその口だけがパクパクと開閉した。空気を洩らすように怨めしげな声をつむいだ。

「もうおれが死んでいるからよ」

六

「しゃぁーっ」

悲鳴とも驚声ともつかぬ声が二人の忍者の喉をつんざいた。彼らの体が小屋から外の闇に飛鳥のように放たれた。

「殿、ご用心めされい、ここをお動きあるな」

「ごめん」

その声を残して――。

暴風雨の暗夜に飛び出した。二人ともに忍び刀を抜き払っている。敵の姿を求めて疾駆した、剣光が流れ星のように尾を曳いた。

「草薙一馬、どこにいる、出てこい」

「天信は死んだぞ。天信の身に何があったのだ。ええい、返事をせぬか、出てこぬか、一

馬」

口々にそう叫びながら走る。

降りかかる雨に全身を青白く縁どられ、さながら暗夜を飛ぶ人魂がごとし……その姿は生きながらすでに死人のようであった。それも道理——。

——わが仲間ながら、遊左天信の「千手観音」の術は凄まじい。前後四方八方に、おびただしいマキビシを同時に放ち、複数の相手を一時に斃す……じつに瞠目すべき、恐るべき術である。なまなかの術者では到底これには太刀打ちできるものではない。まずは一騎当千の忍者と見なすべきではなかろうか。

これが七斗典膳、緋文字火送の共通した思いである。

七斗典膳には大量の汗を噴射して相手に燐光の痕跡を付着させる「蛍烏賊」の術がある。——

緋文字火送には人を骨肉ともに焼きつくす高熱の火炎をはるか彼方まで放射する「草生炎」の術がある。——。

それぞれ、おのれの術に絶大なる自信を持っている二人だが、それでも遊左天信の「千手観音」の術には一目も二目も置かざるをえないし、その凄まじい威力は認めざるをえない。

あり得ることか！　その遊左天信がこうもあっけなく斃されようとは——

その骸を目のあたりにしても信じられぬ気がするし、相手はどれほどの術者であろうか、それを想像するだにビンがそそけ立つ。——武者震い、といえば聞こえはいいが、どちらかというと恐怖心がまさる。

そうであっても、いや、そうであればなおさらのこと……。

甲賀五宝連はいわば五本の指なのだ。一人が五人、五人が一人——の鉄の誓いがある。鉄城の血盟がある。その一本をこうもたやすくもぎ取られ、何の面あって、棟梁の甲賀八郎にあいまみえることなどできようものか。五宝連の精鋭たる者、その名に賭けても、仲間のかたきも討たずして、おめおめ退散することが許されるのか。否！　断じて否である！

「南無、天信、見ておれ。うぬの無念はきっとわれらが晴らしてくれようほどに——」

「花も供えぬ。香も焚かぬ。かたきの首がなによりの供養じゃ」

四辺すべて闇に閉ざされ、雨は狂って、風は猛り、ただもう海鳴りのように轟きわたる。その雨を裂き、風を突いて、二人の忍者は敵を求めてひたすら奔る、奔る……。

そして——。

「お……」

「あれは」

二人、同時に足をとめる。たがいに顔を見あわせる。

忍者の極限まで研ぎすまされた聴覚があればこそのことだ。常人にはとてもその音を聞き取ることはできない。無理だ。

天地をどよもし、びょうびょうと鳴りわたる水と風の咆吼のなかに——。

聞いた。聞いた。たしかに聞いた。何を聞いた？　美しい、あえかなる、しかしその底に鋼線の強靱さを秘めた、琴の調べにも似たその音を……あれは……。

「一馬の『天竪琴』」

「どこだ、一馬、どこにいる」

二人はあせって闇のなかに声を放った。すると——。

「おおい、おれはここだ、ここにいる……」

弱々しい、それでいて不吉に不穏な鬼韻とでもいうべき響きを含んだ声が、ひょうひょうと風に運ばれ、伝わってきた。深い闇を孕んだ河原のどこかからかすれかすれに聞こえてきた。

「……」

二人、必死に闇の奥に耳を澄ましたが、降りしきる雨の音、吹きつのる風の響きにさまたげられ、もはや一馬の声も、天竪琴の調べも伝わってはこない。

「聞いたか、七斗老」

「うむ、聞いたわい、たしかに聞きはしたが」

「あの声は」

「おうよ、あの声は……」

あの、いまにも途切れがちに、弱々しい声が、はたして本当に一馬の声であったろうか？　その疑問が二人の忍者の胸に巣くって離れない。あの剽悍きわまりない、岩をも両断する天竪琴の手練を鮮やかに披露する草薙一馬ともあろう男が、あのように弱々しい声を出すものだろうか？　二人はいやでも天信の無惨な死に様を連想せずにはいられなかった。もしかしたら一馬も死んだのではなかろうか、という不安が胸をよぎる……ビンがそそけ立つ思いがした。

が、そんな二人の不安を嘲弄するように、あるいは誘うように、

「おおい、七斗老、火送、いったい何をしておるのだ。来い、来い、来ぬかや。こうして、おれの呼ぶ声が聞こえぬか」

とまた一馬の声が陰々と伝わってきたのだった。

一瞬、二瞬、二人は顔を見あわせたが、

「もはや、これ以上の猶予はならぬ。行くぞ、火送」

「心得たり、七斗老」

次の瞬間、思い決したようにパッと闇のなかに飛び込んでいった。妖雨ふりしきり、魔風ふきすさぶ闇のなかに……。

七

「か、一馬……」

あまりのことに二人は絶句した。

あの水車小屋のまえである。用水が大きくうねり、しらじら際立って、あとから追いたて、追いたてするように——水車を急速に回転させている。その軋む音が人のうめき声のようだ。慟哭のようだ。そこに——一馬はぶら下がっているのだった。

この水車小屋は——小屋とはいいながら——かなり大きい。三角の藁葺き屋根が、合掌するように天に沖している。その屋根板を支える棟木から、長い垂木が軒桁へと架け渡され、前方に突き出している。一馬の体はそこからぶら下がっているのだ。いや、ただ、たんにぶら下がっているのではない。それは——。

——聞こえる、聞こえる……。

天竪琴の妙なる調べが、弱く、しかし奇妙に強靱に、つづいている。余韻、嫋嫋と鳴りわたり、ついに尽きることがない。それというのも、一馬の体を吊しているのがその天竪琴だからだ。一馬はおのれの命を糧に天竪琴を奏でているからだ。

これまで七斗も、火送も、数え切れぬほど草薙一馬のあやつる天竪琴の調べを聞いてきた。しかし、いま、あえかに、激しく、みやびに、強靱に鳴りわたるその調べほど美しい音色は聞いたことがない。まことに魂を天に誘われる心地がする。ただし、天は天でも、魔天に——ではあるが。

天竪琴の鳴りわたるとき必ずや人が死ぬ。ただ、今回、いましも天竪琴の調べに死なんとするのはまさに草薙一馬その人なのだった。見るべし！　おののくべし！　垂木から長々と垂れ、一馬の首に二重、三重に食い込んだ天竪琴は、さらにその先を、はるか水車にまで延ばしているのだった。

きりり、きりり、きりきりり。

水車が回転するにつれ、天竪琴の端は着実にその水輪のなかに引き込まれていく。じわじわと容赦なく、確実に——一馬の首を絞めていくのだ。

それを目のあたりにしながら七斗たちにもどうすることもできない。いかに彼らが卓越した体術の持ち主であろうと、この荒れ狂う暴風雨のなか、短時間のうちに、天をつく水車小屋の屋根までよじ登るのはさすがに不可能だからだ。

恐ろしいことに、むざむざ目のまえで仲間を死なせなければならない。いや、たしかに、それも恐ろしい。恐ろしいが、それよりさらに恐ろしいのは……あろうことか草薙一

馬がそれを望んでいることだ。従容として——いや、むしろ陶然として——それを受け入れていることである。

「き、聞こえるかや、七斗老、火送……」

すでに一馬は常軌を逸しているのかもしれない。文字どおり、断末魔の苦痛のなか、なのに恐怖にではなく、喜悦にうち震えながら、こうかすれた声を放つのだ。

「こ、これだ、この調べだ、この音色だ。これまで、誰を、ど、どう斃しても、ついに意にかなう調べを、か、奏でることができなんだ。わが天竪琴、ついに天上の調べに達することなく終わるのか、と——お、おれはわが才の未熟を怨んだぞ、嘆いたぞ。そ、それが、いまこそ、おうよ、いまこそ天上の調べに到達し得ることができたのだ。祝うべし、慶ぶべし、ついにわが忍法、天技に達したり。七斗老、火送、おぬしたちも慶んでくれ、祝うてくりゃれ……」

一馬は狂したように笑い声をあげた。その笑いの波にあおられて前後にその体を揺らす。雨のなかを振り子のように。あまりに激しく揺れすぎた。それがいけなかった。とたんに、ぷつり、と首が切れた。赤い血条を後ろに曳いて、首は雨のなかを飛んだ。放物線を描きつつ、飛んで、飛んで……。

「わ……」

「おう」

湿った泥の音をたてて、二人のまえに落ちてきた。なかば血泥のなかに沈みながら、仰向いたその顔は、なおも嬉しげにニンマリと笑っているのだった。

「……」

さすがに七斗たちは声も出ない。うめくもならず、哭くもならず、ただ紙のように白いその顔に惨たる表情を刻しているのみである。狂したように一馬の首を見つめるばかりである。

と——。

闇に聳える水車小屋の屋根から男の笑い声が降ってきたのだ。男？　いや、これは少年の声といったほうがいいかもしれない。若々しい、ガラスの鈴を振るように澄んだ少年の声。それが暴風雨にさえぎられずに七斗たちのもとに届くのが不可解でもあり、不気味でもある。それが——。

「忍者の業はかくのごとし、わが首を魔天に捧げても、術の完成を望んで、その欲はついにとどまるところを知らず」

そう聞こえて、一転、嘲笑めいた響きに変じると、

「とはいっても、あの術をなあ、あの子供だましの、たかの知れた天竪琴をなあ——思えば、はかなや、不憫なり。甲賀五宝連の草薙一馬、ついに井の中の蛙のままで生涯を終えることとあいなったか」

妖として、水車小屋の屋根に人影が浮かんだ。あたかも体重など知らぬげに、片足、爪先立ちで、いとも軽々と屋根のうえにとまっている。

奇怪なり。この闇夜にあって、その人影だけは銀霞かすむ微光を一身に集め、冴え冴えと暗夜に浮かんでいるのだった。あたかも、その周囲にだけ月影が射している、とでもいうかのように。

しかも、それが大振袖も艶やかな前髪だちの姿なのだ。遠目にも、珠を抱いたような美少年であることが見てとれた。この嵐だ。もとより月は隠れて姿を見せぬが、その少年の姿は燦と耀いて、月にも見まがう美しさなのだ。

——これは生身の人間か。とても人とは思われぬ。あるいは物の怪、狐狸のたぐいではないか……。

「まさか」

七斗はつぶやいた。その表情は混迷のきわみに達している。

「一馬や天信はこやつに敗れたというのか」

こやつに——こんな年端もいかぬ少年に、という意味だ。若い野獣といってもいいほどに獰猛だったあの二人が、よりによってこんな子供に、という意味だ。

「な、何やつ——」

火送が遠く水車小屋に声を送る。低く、怒りがこもった。

「何者かとお訊きなさるか。人に名を訊くからには、まずはおのれから名乗られるが礼儀でありましょう。とはいうものの、ふふ、おまえ様がたが甲賀五宝連であるのは、とうに知れていることではございましょうが……」

それに応じて美少年がからかうように答えた。

「重ねて問う。何者か」

火送のその声は、たしかに動揺を隠し切れずに震えてはいたが、さすがに音に聞こえた甲賀五宝連の緋文字だ。動揺はしていても、怯んではいない。それどころか——。

「やるか」

七斗がそうささやくのに深々とうなずいた。その顔に不敵な笑いを刻んだ。

「おうよ、何でやらずにおくものか」

どうやら火送は少年との距離をはかっているようだ。肉を焼き、骨をも溶かす「草生炎」……この術の凄まじさは火送の吐く火炎が優に水車小屋の屋根まで届きうることだ。しかも、これぐらいの距離なら火勢が衰えることもない。そうなれば、哀れ、はかなし——あたら絶世の美少年が骨肉ともに灰に帰すほかはない。

「やるぞ」

「うむ」

そう、うなずいた七斗は、しかし次の瞬間、何を見たのか、顔色を変えて、

「あ、いかぬ、待て」
と叫んだ。

八

が、その声も聞かばこそ、火送は一気に数メートルを跳躍したのだ！　飛距離も長ければ、跳躍点も高い。その頂点で、体を海老ぞりに反らすなり、顔を仰向かせ、美少年に向けた。くわっ、と口を開けた。その口腔が紅蓮の炎に真っ赤に染まった。シュッ、と音をたてて、一筋、蒸気が噴きあがる。

身を空中に置いて、しかもその不自然、不自由きわまりない姿勢から、火送は轟然、炎を吐いた。降りしきる雨が蒸発してボウボウと白霧に変わった。一条の火箭がまさに溶岩のように滔々と流れた。流れたはずが――。

あり得ることか、それが突然、逆流したのだった。炎は一気に火送の腹腔に戻った。黒い忍び装束を透かしてもその火焔が内臓を焼きつくすのがはっきり見えた。胃、大腸、小腸が黒々と浮かびあがる。腹部が鞠のように膨れあがり、縦一直線にめらめらと裂けた。

「ぐはぁーっ」

このとき火送はたしかに炎を吐いた。口からではなしに、腹から――。瞬時のうちに、

全身、炎に包まれた。文字どおりの火ダルマとなって地に落ちた。そのときにはもう絶命していたはずだ。七斗の足元まで転がったときにはすでに灰のむくろと化していた。もはや人の姿さえさだかではない。ブスブスとくすぶっている。全身から薄く青い煙をたちのぼらせていた。

それを見下ろす七斗典膳の顔が、

「火送、おぬしまでが……」

悲壮な鎮魂の表情にいろどられた。血を吐くようにいった。

「わしがそれに気づくのが、いますこし早ければ、こうはならなかったかも知れぬものを……許せ、許してくれ」

もっとも七斗はついさっき自分が見たものが何を意味しているのかわかっていない。そもそも何かを意味していたのかどうかさえわかっていない。ただ一瞬、ほんの一瞬ではあるが、水車が逆回転するのを見たにすぎないからだ。

水車が逆回転した？　そうなのだ。たしかに逆に回った。が、それが何だというのか、何を意味しているというのか？　もとより七斗にわかることではない。すべて理解の外にあることだからだ。が、水車が逆回転するのを見たときの、何とも言いしれぬ恐怖、全身総毛立つようなその思いだけは、いまもありありと体の底に氷柱のように凍りついて残されている。

とっさに、火送を制止しようとしたのも、その戦慄ゆえのことだった。結局は間にあわなかったのであるが……。

だが――

火送から一転、美少年に向けられたその視線は、決して敗者のそれではなかった。まだまだ、この老忍者は敗北感に身をゆだねてなどいない。その目に凄まじい怒りをみなぎらせ、真一文字に引きむすばれた唇に鬱勃たる闘志をみなぎらせている。

「音に聞こえし甲賀五宝連、噂では『伊賀五花撰』にまさるとも劣らない術者ばかり、ということでござったが――はてさて、つまるところは噂倒れでしかなかったか。それとも、そもそも伊賀五花撰にしてからが大した忍者たちではないということか」

美少年はあいかわらず相手を嘲弄する口ぶりを隠そうとはしない。世にも美しい花ではあるが、この花は凄惨なトゲに覆われ、毒の蜜をしたたらせている。この世にありうべからざる魔花としかいいようがない、その魔花が――

「おお……」

七斗はカッと目を見開いた。忍者にあるまじき不覚ではあるが、驚きのあまり、ヨロヨロと後ずさってしまう。

その魔花が、ツと屋根を蹴ったのだ。飛ぶ、というより浮かんだ。雨がその輪郭を青く輝線で縁どる。風にその大振袖が翼のようにはためいた。そして、ありうることか、人間大の鳥――、それもさながら魔界の美しくも妖しい鳥――のようにフワフワと屋根から離れたのだった。そのまま妖妖と風雨のなかを下りてくる。まるで重力などというものはこの世に存在しないかのように。

「ああ……」

さしもの七斗典膳もそんなものを見せつけられては呆然と立ちすくむのほかはなかった。超絶の体術！　いや、そもそも、これは人間わざでかなうことなのか。これはこの世のことなのか……いっさいの思考力を奪われたように感じた。脳髄が痺れるような恐怖にみまわれた。

――これもまた忍法なのか。

自問し、いや、違う、と頭のなかで否定する。こんな忍法が世にあっていいはずがない。それでは――忍法でなければこれはいったい何なのか？　その疑問にうながされるように、チラリ、と水車に視線を投げかけたのはさすがというべきか。七斗のなかで何か無意識のうちに感応されるものがあったからに相違ない。

はたせるかな、このときも水車は逆回転していた。しかし、それが何を意味しているのかは、あいかわらず七斗にはわからない。想像すらつかない。

美少年は、トン、と地を踏んで下りたった。これほどの豪雨だというのに不思議なまでにその体は濡れていない。軽やかに大振袖をさばいて、

「いかが」
艶然と微笑んだ。
「……」
それを見て七斗は胸のなかに慄然と冷たい氷柱が凍りつくのを覚えた。七斗典膳とて優れた術者であるし、五宝連の仲間たちの術がどれほど卓越したものであったかも心得ている。しかし、この美少年からは、なにか人間界ではなしに、超絶の異界からの術者でもあるような印象を受けるのだ。必ずしも仲間を殺されたからばかりではなしに、また宙に舞う不思議な体術を見せつけられたからばかりでもなしに……それ以前に、本能的に敗北を受け入れざるをえないようなところがある。圧倒的な力の差を感じずにいられないのだ。——そも、これはたして、ほんとうに人であるのか？
「さればさ」
が、さすがにもう七斗は動じない。
「名を訊こうか」
その声も落ち着いていた。もはや覚悟はさだまった。こんな化け物を相手にして生きながらえることなどできようはずがないのだ。せめてものことに相討ちにもっていければ、と思う……。その覚悟だ。
「成尋衆——と申しあげたところでご存知あるまいが、わたしは成尋衆の一人で、孔雀啄むという者」
「じょうじん、しゅう……？」
少年のいったとおりだ。そうと聞かされたところで、それが何なのか、まるで見当がつかない。ただ、くじゃくついばむ、を「孔雀啄」とわかったのは——妙な名ではあるが——不思議はないとして、じょうじん、に即座に「成尋」の字を当てはめて解することができたのはどうしてなのか。それがいつか、どこかで聞き知った名だからではないだろうか。
——そうだ、たしか成尋という名の僧侶がいたはずだ。聞いたことがある。何百年も昔の高僧の名だったはずだ。はて、あの坊主は何をしたのだったか。
七斗は頭のなかで首をひねった。
その高僧と「成尋衆」とやらは何か関係があるのだろうか。それとも、ただ偶然に名前が一致しただけのことなのか。そもそも成尋という僧が何をしたのか思い出せない以上、七斗にもそれ以上のことを考えるよすがとてあろうはずがない。それに——。
いまはそれどころではない。よけいなことを考えている暇などない。それよりも……。
——どうして水車の輪が逆回転するのか、そのわけを知りたい。
七斗はまた水車を横目で見たが、いまは水車は正常に回っているようだ。あれがときに逆回転するのはなぜなのか？　それを読み解くのが、いまのこの窮状を打開する最良の策

であるように思える。もちろん、何の根拠もないことではあるのだが。……確たる根拠もないままに、ただそのわけを知りたい、何としても知らねばならぬ、という焦燥感だけがきりきりと彼の心魂を食んでいた。

「甲賀五宝連、棟梁の八郎様はご不在であり、ここにはおられぬ。四人のうち、すでにお三方は死にそうらえた。残るは、七斗典膳、あなた様だけとあいなりましたなあ。さて、これから、いかがいたしたものでございましょうか」

と孔雀啄は笑う。

その大輪の花がパッと咲いたような笑いの何と冷ややかにして美しいことか。あまりにも艶麗で、この窮地に立たされながら、なお七斗はその美貌に目を奪われずにいられない。それだけの美貌でありながら、その全身に名状しがたいまでの殺気を孕んでいるのが、なおさらに恐ろしい。

もっとも、この少年ひとりで五宝連のあれほどの手練れを三人までをも抹殺したとはとうてい信じがたい。成尋衆と名乗るからには、ほかにも刺客はいるのではあろうが——それにしても、だ。この少年の恐ろしさは他にたとえようもない。

「解せぬ。その成尋衆とやらが、何ゆえもってわれら甲賀衆に敵対するのか」

「説明すれば長くなります」

また孔雀はニンマリと笑って、

「せめてもの慰めになりますかどうか、われらはなにも甲賀五宝連のみを敵とつけ狙っているわけではありません」

「何？」

「さきほど話に出た伊賀五花撰も今夜のうちに殲滅する運びとなっております。聞けば、何年かまえに、伊賀と甲賀の精鋭同士それぞれ十人ずつが、最後の一人になるまで殺しあったとか。あなた様がたも、地獄で思う存分、忍法合戦をなさればよろしかろうかと——」

「なぜだ。なぜ、五宝連と五花撰を殲滅しなければならぬのだ」

「ですから話をすれば長くなると申しあげたではありませんか。それに、失礼ながら、ことをわけてお話ししたところで、とうていあなた様にご理解いただけるとも思えず」

「なるほど、つまりは問答無用ということか」

「しかるべく」

「されば さ」

七斗はすこし身を引いて、凄絶な笑いを頬に刻んだ。

「おれにも引導を渡してもらおうか」

九

が――。

そのときには七斗はパッと飛びすさり、上半身から忍び装束を剝ぎ取っていた。全身からそれこそ七斗もの汗がほとばしる。汗は雨中に散って、しかし雨にまぎれず、まさに蛍烏賊の燐光を発しながら、ザアッ、と音をたてて孔雀のうえに降りかかっていった。

蛍烏賊は蛍烏賊でもこれは通常の「蛍烏賊」ではない。たんに人の体に付着して燐光を放つにとどまらず、強烈な毒の成分を有しているのだ。それを体に付着させた者は、その毒をヒフから吸収し、ほんの瞬きするうちに、無惨に悶絶死を遂げることになる。ただし全身から毒を分泌させた術者の側も、その毒にいわば自家中毒せざるをえない。これは文字どおり「毒をもって毒を制し」て、術者、被術者もろともに死にいたらしめる必殺捨身の諸刃の術なのだった。

若いときに一度だけ、この術を使ったことがある。そのときにも、その後、長く死線をさまようこととなった。ましてや、年を重ね、免疫力を弱めているいまの七斗がそれに耐えられようはずがない。死ぬだろう。それでもいい、それでもかまわないから、仲間三人の命を奪った孔雀に一矢報いたいと思いつめたうえでのことだ。だから、全身から毒汗を

放ちながら、それと同時に笑い声を放ってもいた。勝った、と思った。これで甲賀五宝連の面目を保ち、八郎様にも顔向けできる、とそう思ったのだった。が、このとき――。

全身から毒汗を放射したのも七斗典膳、その毒汗を全身に浴びたのももまた七斗典膳なのであった。毒汗を分泌するだけでも死にいたる――ましてや、それをまた全身に浴びたとあっては、耐えられようはずがなかった。七斗はたまぎるような悲鳴を放ち、その場で悶絶死することとなったのだ。

七斗は自分がどうして「蛍烏賊」の毒汗を浴びることになったのかついにわからぬままに死ぬことになった。

ただ、死ぬ寸前、生死を分かつその刹那に、またしても、あの水車が逆回転するのを見たのだった。たしかに見た。それが何を意味するのかさだかに覚えず、また仲間たちがどうしてあのように無力に孔雀に倒されたのか、いまだにそれが判然としないまま……しかし、一瞬の奇怪な想念が誦呪のように頭をかすめたのだった。すなわち、

――時が逆流した！

のだと。

なにかがわかった。わかったような気がした。いや、わかったとはいえないかもしれない。その、わかったなにかが、そもそも何を意味しているのか、その肝心なことが皆目わからないのだから――。

が、こうなってしまった以上、もはや、それを考えるべきは自分ではない。それを考えるべきは——

——甲賀八郎。

棟梁だ。

そして、それを八郎に伝えるべきは——七斗の脳裏を何人かの甲賀忍者の顔がよぎった。

いずれも若い、それだけにすこぶる頼りない面々だ。あの者たちに頼ってほんとうに大丈夫か？　大丈夫であろうはずがない。若くても草薙一馬のように能力があれば甲賀五宝連のなかに参加を許される。それがそうされなかったのは——

端的に、彼らにそれだけの力がなかった、ということなのだから……。術においても、その心がまえにしても、じつに心もとない、ふがいない、としかいいようのない連中なのだった。

しかし——。

どんなに頼りなく、その能力に疑問があろうと、八郎を助けて働くべきは、あの者たちしかいないだろう。

いかに八郎が優れた才に恵まれていようと、たった一人で、あの孔雀啄のような超絶の忍者——忍者？　あれがほんとうに忍者であろうか——と戦って勝てるわけがないのだから。

頭のなかで彼らの名を呼んだ。

——根来転寝……碁石才蔵……甲羅式部……蜩七弦……。

呼べばなおさら不安はつのるばかりだ。いずれにせよ最後に呼ぶべきは、

——甲賀八郎。

その人の名だ。

その人の名を呼びながら七斗典膳は晦冥たる死の淵に滑り込んでいった。

その先には懐かしい三人——緋文字火送、草薙一馬、遊左天信——の笑顔が七斗のことを待ちうけてくれていた。

成尋衆、現る

一

不思議なことがあるものだ。

それまで天地をどよもし、四周を深黒晦冥のうちに閉ざしていた暴風雨がピタリとなりをひそめたのだった。そればかりか小屋の窓からおぼろに月光が射しこんで——まるで嵐などなかったかのように——大井川の流れる音、葦原のさやぎ、虫のすだきが静かに聞こえてきたのだ。

——嵐がやんだのか。

いかにもそうにはちがいない。しかし、あれほどまでに荒れ狂った嵐が、こうも突然やむものか。なにか憑き物が落ちでもしたかのような唐突さではないか。

嵐がやめばそのことに安堵しそうなものなのに、

——七斗典膳はどうした？　緋文字火送はどうしたのだ？

なにか奇妙な胸騒ぎさえ覚えて、忠長は立ちあがった。とはいっても、七斗たちが出ていってから、まだ十分とはたっていない。不安を覚えるほうがむしろ不自然なぐらいであったのだが……。なにしろ小屋のなかには首を切断された天信の骸が冷たく伏しているのだ。いつもは剛毅な忠長にしてからが平静でいられないのも当然かもしれない。

と、ふいに小屋のなかの焚き火がふわりと膨れあがり、その後ろの壁に人影を落とした。一瞬、忠長は自分の影かと思ったが、炎を挟んだ向こう側に忠長の影が映るはずがない。見るまにその影は濃さを増し、厚みを増して、気がついたときには——まるで影がそのまま抜け出したかのように——そこに人が立っているのであった。

「駿河大納言様であらせられましょうや」

と、その影とも、人ともつかぬものがおもむろにそう訊いてきた。

影とも人ともつかぬものではあるが——どうやら僧頭らしいことだけはわかる。頭をきれいに剃りあげている。が、わかるのはそれだけだ。——不思議に全身を黒い墨で刷いたようにけぶらせ、それ以上のことを見きわめることはできない。

炎が揺らぐ、揺らぐ……それにともない、影が膨らみ、細り、また膨らんで、ときにその頭が天井にまで達することさえある。なにしろ妖怪めいた姿であったが、奇妙に忠長はそのことを不審にも感じなかったし、怯えも抱かなかった。ただ魂を抜かれたかのようにボンヤリそれを見ているだけなのだ。思考力が鈍っていた。

「恐れながら、ご尊名を承りたく——駿河大納言様であらせられましょうや」

そこにいるものが喋っているようでありながら、実際にはどこか遠くにいる誰かが、あるいは何かが話しているようでもあった。なにか現実感に乏しい。

「いかにも、忠長である」

忠長はうなずいたが、その自分の声さえも薄膜を隔てたように虚ろなものに聞こえるのだった。

「ははーっ」

と影は平伏し、

「これはこれは駿河・遠江五十五万石のご領主様――いや、いまは、めでたきかな、天子様より従二位を授けられ、大納言様でもあらせられる。この日本国において、オン上に仰がれるは大御所秀忠公と、ご当代将軍の家光公のお二人をおいて他になし。日本国で三番目にお偉いお方……」

「うむ」

忠長は鷹揚にうなずいたが――うなずくほかはなかったが――内心では魂を砥石に強引に擦りつけられたような、そんな違和感を覚えていた。そんなはずはない、万に一つもそんなことがあろうはずはないのだが……その言葉の選択、声の調子に、かすかに忠長を揶揄する響きがあるように感じるのだ。

しかし、たぶん気のせいにちがいない。この世のどこに、まさしく日本国で三番目の実力者であるはずの徳川忠長を揶揄するような不届き者がいるだろうか。うつけ者がいるだろうか。じつに、ありえないことではないか。だが……。

「まさしく日本国で三番目にお偉いお方、されど――」

笑った。――その声に、今度こそまぎれもない、忠長を揶揄する響きが含まれた。あからさまに嘲笑した。

「ああ、おいたわしや、日本国で一番、ご不幸なお方でもあらせられる」

「何、何じゃと――いま、何と申した」

「されば、恐れながら――日本国で一番、ご不幸なお方、とそのように申しあげた次第でございます」

「な、何をいうか。無礼を申すと捨ておかぬぞ」

「手打ちになさると仰せられるか。いや、駿河大納言様のお手にかかるは、この身の果報、まことに身にあまる幸せではございまするが……恐れ多きことながら、明日は、ご不憫なり、駿河大納言様のほうが、そのオン首を刃の下にさらすさだめになりましょう」

「だ、黙れ、下郎。もはや勘弁ならぬ、そこになおれ、いますぐこの場で成敗してくれようほどに」

「そして――」

と影は恐るべきことを言い放った。

「恐れながら、駿河大納言様をご成敗あそばすは、ご当代将軍様家光公、オン兄上様であらせられましょうなあ」

さすがに忠長は慄然とした。自分でも顔色が変わるのがわかった。そうと意識しないままに怒声が口からほとばしった。

「だ、黙れ、黙れ、黙れぇ！　なにを途方もないことを、なにを虚言を……」

「虚言？　と仰せられるか。根も葉もないこととさよう申されるのか――いや、それは違う。違いましょうなあ」

影――いや、それはもう影とはいえぬ。いつしか、まぎれもなく、人としての実体を帯びるようになっていた。僧侶である。――それもまぎれもなしに大官位の僧侶であるようだ。金糸、銀糸を鮮やかに縫いつけた袈裟をまとい、しかも幕府の許可を得ずしてはいかなる名僧も着衣を許されぬ紫の法衣をまとっている――まさに大僧正そのものの姿であった。

かなりの高齢に見えるのに、その全身から発する精気は、面も向けられぬほどの凄まじさなのだ。その巌のように頑丈そうな巨軀とあいまって、どこか年齢を超越したようなところがある。なにか魔界の住人がその次元の障壁を食い破って、この世に現れ出たような、凄絶なまでの大迫力を放っていた。

――これは人か。

生まれながらの貴人、さしもの奔放不羈な忠長が、この人物にばかりは自分が知らずしらず圧倒されるのを覚えていた。

その、まさに魔人としかいいようのない大僧正が、「恐れながら大納言様、それはお心得違いでございますぞ、それは違う、違いましょうなあ」とそういいながら、いかにも嬉しげに笑うのだ。しかも――。

いつのまにか、その「大僧正」の背後に、さらに二人の人間がかしこまっていて、彼らもまた「それは違う、違う、違いましょうなあ」といいながら、大声でゲラゲラ笑っているのだった。

――はて、こやつらは何者か。いつからそこに居ったのか。

それがわからない。忠長はただ混迷にみまわれるばかりだった。

不審な男が二人――。

一人は孔雀文様をあしらった大振袖に、精好織りの緋袴を着けた前髪立ちの美少年、もう一人は深編笠を右手にたずさえ、袖なし羽織にたっつけ袴の中年の武士――前者がなにやら怪しげな雰囲気をかもし出しているのは当然として、後者がまずは尋常篤実な風貌の持ち主であるのに、やはり妖霧としかいいようのない翳を全身にまつろわせているのは、じつに名状しがたい無気味さとしかいいようがない。

「うぬらは何者か」

忠長はさすがに声をうわずらせた。このときになってようやく自分が異常としかいいようのない状況に身を置いていることに気づかされたのだ。異常も異常――あまりに異常すぎて、これまでそのことをはっきり意識するだけの理性すら失ってしまっていたほどだ。ほとんど神気を喪失していたといっていい。火あかりに照らし出され、その影のなかから炙り出されてきたようなこ奴ら――断じて尋常な人間であろうはずがない。いや、そもそも人間であるのかどうかすら判断を迷わせるところがある。あるいは化け物、狐狸妖怪のたぐいではないか。

二

「拙僧がことをお忘れか。いや、それも当然かもしれませぬ。拙僧が、駿河様のご尊顔を拝したてまつったのは、さあ……あれはもう何年前のことになりましょうや。拙僧、一度、天海大僧正様の随伴を許され、江戸城に伺候つかまつったことがございます――」

「天海と……」

「左様――あれは、オン兄上様、家光公が、ご疱瘡をお患いになられたときのことでございます。お忘れでござりましょうや」

「いや、覚えておる、覚えておるとも――何であれを忘れらりょか」

兄、家光は幼少のころより病弱だった。元服を迎えてのちも何度も床に就いた。周囲もまた家光の病気には慣れていたといっていい。が、それも家光が疱瘡に斃れたときには、さすがに一同色を失った。このころ、成人の疱瘡は命にもかかわる深刻な病だったからである。――このころの医療は基本的に、病者を休ませて体力の維持をはかり自然治癒を待つか、そうでなければ加持祈禱のたぐいに頼るほかはない。

「あのおりには金地院崇伝様が、ご当代将軍家光様のオン病気ご平癒の祈禱をなされましたが、残念ながら、効験あらたかならず。――大御台所様より、急遽、天海大僧正様にお召しの儀これあり、疱瘡治癒のご祈禱をせよとの下知が下されたのでございます。拙僧、そのおりに天海大僧正様にご随行したのでございます――そのこと、ご記憶ではござりませぬか」

「母上から、オン兄上のご病気平癒の祈禱をせよ、のご下知が天海に下された……おう、たしかにそのようなことがあった。そうか。おぬしはあのおりに天海に同伴していた僧侶であったか。天海の随僧としてともに兄上オン病気ご平癒の祈禱をした……そうか、そうか、そうであったな」

たしかに疱瘡の平癒祈禱のために江戸城を訪れた天海には何人もの僧が同行していた……そのことは記憶にある。むしろ当然のことといっていい。平癒祈禱のためにはそれなりの道具、準備が要るし、そうでなくても天海ほどの大僧正が単独で行動するはずがない

からだ。
　が、その随行僧のなかに、たしかにこの僧が混じっていたかどうか、となるとそのことはさだかに覚えていないのだった。
「思い出していただけましたか――左様でございます」
　しかし、「大僧正」はひとり呑み込み顔で、重々しくうなずいて、勝手に話を先に進めてしまう。
「あのおりは大御台所様のみならず、駿河大納言様にまで、ありがたくも拝謁の栄をたまわり、まことに恐れ多いことでございました。拙僧、あのときのことは、一生の誉れと胸に刻みて、いまにいたるも片時も忘れたことはござりませぬ」
「いや、あのときにはまだ余は大納言の位階を授かってはおらぬが……」
　このとき忠長が柄にもなく照れたのは、天性の人のよさのあらわれであろうが――しかし、すぐに「ば、馬鹿な――！」と怒り出したのはこれもまた人のよさの発露といえないことはない。
「それほど余がことを恩義にきているというなら、なにゆえもって先ほどのような暴言を吐きおったか。こともあろうに、わしが、あ、兄上に成敗されることになろうなどとは、じつに途方もない。忘恩の言、忘恩の徒そのものではないか」
　あらためて怒りがぶりかえし、その怒りがあふれるままに、そう叫んだのだったが――。

「いや、拙僧が言いせしことを忘恩の言とそしられ、拙僧がことを忘恩の徒とののしられるはまことにもって心外のきわみ――それこそ途方もない濡れ衣でございましょうほどに」
「何？」
「恐れながら申しあげます。――ご自分のオン言葉をお忘れになられたは、拙僧ではござらぬ、むしろ駿河大納言様のほうでございますれば」
「何？　何？」
「駿河大納言様、いや、恐れながら、ここは忠長様と呼ばせていただきますが――『いずれこのままでは余はオン兄上様に成敗されることになろう』とは忠長様がご自分で仰せられたことではありませぬか」
「何？　何？　何？」
「さては、お忘れか。是非もござらぬ。されば拙僧の口からあらためて申しあげることにいたしましょう。かく口にするのも恐れ多きことながら――」
　そういいながら、なぜか「大僧正」はにんまり笑ったのだが、その顔が揺らめく炎にあやなされ、その奇怪な陰影にくまどられ、一瞬、なにか人外のもの――それも恐怖を具現する大魔神でもあるかのように映ったことだった。

「むざむざ成敗されるのを、このまま何もせずに座して待つよりは、武人として、いや、それより一人の男として、いっそ謀反をこそ――」

「何？　何？　何？　何？　――」

「左様……いっそ謀反をこそ考えるべきではないか、とそのように仰せあられたは、はは――お忘れになられましたか――ほかならぬ忠長様、あなた様ご自身ではあらせられなんだか」

三

「謀反……」

それは恐るべき言葉であった。それこそは人を滅ぼし、わが身をも滅ぼす壊滅の言葉といっていい。穀、砂もろともに容赦なく擂りあわせ、無残に圧しつぶす、じつに魔天の大臼ともいうべき言葉なのだ。

――その言葉を自分が使った？

そんな覚えはない。断じてそのようなことがあろうはずがない。いや、あろうはずはないのだが……。そう思う先から、かつてたしかにあった、あったかもしれない、しかし無理やり自分のなかで圧殺した「過去」が、黒い妖霧のように記憶の底から噴き出してきて、見るみる忠長の意識にひろがっていくのを感じた。

まじまじと「大僧正」を見るその目が恐怖に覆われていた。しかも、その恐怖は眼前にある「大僧正」にではなしに、むしろ自分の過去に向けられたもののようだった。

「ご坊――わしはそなたの名を聞いておろうか」

いつのまにか「大僧正」に対する言葉づかいが微妙に変わっていた。知らず、その口調には畏怖の響きさえ混じっているようだ。

「拙僧の名をお忘れになられたか」

「あ、いや、そうではないが……」

「いやいや、無理もないことでございます。恐れ多くも徳川忠長様ともあろうお方が、何年もまえに、ただ一度、お会いしただけの拙僧の名など覚えておいでになられる道理がござらぬ。それでいい、それでいいのでございますよ、忠長様」

「そんなものかな、左様であるかな……」

いま、忠長の表情はどこか虚ろに呆けたものになりつつあった。それも当然かもしれない。わずか数年まえのことだというのに、自分の記憶に自信が持てずにいるのだから。

「それでは、あらためて名乗らせていただきましょうほどに――拙僧の名は成尋と申します」

「成尋……」

聞き覚えのある名だ。——そうであるからには、数年前、兄が疱瘡をわずらったおりに、たしかにその名を聞いているのかもしれない。が、そのことにいまだに確信が持てずにいる。確信が持てないままに——。

「成尋——おまえはそういうが、わしにはそのようなことを自分が口にした覚えがないのだ」

「そのようなこと？」

「さればさ、その、む、む……」

「謀反、でございますか」

成尋の唇の両端がキュッと鎌のように吊りあがった。笑ったのか？　笑ったのだ。この成尋にあっては、それこそがまさに笑いなのにちがいない。その鉛色の魔神めいた表情こそが。——

一瞬、その恐ろしい笑いを残像のように忠長の目に刻みつけたまま——成尋はつと振り返ると、中年の武士のほうに、「聞いたかや、輪廻孫六——」と声をかけた。妙な名ではあるが、それがその男の名前なのだろう。

「さあれば是非もない。やむをえぬわい。忠長様にあれを見せよ。忠長様をして思い出させてさしあげよ」

つかのま沈黙があって、「よろしいのでござるか」とその武士が低く、しゃがれた声でいった。なにしろ陰々滅々としていて、その口から一言発せられるたびに、どこかでポッと青白い鬼火がともる——そんな印象さえ受ける声であり、口調でもあった。要するに生きた人間のようではない。

「かまわぬ、存分にするがよかろう」

「左様でござるか。さすれば——」

輪廻孫六はうなずき、忠長に深々と一礼すると、やおら腰の大小に両手を添えた。刀を抜くのか。——忠長は思わず声をあげそうになり、いや、そうではない、大小それぞれの鞘の下げ緒に手をやったのだ、ときわどくそれを見さだめた。かろうじてその声を喉の底に押し込めた。

大刀は赤い下げ緒、脇差しは黒い下げ緒——。火あかりのなかに、赤い下げ緒は燦々と、黒い下げ緒は暗々と浮かび上がる。孫六は両手の人さし指を前後、上下、小刻みに動かしながら、下げ緒のヒモをその指に器用にクルクルと巻きつけていく。そうしながら徐々に下げ緒通しからヒモを引き抜いていく。そして——

いつしか孫六は両手を巨鳥の翼のようにひろげているのだった。手首から先を微妙に動かしている。むしろ羽ばたかせているといったほうがいいかもしれない。その動きに誘われるように、さらにヒモが、おお！　のびる、のびる、のびるのだ……

両手の人さし指と腰の大小とのあいだにのびたヒモがうねうねと波うっている。ときに

螺旋状に渦を描き、ときに弓様に左右にしなう。もはや孫六がそれを操っているようにさえ見えない。まるでそれ自体が命を宿らせているかのように自在にして奔放な動きなのだ。

二条のヒモが波うち、笑うのだ。渦まき、憤るのだ……。

あろうことか、その二本のヒモがあやなすそこに、一つの空間が形成されているかのように見える。模糊として、なにも見さだめることはできないが、雲に似た何かが勃然として持ちあがり、また鬱然として崩れ去る。無数に生じ、無数に滅する……。

これは何か。これはどこなのか？　色彩、かたち、その動きまでもが変幻多彩にあやなして、ついにさだまるところがない。かすかに虫の翅音のような響きを鳴らしているのが——これはもう異界の大洞窟、魔界の深淵の、底知れぬ虚空をうかがわせる。亜空間というべきか、それとも疑似空間と呼ぶべきだろうか。

なにしろ途方もない虚空だ。その果てにあるものは何か？　そもそも果てなどというものがあるのか？　すべてがあまりに想像を絶していた。

四

ナウボ　アキャシャ　キャラバヤ　オン　アリ　キャマリ　ボリ　ソワカ……

輪廻孫六の喉から声ともつかぬ声が洩れた。なにか小鳥の囀りに似ていた。それも鋼の小鳥の鋼の囀りだ。それを異常なまでの——ほとんど人間わざとも思えないほどの——早口で朗唱した。忠長はそれを読誦として聞き取るのがやっとだった。むろん、何の経典なのだかわかるはずはない。とても人間の声とは思われない。

と同時に、孫六は腰を浮かせると、奇妙な動きを見せたのだった。

彼の両手はすでに下げ緒を持つことでふさがっている。それなのに、何をどうしたものか、やおら腰をひねると、大小の刀が鞘ぐるみ腰からスルリと抜けたのだった。そもそも、その亜空間はそれらの鞘の下げ緒から生まれたものではなかったか。それなのに——物理的にありうることだろうか——あっというまに、それら二振りの刀は、その二条のヒモがあやなす空間に吸い込まれるように消えていったのだ。

二振りの刀が投げ込まれたのがある種の弾みのようになったのだろうか。これまでにも増した勢いで、二条のヒモがあやなす亜空間は際限もなくひろがり、広大に生成されていった……

二条のヒモがうねり、もつれ、ほどけ、またむすぼれる。左右にジグザグの軌道を描き、上下に二重の波形をかたちづくり、前後に二重の輪を回転させながらさらに遠方へと移動する……それを無限にくり返す。不思議としかいいようのないヒモの動きだ。いや、

不思議といえば――。

その二条の下げ緒の長さこそ不思議としかいいようがない。しょせん鞘の長さなどたかが知れている。であれば――当然、その下げ緒にしてもそんなに長いはずがないのだ。それなのに、とてつもなく長い。じつに、ありえないほどに長い。……いや、長さ、などという概念は超越して、すでに無限の域にすら到達したかのようでさえある。

なにもかもが奇怪だった。ありえないことの連続だ。

「……」

忠長はカッと目を見ひらいている。自分で自分の見ているものが信じられない。成尋たちが現れたときから非現実感はつのるばかりだが、それがここにいたって頂点に達したようだった。じつに人間理解の範疇を大きく越えていた。

「こ、これはどうしたことか。何が起こっているのか」

忠長はついに悲鳴をあげた。

自分が妖霧たちこめ、魔物が跳梁する巨大な迷路にさまよい込んだかのような混迷にみまわれている。――しかも、この迷路には出口がないのだ！　急速に深さを増すばかりなのだった。

成尋はいまもすぐ間近に座しているはずである。それなのにその声は遥かなる彼方から聞こえてきたように感じた。陰々と虚空に響きわたった……。

「輪廻孫六がここに生ぜしめたるはアキャシャガルバでござる。すなわち虚空蔵菩薩でござるよ」

「これが虚空蔵菩薩……」

忠長は茫乎たる亜空間に恐怖の目を向けた。自分の体がどこかに宙吊りになっているような心もとなさを覚えた。

「これがはたして虚空蔵菩薩像であろうかと――ご不審の念を抱かれるのはもっともでございます。されど、もともと大乗の根本へといたり、明から、蒙古を経て、はるか天竺にまでさかのぼれば、虚空蔵菩薩もその菩薩たる実体を失い、一つの表象へと解体されることあいなります。アキャシャは虚空を意味し、ガルバは胎を意味いたします。すなわち虚空蔵菩薩とは、虚空のごとく、無限にして、無辺なるものと解していただければよろしいのではなかろうかと……虚空蔵菩薩とは菩薩にして菩薩にあらず。左様、いま一つの宇宙にして、時空間なのでございます」

「菩薩にして菩薩にあらず……一つの宇宙、一つの時空間……？」

「いかにも。そしてここにひかえおる輪廻孫六は、その大小の下げ緒をもってして、この世にその虚空蔵菩薩を――すなわち、いま一つの宇宙、いま一つの時空間を――現出せしめる忍法を心得た者なのでございます」

「こ、これが忍法――これが忍者！」

孔雀啄はかすかに笑ったようである。さらに言葉をつづける。

「わが同輩ながら、輪廻孫六、まことに奇怪精妙なわざを持つ術者でございまして……もちろん、われらの始祖たる成尋様はいわば天上界の別格たるお人であり、次元を異にするお方であらせられるのは当然のこととして――輪廻孫六はまずは地上界におけるわれらが棟梁たるべき人物なのでございます。それというのも輪廻孫六の忍法『金剛楼閣』は、この地上に金剛摩尼宝頂楼閣を現出せしめる術でございますれば――」

朦朧と銀光の霧がかかったような輪廻孫六の「亜空間」に孔雀啄の若々しい――というより、むしろ妖艶な――声が鈴のように響いている。見れば、すぐ目のまえを、孔雀文様の大振袖に、精好の若衆袴をつけた孔雀啄が、その美花とも見まがう顔ににっこり笑みを刻んで、こちらを向き、ふわふわと忠長を誘うように右手をさしのべ、後ろ向きに歩いているのである。

いかに大納言の叙位を得た貴人であろうが、どうしてその天上界の美貌に逆らうことができようものか。忠長は魔に魅せられたかのように孔雀啄に唯々諾々としたがった。

そして。――

ありうることか――いつのまにか輪廻孫六がこの世に現出せしめたのだという金剛摩尼宝頂楼閣のなかに足を踏み込んでしまっているのだった。

もっとも忠長はそのことにまだ気づいてはいない。いや、よしんば気づいたところで、

とうてい、それを本気にはしなかったろう。本気にできようはずがない。

「忍法『金剛楼閣』？　金剛摩尼宝頂楼閣とな」

と忠長は呆然と質問を重ねる。

「左様でございます。もとより、ご存知であらせられましょうが、仏道によれば、この世界の中心には須弥山なる高峰が聳えているとのことでございます。その須弥山のはるか上空に、われわれの世界とはまるでかかわりなしに、無限の過去より、『金剛摩尼宝頂楼閣』という場が浮かんでいるとのことです。仏道の導くところによれば、この人界のみならず、人外界においてすら、すべて『空』ならざるものはない、ということです。ところが、この金剛摩尼宝頂楼閣だけは唯一、『空ならざるもの』として在り、しかも時の流れともいっさい関わりなしに、須弥山の上空に浮かびつづけているということなのでございます」

「その金剛摩尼宝頂楼閣が輪廻孫六なる者が現出せしめた、これだと申すのか」

「はい」

「ば、馬鹿な――そのようなこと信じられようか。金剛摩尼宝頂楼閣とはいやしくも大日如来におなりあそばした尊ブッダがオン座しますところではないか。どうして卑しき素性の忍者ごときが――いや、よしんば富貴の身の宮様であらせられようが、人であるかぎりは、金剛摩尼宝頂楼閣をこの世に招致せしめることなどでき得ようはずがない」

徳川家の貴人たちは、代々、仏教に帰依する信仰の篤いことで知られている。先代大御所・家康はおりにふれ、名だたる高僧、名僧を召び集め、教えを乞うことが多かった。その孫たる忠長も仏道について知るところ祖父に勝るとも劣らない。

「いかさま――仰せのとおりでございましょう」

孔雀啄は逆らわずに、一輪の花のように笑って、

「輪廻孫六も、よくよく呼び名に困じはてたすえでの命名にてござれば、なにもこれを本気で金剛摩尼宝頂楼閣と信じているわけではございません。ただ、この空漠たる『虚空間』が金剛摩尼宝頂楼閣でないのだとしたら、さて、はたして何なのか、という疑問の尽きざるところではありまするが……」

「それにしても、あの輪廻孫六という忍者、まかふしぎな男ではある。余もこれまで奇怪精妙なる術をあやつる忍者を何人も見てきたが――」

そのとき頭の片隅を、チラリ、と甲賀五宝連のことがよぎったのはむしろ当然のことであろう。はて、あの者たちはどこで何をしているのか、という疑問が泡沫のように脳裏に浮かんだが、それもすぐに消えた。

消えて、それ以上、彼らのことを思い出しもしなかったのは、やはり異常なことといえばいえようがないだろうが……いまの忠長は異常を異常と感じないまでに、不思議な異次元世界にずっぽりと全身を没しているのだった。

ただ――

五宝連の棟梁たる若き八郎の瞳術のことをフッと想いはした。いかなる術も破る、破らずにはおかない、というあの矛眼術をもってすれば、さしもの輪廻孫六の『金剛楼閣』も打ち破ることができるのではないか、と。

――いや、いかに八郎の能力をもってしても、これほどまでに超絶の術をもった敵を相手にどう戦えばいいというのか。勝てる道理がない。駄目だろう。

五

「それにしても、大小の鞘の二条の下げ緒をもってして、このような虚空間を生ぜしめるとは、輪廻孫六、まことにもって幻妖きわまりない忍者であることよの。じつに奇怪な術者ではある」

「左様、もっとも輪廻孫六によれば、金剛摩尼宝頂楼閣を生ぜしめるのに鞘の下げ緒を用いるのは、しかるべき理由があってのことだそうでございます。すなわち、この世界を生ぜしめる森羅万象の、そのそもそもの素材であり、それら因果をなすべき『縁起』はすべて目にも見えぬ、ハダにも感じぬ微小なるヒモなのだ、ということでございますれば……。それら、おびただしいヒモの小刻みな振動が――あたかも琴の弦を震わせることで

妙なる調べを奏で出すように――世界を現出あらしめるのだとか。すなわち輪廻孫六が鞘の下げ緒をもってして金剛摩尼宝頂楼閣をあらしめるのは、いわばその真似事、模倣のようなものであるのだ、と。――あいや」

孔雀啄は軽く片手を挙げて、忠長を制すると、さすがに苦笑混じりに、

「これは輪廻孫六が長年の修行の末、その観法をもってして得たる真理ということでありまして――。それがほんとうに真理であるかどうか、何人といえども、いえ、よしんば当人の輪廻孫六であろうと、それを確かめ得るすべはございません。それよりも……」

ふと孔雀啄は足をとめると、

「これぐらい歩めばもうよろしかろう。恐れながら、駿河大納言様、どうかオン後ろをお向きあらせられますように――」

そういって微笑んだ。

「後ろを……？」

自分ではどこまでも意識を明晰に保っていると思っている。そのことには妙な自信がある。が、その自信にしてからがすでに迷妄にすぎない。――成尋なる僧にかつて忠長は「謀反」を口にしたことがある、と身に覚えのないことを指摘された……輪廻孫六なる奇怪な忍者には「金剛摩尼宝頂楼閣」を眼前に現出せしめられた……そしていまは孔雀啄なる、この世の者とも思えぬほどの絶世の美少年にその「金剛摩尼宝頂楼閣」に誘われ、そ

のなかを蹌踉として歩んでいる……すべては模糊とした幻想のなかに揺らいでいる。確固たる現実に根ざしたものなど皆無といっていい。

実際、この幻妙不可思議な世界をどれほどの時間歩んだのか、一刻ほどのことか、それともほんの瞬きする須臾のことであったのか、それすらさだかにわからないのだ。忠長は朦朧とした意識のなかをさまよっている。それなのに、自分では意識をさだかに持っている、という確たる――しかし根拠のない――自信に裏打ちされているのは、逆にいえば、それだけ混迷の度合いが深かったということかもしれない。

忠長は強い魔酒にしたたか酔わされたかのように脳髄の一点をじんじんと痺れさせていた。自分が完全に理性を喪失してしまっていることに気づいていないのも、やはり魔酒に沈潜させられているのと似た状態にあるからだといえるかもしれない。

「……」

このときも――

自分ではそうと意識せずに孔雀啄のいうがままに後ろを向いている。

もちろん、そのとき「してやったり」とばかりにその美貌には似つかわしくない、いや、美貌ゆえになおさら毒々しく、孔雀啄がにんまりと悪魔的な笑みをその頬に刻んだことに気づいていない。すべては成尋、輪廻孫六、孔雀啄の周到なる計算のもとに操り人形のように動かされているにすぎないのだが、そのことにも気づいていない。

振り返った忠長の茫乎とした視線の先にあったのは――

深々とうなだれて座り込んでいる輪廻孫六の姿だった。どうやら深い昏睡のなかにあるようだ。昏々と眠り込んでいながら、しかし、その二本の人さし指で「虚空間」をあやなし、つむぎ出すのを忘れてはいない。無意識のうちに、なかば自動的に二本の指を動かしている。

奇妙なのは、輪廻孫六との距離がどれほどあるのか、よく把握しきれないことだ。かたちはもちろん、色彩さえもさだかではない、雲とも波濤ともつかないものが無数に湧き起こり、沈み、流れきて、流れ去り、いっこうに視点がさだまらない。

輪廻孫六の姿も、あるいは遥か彼方に遠ざかったかに見えたかと思えば、一転して、すぐ指呼の間に迫って感じられたりもする。輪廻孫六がどこにいるのか、自分がどこにいるのか、その距離感が不断に変化しているようなのだ。精神が小舟のように不安定に揺らぎはじめる。――それを見ているうちに、こめかみがズキズキと痛みはじめた。

「大事ございませぬか、駿河大納言様」

背後から孔雀啄がそう静かに声をかけてきて、

「あまり根をつめてご覧にならぬほうがよろしかろう。毒でございますれば。駿河大納言様にあっては万に一つもそのような気遣いは無用かと存じますが、気力、胆力にとぼしい者がこれを見ると、なかには喪神してしまう者まで出る始末でございまして――」

「これは何じゃ？　何ゆえもってこれほどまでに眩暈がするのか」

忠長はこめかみを指で押さえている。ズキズキと血管が熱をはらんで疼き、いまにも破裂しそうなまでに痛んだ。自分でも顔が蒼白になっているのがわかった。

「それは、いま駿河大納言様がご覧あらせられるのが、『空間』にあらず、『時間』だからでございますよ」

「『時間』？　解せぬ。――『時間』を見るというのはどういうことなのか」

忠長の声はかすれがちに弱々しい。孔雀啄の言がほんとうであれば、いま忠長は人として生まれた者の誰も体験したことのない『時間』をまざまざと目のあたりにしている、ということになる。精神が一気に萎えてしまうのも当然だろう。

「先ほど、それがしが金剛摩尼宝頂楼閣には時間は関わりない、と申し上げたのをご記憶か？　金剛摩尼宝頂楼閣は、じつに人界、人外界を問わず、唯一、『空ならざるもの』としてこの世にあるものでござれば――この世のことわりとは関わりなしに、また時間とも関わりなしに、須弥山のはるか上空に燦然と浮かんでいるものなのでございます。その堅牢なること、世のいかなる硬きをもってしてもこれを傷つけ能わざること、さながら金剛石のごとし――」

「……」

「されど、世のことわりとも、時間とも関わりなきものを、このように現出あらしめるた

めには、並々ならぬ気力と体力を要するものでございますれば――それ、あのように輪廻孫六は昏々と気死しておりまする。この金剛摩尼宝頂楼閣のなかに身を置いているわれらには、よほど長い時間のように思われますが、なに、ああしてこの『虚空間』を生ぜしめている輪廻孫六には、ほんの須臾の間のことでござろうほどに。――おそらくは四半刻の半分、そのまた半分、さらに半分、そのつかの間のうちにわれらは目的とする『時』にたどり着かなければなりませぬ」

「目的とする『時』にたどり着く……それはどういうことか。いったい、そちは何を言うておるのか」

「つまり、『時』を遡るのにも、またそれなりの『時』を必要とする、ということでございまする。輪廻孫六がああして昏睡し、金剛摩尼宝頂楼閣を現出あらしめている短い『時』が、われらに与えられたつかの間の猶予でござれば……このわずかな猶予をもって、それがしは大納言様を『その時』へとご案内さしあげねばなりませぬ。文字どおり、われらには一刻の猶予もございませぬゆえに――」

「わからぬ、知らぬ！　わ、わしが行くべき『その時』とはいつのことであるのか」

「オン兄上、ご当代将軍・家光公がおいたわしや、疱瘡をお患いになられた『その時』でございまする――」

「あ……」

「左様、天海大僧正がわれらが師、成尋様を随行なされ、平癒祈禱のオンために、江戸城に伺候なされた『その時』でございますれば――」

「な、何のために？　い、いや、そもそも、そのようなことができるのか」

「何のために、と仰せられるか。それは――恐れながら、大納言様があのおりに吐露なされた、ご謀反、のお気持ちを、いま一度、お確かめになられるためでございます」

「ば、馬鹿な。わしにそのようなつもりは毛頭ない。なにゆえもって、このわしが、む、謀反、などと恐ろしいことを思うたりするものか。権現様もご照覧あれ、わしはただの一度たりとして、そのように放逸無残なことを心に留めたことはない」

「左様でございまするか。それはよろしゅうござる。それならそれで、そのことをご自分の目でお確かめになられたらいかがでしょうや。これからのご安逸のためにもそのほうがよろしかろうかと」

「嫌じゃ、嫌じゃ、わしは行かぬ、行かぬ。それに――いかにして『その時』に向かうというのか。そのようなこと、そも不可能ではないか」

「ご案じめされますな。それがしの忍法『時逆鉾』がございますほどに――」

「何、なに、何じゃと」

「恐れながら、大納言様には、それがしが輪廻孫六のことを、われら成尋衆の棟梁のような者、と申しあげたのを覚えておいでござりましょうや。それはこういうことでござい

ます。輪廻孫六が忍法『金剛楼閣』をもってして、この世の外に金剛摩尼宝頂楼閣を現出あらしめます。そこはこの世のことわりとも、『時』とも関わりなく、唯一、『空ならざる』虚空間でございますれば、われら、そのなかにおいて、修行を重ね、今にいたったのでございます。それがしの場合は、それが『時』を遡る忍法『時逆鉾』の術にて――」

「こ、ここな痴れ者が！　わしにそれを信じろと申すか」

「はい。ぜひとも信じていただきます」

時を遡ることができると豪語する美しい魔少年はパッと艶やかに笑って、

「そのために、それがし、甲賀五宝連を殲滅せしめたのでございますれば――」

「な、何、何じゃと！」忠長は恐怖に目を剝いた。「いま、何と申した」

「はい、それがしが甲賀五宝連を――と申しても四人を数えるのみでござったが――斃したてまつった、と左様に申しあげました。不憫とは存じましたが、なにぶんにも、やむを得ぬ仕儀からでございましたゆえに」

「何故じゃ、何故にあの者どもを斃さねばならなんだのじゃ。あたら、あれほどまでの術者たちを――」

「それゆえに、でございまするよ」

「なに？」

「ですから、それゆえに、と申しあげました。おわかりあらぬか。あれほどまでの術者たちであればこそ、あえて斃し申したのでございまする。いかに優れた術者、優れた忍法であろうと、わが『時逆鉾』を向こうにまわして、いかにして抗し得ることができましょう。忍法『蛍烏賊』が何ほどのものでありましょうや。忍法『千手観音』、忍法『草生炎』、忍法『天竪琴』――笑止なり、いずれも児戯に等しいことではござらぬか。かの者たちが術をかけようとするその寸前に、それがしが『時逆鉾』を仕掛ければ、いかがあいなるとお思いか。時遡り、おのれがかけた術は、ことごとく、おのがもとに跳ね返ってくることにあいなりましょうほどに。いかに優れた術者であろうと、なんじょうもってたまるべきか、ひとたまりもございません。この理屈、おわかりか」

もし、この話を、すでに死んだ七斗典膳が聞いたなら、なぜに水車が逆回転したか、なぜにそのことがあまで気にかかったのか、そのことに得心がいき、しかし、やはり愕然とせざるを得なかったろう。時を遡る術をもって敵と戦う忍者！　たしかに、これによく抗し得る者がこの世に存在するとは思えない。

「……」

さしもの忠長がいまはもうただ黙するのみである。その顔に恐怖の相があらわになっていた。

「それがしとて、いや、われら成尋衆とて、このようなことをいたすは本意ではござらなんだ。されど、こうでもせねば、駿河大納言様には、われらがいかに殿のオン役に立つ、

一騎当千の者であるか、それをおわかりいただけぬであろうと苦慮、愚考したあげくのことでございますれば、なにとぞお許しのほどをオン願いたてまつります」

孔雀啄は艶然と微笑んで、その白く、繊細な手を、ふたたび忠長にさしのべたのだった。

「さあ、駿河大納言様――こうおいでなされませ。それがし、『その時』にご案内さしあげますほどに……」

「『その時』に……」

忠長はすべての思考力を喪失したように、ただもう虚ろな表情のまま、ヨロヨロと孔雀啄に近づいていった。

孔雀啄の手のつかむ寸前――

ふと甲賀八郎の名が脳裏をかすめたが、いまの忠長にはもうその名が誰を指すのか、それすらまともに認知することができない状態にあった。

その混迷のなか……。

六

ふと気がつけば――。

忠長は「その時」にいた。

数年まえ、兄・家光が疱瘡にかかり、ドッと重い病の床についた「その時」に……。

それまで家光の枕元に伺候していた徳川の縁戚身内、重臣たち、しきりに脈をとり、薬を鉢に擂っていた医者たち、祈禱僧、それに侍女たちまでもがどこかに消え失せていた。

たまたまのことであろうが、いま家光の枕元に侍しているのは、弟の忠長ひとりだけなのだった。

天井から蚊帳が吊されている。

その青白い網の目が燈火に影を落とし、わずかに揺れて、なにか深い水底、その別世界にひとり座しているような心もとない心地にさせられる。

子供のころにこんな夢を見てそのあまりの淋しさに泣いたことがなかったろうか。

――いや……。

忠長はひとりではない。そのことに唐突に気づかされた。

家光公の意識が戻っていた。目を開けていた。――寝具のなかからジッと忠長を見つめているその目……。

――兄上！

忠長は目を覆いたい気持ちにかられた。背があわだつ思いがした。

家光の忠長を見る目はあからさまに憎悪の色が濃かったのだ。その目が憎しみと無念に

火のように真っ赤に染まっていた。
——兄上、なぜにございましょうや。なぜにそのような目でそれがしをご覧になられるのでしょう。どうか、どうか、おやめくだされ。——ああ、その目！　その目！　その目がそれがしには恐ろしい。恐ろしゅうてなりませぬ。万が一にも、それがしに、兄上のお気にそわぬ言動、不届きがございましたのなら、幾重にもお詫びいたしますれば——どうか、そのような目でそれがしをごらんになるのだけはご容赦ねがいたてまつります。どうか、どうか……。
「それは——」
ふいに背後から声がかかった。
「無理でござりましょうなあ」
とっさに振り返った忠長の目に——。
蚊帳の外にうっそりとすわる三つの人影が映った。網の目を透かし、燈火が妖霧のようにぼんやり滲んで、それらの人影を模糊と浮かびあがらせていた。
成尋、その後ろに孔雀啄、さらにその後ろに輪廻孫六が深々とうなだれながら座している。
輪廻孫六はあいかわらず昏々と眠っているようだ。その両手の指がいまも鞘の下げ緒を延々くり出している……

輪廻孫六の忍法「金剛楼閣」から生み出された「虚空間」のなか、そのさらに孔雀啄の忍法「時逆鉾」に逆転された「その時」に、いま自分はいるのかと思うと、そのあまりの不可解さに頭が痛くなる思いがする。
まるで世界が入れ子になったかのように感じた。いま自分は世界のなかの世界のなかの世界に身を置いている……。
「恐れながら、これが、こちらにひかえおりせし孔雀啄めがお連れした『その時』にてございますれば——。忠長様には『その時』のことをオン思い出しいただけたでございましょうや」
「こ、これは——夢、幻ではないのか」
「さにあらず。誓って本当のことにてございます。まさに忠長様のオン『その時』でございますれば……」
「これが余の『その時』……」
忠長はあらためて兄に目をやった。すでに家光はその目を閉ざしている。かすかに苦しげな寝息が聞こえた。
「よく眠っておいでだ」
とつぶやき、ふいに忠長は総毛だつような恐怖の面持ちに変わった。蚊帳ごしに成尋を見やって、

「おぬしはいま無理だと申したな、なにが無理だというのか」
「恐れながらオン兄上様のお気持ちを変えるのが――」
「な、何？　……」
「めでたいかな、オン兄上・ご当代様はご平癒あそばせます。天海ご上人ご祈禱のオン功徳あればこそ――と申しあげたいところではありますが、なに、いまだ、ご天命がお尽きにならなかったゆえのことにてございましょう。されど、忠長様、まことに申しあげかねることではございまするが――オン兄上は決してお忘れにはなりませぬぞ」
「忘れぬ？　何を？」
「ご自分が明日をも知れぬお命にあえいでいらしたときに、そのオン枕元にて健やかに座していらした忠長様のお姿を――」
「……」
「いまにも、オン命尽きんばかりの現将軍の、健やかにておわす弟君の――次代将軍たられるべき――忠長様をご覧になられる、そのお気持ちが、なにゆえもって平静のままにてあらせられましょう。病める者の、健やかなる者に対する妬心――いわんや、それが将軍たる者の、次代将軍に対するものであればなおさらのこと――ほど世に凄まじいものはございません。オン兄上様は、恐れながら、忠長様のご表情に、次代将軍たるべき者の歓喜と野心の念をありありとご覧になられたのでございます」

「う、嘘じゃ」
忠長はほとんど悲鳴をあげて、
「なにゆえもって余にそのような邪心があろうものか。余はただただ兄上様のご回復をお祈りする一念にて――」
「忠長様がどのようなお気持ちであらせられたかを申し上げているのではございません。オン兄上様がどのように忠長様をご覧になられたのかを申し上げているのでございます」
「……」
「兄上様はこのことを決してお忘れにはなりませぬぞ。もはや兄上様にとって忠長様は――失礼の段はひらにご容赦を――ともに天をいただかざるべき敵でありましょうほどに……。いずれ兄上様は――左様、大御所・秀忠公がお隠れあそばしたあとにでもなりましょうか――忠長様を粛清なさいましょう。それも、いわゆる血の粛清にて、もはや忠長様の逃れるすべとてございません」
「お、横暴じゃ」
「いかにも――横暴でございます」
「理不尽じゃ」
「左様、理不尽でもございましょう」
「されば――」

「はい、されば……」
「教えよ、成尋、余はいかがいたせばよいのじゃ」
「なにをいまさら……ですから忠長様はこの『その時』――兄上様のオン眼差しをごらんになられたとき――に、ご謀反なさるをお誓いになられたのでございませぬか。そのことお忘れか。それより他に、忠長様がオン命をおつなぎになられるすべはございません。世に、窮鼠猫を噛む、のたとえもございますれば――なにとぞ、いま一度のご決心をなさりませ」
「し、しかし謀反は、なあ。それはなあ。あまりに恐ろしいことゆえに、なあ」
「恐れながら忠長様には拙僧が弟子、ここに居ながれる孔雀啄、輪廻孫六の忍法――いや、もはやそれは法力とでもいうべきものでございますが――をどのようにご覧になられますか。――この世の外に金剛摩尼宝頂楼閣を創造なさしめる輪廻孫六の『金剛楼閣』の秘術……時の流れを逆転せしめる孔雀啄の『時逆鉾』の秘術――これほどの術にこの世の何者が対抗しえましょうや。のみならず、拙僧には、この者たち以外にさらにふたりの弟子が――それも『金剛楼閣』、『時逆鉾』にまさるとも劣らぬ秘術の遣い手が――おりますれば……」
「孔雀啄、輪廻孫六にまさるとも劣らぬ秘術の遣い手……それは、まことか」
「はい、拙僧を含めて五人――成尋五人衆と名づけましてございます。その一人ひとりが

どれほどの力を持つか、まずは甲賀五宝連を壊滅せしめてご覧に入れました。――残る二人も、ご座興に、伊賀五花撰を殲滅せしめてご覧に入れましょう――われらの力をもってすれば兄上様にご謀反なさるなど何ほどのことがありましょうや。ご安心めされい。われらの力はこの世のものではございませぬほどに――」
「そ、そうか、それなら――おお、それなら……」
「もしそれでもご不安、ご心配が尽きぬとそう仰せなのであれば――左様、このようにすればいかがでござりましょう？　駿河ご領内に浅間神社なる社がございますな。その神域に深々として広大なる森を擁していると聞きおよんでおりまする」
「うむ、ある」
「この場にて拙僧がしかとお約束いたしましょう。その森が、忠長様ご陣に攻め込んでこぬかぎり、忠長様のご謀反が破れることは誓ってございません。忠長様がオン兄上に成敗されることもない。――どうでござる、これならご安堵いただけますでしょうか」
あっけにとられ、まじまじと成尋の顔を見る忠長を尻目に、成尋は――いや、孔雀啄はゲラゲラと笑い出したのだった。さすがに成尋は沈思たる表情のままでいるが。
ただ、輪廻孫六ひとりだけが、そのときも昏々と深い眠りのなかにあった。
「なに――浅間神社の森がわが陣に攻め込んでこぬかぎり、わが謀反が破れることはない、だと？　な、何を戯れ言を申すか。余をからかう所存であるか。その場に捨て置かぬ

ぞ」

「何を仰せあるか。いかにして殿をからかうなどと恐れ多いことをいたしましょうか。それどころか――これ、孔雀、嗤うでない。これ以上、嗤うようであれば、きっと仕置きいたすぞ。それどころか――」

と成尋はくり返し、じつに驚くべきことを口にしたのだ。

「忠長様、『神』におなりなさいませ。徳川家を、いや、天下を統べる『神』におなりなさいませ」

「か、神に？」

忠長は目をパチクリさせた。

「それはどういう意味か」

「なに、文字どおりの意味でございますよ。忠長様が『神』におなり遊ばせば、なんの家光様など恐れることがありましょうや。当代御将軍様というたとて――しょせんはたかの知れたヒトではございませぬか。悪いことは申しませぬ。『神』におなりなさいませ。そうなさいませ――」

「そうなさりませ、そうなさりませ――」

とこれは孔雀啄だ。歌うように、どこか嘲弄するようにいう。

「失礼ながら、忠長様は優れた天稟に恵まれながら、勿体なや、時の運、人の運に恵まれ

ず――さらには馬鹿げた忍者合戦に遅れをおとりになられたこともあり――不遇をかこっておいでございます」

「不遇？　ぶ、無礼な。わしを不遇だと申すか。わしは駿河、遠江国――」

「五十五万石でございますか――それに何ほどの価値がありましょうや。オン兄上は天下の将軍様であらせられますぞ」

「……」

「ですから――どうか忠長様、『神』におなり遊ばせ。『神』におなりなさいませ。われら成尋衆、忠長様を『神』にオンたてまつりあげるためとあらば、よしや、この身が舎利になり、粉々に粉砕されましょうとも、何でそれを惜しみましょうや。かならずや、われら成尋衆が、忠長様を『神』にオンせしめることをお約束いたします。さらば『神』になられませ。『神』に――」

まるでメフィストフェレスのように成尋は諄々と説き聞かせる。それを聞く忠長の表情がしだいに燐々と青い微光をおびるかのような妖しい形相に変わっていった。

「余が『神』に……？」

伊賀、散るべし

一

——八郎兄さん。

という呼びかけは、すぐに頭のなかで「八郎兄ちゃん」という子供っぽい呼びかけに変わる。

その呼びかけには、甘酸っぱい子供時代の思い出と、いくばくかの哀しみ、それに切なさがともなっている。

まだ数えで十二歳、満年齢でいえば十一歳になったばかりの伊賀響が、もう子供時代を懐かしんでいる……。すこし早すぎはしないか。

たしかに早すぎるかもしれない。——もっとも、この時代、武家の男児は十二歳になれば佩刀を許され、かたちのうえだけではなしに、体のうえからも妻を娶るのが認められた。それは女児も同じであり、十二歳になれば事実婚を承認されるのだった。

が、いま、お堂の八寸角の欅柱にもたれかかり、両足を投げ出している響の姿は、とても嫁ぐに歳の不足ない女性のようには見えない。

少女、いや、それどころか——どうかするとがんぜない幼女のようにさえ見える。それほど、その姿は無防備で、あどけないものに見えるのだった。それに——。

もしかしたら、眠っているのかもしれない。——いや、眠っているのだ。その閉じられた目に長い睫毛が美しい。健やかな寝息がかすかに聞こえていた……。

裾みじかの朱地の着物に、紅色の帯を巻いただけの軽装だ。裾からのびた素肌の足がしなやかに長い。……年頃の少女らしくもなく素っ気ない装いだ。飾りといえば、髪に白い百合の花をさしているぐらいか。その香りがほのかに爽やかに堂のなかに漂っている。

お堂は暗くて、広い。そのなかにあって、響がもたれかかっている柱の燭架だけがわずかに孤灯をともしている。その一灯だけでは、とうてい隅々までは火明かりは届かない。ただ百合の花だけが白々と冴えわたり、浮かびあがっていた。

響以外に、お堂に人の姿は見えない。外からかすかに虫のすだく声が聞こえてきた。

誰か心ある者が、ふと思いたって、燭火の明かりのなかに響の顔を覗き込めば、そのあまりの美貌に目をみはるのではないか。それも、ひ弱い切り花の美しさではない。野に咲く、野生の花の美しさだった。

よく日に焼けた、肌理の細かい肌は、黒曜石の滑らかさだ。しかも、粗削りの美しさながら、その顔だちはえもいわれぬ気品をかもし出している。見るべき人が見れば、いや、

誰が見ても、これはただの少女ではない、といずまいを正さずにはいられないはずだ。そして、これはいずこの姫君でおわすか、と自問するのではないだろうか。

——姫君？

そう、たしかに、ある意味、由緒正しい姫君ではある。すぐる慶長十九年、いまから十二年まえ、徳川世継ぎをさだめるために伊賀、甲賀、それぞれ十人の忍者たちが最後の一人まで死闘をくりひろげた。いまも双方の一族に深い傷跡とトラウマを残している惨憺たる悲劇である。

そのときの伊賀の若き棟梁と、甲賀のやはり若き棟梁の間に生まれたのが、すなわち彼女なのだった。正確には、双子の片割れであり、もう一人——兄——を八郎という。

つまりは彼女は、たしかに伊賀、甲賀双方の忍者集団の、その血族一党につらなる、正統たるべき嫡子のお姫様なのだった。

ただし、いまはそのお姫様は眠っている。眠っているように見える。安らかに、無邪気に……。

と——。

どこかから、暗漠々とした虚空を伝わって、ヒソヒソと誰のものとも知れぬ声が誰かから誰かに伝わった。

——諸行枯葉よ、聞いておろうかい。

——うむ、蔦法悦か。聞いているぞ。

——準備はすっかり整うた。わしと、色衰逸馬、水蓮秋月の三人で、三方、蟻の這い出る隙間とてなく、びっしり、かためたわい。あとは、残る一方を、諸行枯葉よ、おまえがかためればそれでよし。それでわれらが花防御陣、完璧に仕上がることになる。

——首尾は？

——おう、いつにも増して美しいぞ。われながら惚れぼれとする出来じゃわい。

——花は？

——女郎花に、曼珠沙華、紅葉に、睡蓮じゃ。

——うむ、でかした、よう出来た。

——当たりまえじゃ。われら伊賀五花撰の仕事じゃもの。

——されば響に伝えよ。夢ゆめ、仕上げの一筆を忘れぬように、とな。

——おうさ、そのこと、そのこと……響の一筆がなければ、せっかくの花防御陣が画竜点睛を欠くことになる。——水蓮秋月、響に念を押せやい。

一瞬、間があり、心得たり、と若々しい声が聞こえてきて、

——響、響よ、聞いておるか、これ、響……。

その声がかすかに苛だった。

——返事がない。どうやら響は眠っているようだ。ええい、どうしてああもいつも眠っ

ておるのか。
それには蔦法悦が笑いを含んで、
——よいではないか。響はまだ子供だ。子供は眠るものと相場が決まっている。
と、ふいに響が——
「蔦法悦。あいかわらず、あなたはわたしに甘いなあ。甘すぎる。いつまでたっても子供あつかい。そんなにわたしを甘やかしていいのか」
やにわにそう声をあげた。目は静かに閉じたままだ。
「あ、いや、これは一本とられた——あは、ははは」
「それから、水蓮秋月——あなたのほうはすこし気が短すぎ。若さにまかせて苛だってばかりではことをし損じるよ」
「これはしたり——子供のおまえにいわれとうはないが……」
水蓮秋月もやりこめられてやはり笑いにごまかす。——伊賀五花撰は伊賀きっての精鋭ぞろい、というが、それがこのお姫様を相手にするとどうもその鋭さを失ってしまうようだ。
さらにまた、どこからか諸行枯葉の笑い声が聞こえてきて、
「許してやれやい、響よ——水蓮秋月、蔦法悦、二人ながらおまえの身を案じてのことなのだ」

「いいわ、許してあげる、だけど——」
「おうよ、だけど——何か」
「諸行枯葉、まわりのかためは万全でしょうね」
「何をいまさら——われらの花防御陣に何で抜かりがあるものか。色衰逸馬もここにいる。われら伊賀五花撰の鉄壁の花防御陣を破ることなど誰にできようものかよ」
「いつもながらに頼もしい——わたしもそのように安心できればいいんだけど……」
「できぬと申すか」
「うん」
「それは、なぜによ」
「だって——」
響の声がわずかに翳った。
「甲賀五宝連が壊滅したから」
一息、二息、間があいて——闇のなかを津波に似たどよめきが波うった。
「な、何と……あの甲賀五宝連が」
低い、陰気な声があえいだ、——どうやらそれは残る一人、色衰逸馬という男の声のようだ。
「いつ？」

「えっと――一刻（二時間）ぐらいまえかな。そんなにまえのことじゃないし」
「どこで？」
とこれは諸行枯葉の声だ。
「大井川で――」
「というと、あの――駿河、遠江の大井川のことか」
「うん」
「おまえはここにいながら――」
諸行枯葉の声が混迷を加えた。
「駿河、遠江のことがわかるというのか」
「うん、それはだってわたしだから……」
「そうか。いや、おまえであれば――さもありなん」
「ついさっきまで、あちらは凄い雨、風だった。そのなかを襲われた。雨に打たれ、風に吹かれて……」
「南無、死んだというかや」
と、この悲痛な声は蔦法悦だ。
「うん」
「にしても、あ、あれほどの者どもを――われらにしてからが、あやつらには一目置いていたものを――な、なぜに甲賀五宝連は襲われたのか」
「わからない」
「そも敵は何者なのか」
「それもよくわからないのよ」
響はちょっと首を傾げて、
「もちろん伊賀でもなければ、甲賀、根来衆でもない。これまで、わたしたちの知らない相手のようよ」
「七斗典膳はどうか。七斗典膳までやられたのか」
「うん」
虚空の闇のなかにやつぎばやに質問が乱れ飛んだ。声が切迫していた。
「緋文字火送はいかがいたした？」
「草薙一馬はどうか」
「遊左天信は？」
が、いずれもことごとく斃されたと聞かされ、さすがに墓石のように冷たい沈黙が闇のなかにしんとみなぎった。
ややあって――
「相手は何人か。よほど大勢で一気にかかったのであろうな」

その声に怒りをみなぎらせて若い水蓮秋月がいう。
「ううん、それがそうでもないのよ」
「そうでもない？　何人？」
「三人」
「さ、三人？」
「うん」
歯ぎしりにも似た陰気な声が聞こえた。色衰逸馬だ。
「たった三人を相手に――生き残ったのは棟梁の甲賀八郎だけということか」
「そのようね」
響の声にかすかに安堵と悲哀の念が滲んだがそれに気がついた者はいないようだ。
「そいつらの仲間がべつに二人――」
「何？」
「こちらに向かってきてる」
響の声が悲壮みをおびた。
「こちらに？　ここに？」
「われらのもとに、か」
「それは――いまか、いまのことか」

「また何ゆえに？」
一拍おいて、響が、
「わたしたちを――伊賀五花撰を斃しに」
「たった二人でか」
諸行枯葉の声が凄味をおびた。
「これはまた――伊賀五花撰ともあろう者が侮られたものよ」
「その侮りが」――蔦法悦。
「命とりになろう」――色衰逸馬。
「目にもの見せてくれん」
水蓮秋月がぎりぎり歯を嚙み鳴らしながら、
「得べくんば――ほかの三人とやらも同行してくれればいいものを……きゃつらも五人、われらも五人――何ゆえもってわれらが負ける法やある」
「忘れないで――甲賀五宝連が敗れたのよ」
響が強い調子で釘をさす。
「まずは二人――彼らを斃すのに全力をつくして。さもないと……」
「おう、さもないと何だ」
「みんな死ぬ」

「何？」
「そうよ、さもないと――みんな死ぬんだからね」
「――――」
緊張がみなぎった。――その緊張は闇にピンと鋭く張りつめ、それにすこしでも触れようものなら、スパリと両断されてしまいそうだった。
「だから花防御陣を張るのに全力をつくして。さもないと――」
「死なぬさ、死なぬよ、何でわれらが死ぬるものか」――諸行枯葉。
「響ひとりを残しては死ぬるに死ねないものなあ」――色衰逸馬。
「そうよ。響にはおれの嫁ごになってもらわねばならぬ。何で響ひとりを置いて逝けるものか」――水蓮秋月。
「こやつ、はしこい奴――このきわどいときにようも抜けぬけというてくれたわ」
蔦法悦が笑い、ほかの三人もそれにあわせて笑った。その笑いのなかで――。
「みんな、いよいよ危ないとなったら、わたしの名を呼ぶのよ」
静かに響がいう。
「いい？　わたしの名を呼ぶのを忘れないで――」
「呼んでどうする？　響がわれらを助けてくれるのか」
諸行枯葉はさらに笑ったが、それにはどこか泣き笑いに似た響きがあるようだ。ほかの三人も声をあわせて笑ったが、それらにもまた似た調子が感じられた。
非情をもってするのが常の忍者にはめずらしく、といおうか。――いや、響には、忍者の鋼、氷の冷酷さをも溶かさずにはおかない、天真爛漫ともいうべき、ふしぎな天性の明るさがある。それがこの場合に伊賀きっての精鋭、五花撰の面々をも破顔させずにはおかないのだろう。
「ありがたや、響はわしらの女観音であらせられる。当方に観音おわせば何を恐れるべきものやある」
と、これは蔦法悦だ。
また笑い声が起きる。それが尽きるまえに――
鳳仙花が爆ぜるように、四人の忍者たちはパッとそれぞれの持ち場に飛んだ。
「伊賀五花撰、参る」
あとに残されたのは、まえにも増した静寂で――その静けさのなかに、また響の声がひそと聞こえた。
「八郎兄さん……わたしたちを護って」

二

八郎は伊賀響の双子の兄である。

それがどうして兄妹で、それぞれ甲賀、伊賀の別姓を持つことになったのか。

それは――彼らの父が甲賀の若き棟梁・弦之介であり、彼らの母が伊賀の若き棟梁・朧であったからだ。

すなわち八郎と響はそれぞれに甲賀、伊賀の貴種たるべきさだめをになって、この世に生を受けたことになる。――宿命の子、といおうか。

父の弦之介、母の朧は、甲賀と、伊賀との間に深々と穿たれた何百年もの――生まれながらに不倶戴天の敵同士という――血の宿命に耐え、その積年の怨讐をよく乗り越えて、深く愛しあうまでになった。

しかし婚礼を直前にひかえ、運命の激変は、彼らを敵、味方総勢二十人からなる忍法勝負の瀑布へと無残に落とし込んで、酸鼻たる血の渦のなかへと引き込んだのだった。

皮肉にも、二十人の忍者たちが凄絶に殺しあった果てに、最後に残されたのは、弦之介、朧の二人のみだったという。

徳川家のいかなる文書にもこのときのことは残されていない。

ただ、わずかに一巻――血にまみれた人別帖の巻物が残されているのみである。

その人別帖には、甲賀十人衆、伊賀十人衆と記載され、そのあとにそれぞれ十人の忍者の名がつらなっている。それら総勢二十人の名がことごとく血で消されているのだという。いかに凄惨無惨な殺し合いが展開されたのか推して知るべし！

慶長十九年五月七日夕――

駿府城西方・安倍川のほとりにて、弦之介、朧の二人は、一騎討ちの修羅場を迎えることとなった。

どちらが最終的に勝利することになったのか。

人別帖には、「最後にこれをかくものは、伊賀の忍者朧也」とあるという。

実際にそこで何が起こったのかは誰も知らない。もちろん、試合に立ち会った人間は何人かいるわけだが、ついに彼らは生涯それを――大御所・家康公にさえ――洩らすことはなかったらしい。

ただ、試合に立ち会った二代服部半蔵正就が一子、のちの四代正広の養子、服部響八郎なる者が、何らかのかたちで試合に介在したらしいという伝聞がひそかに流れはした。

その「介在」とはいかなるものであったのか？

それもまた不明だ。永遠に。――

ただ人別帖には、朧が最後に残ったと記されているが、実際には彼女は愛する男にさき

だって自害し、そのあとを弦之介が追ったのだ、という説もある。
しかも、その自害に用いられた刀は、試合の前夜に響八郎が朧に渡したものなのだという。
忍者が忍者相手にやることだ。――その刀になんらかの仕掛けがほどこされていたとしても不思議はない。
朧は死ななかったのではないか。弦之介も死ななかったのではないか。
が、そうであったとしても――。
祖父の甲賀弾正、祖母のお幻をさきがけに、以下、伊賀、甲賀、十六名の精鋭たる部下を喪った若い二人が、その後、おめおめと生きながらえる道を選ぼうはずがない。そんなことができようはずはない。
おそらく、八郎、響の双子を授かったあと、その子らを甲賀、伊賀、それぞれの一族に託したすえに、彼らもまた自刃したのではなかろうか。
ただ――。
服部響八郎がまったくの同情心から、弦之介、朧のふたりを助けた、と考えるのは、あまりに忍者というものを見くびりすぎている。そんなはずはないのだ。――いわば忍者の宗家ともいうべき服部家の養子たる者が、一時の同情に流されてことを決するなどありえないことだからである。

そもそも大御所家康にしてからが、甲賀、伊賀の忍法合戦の結果を待つまでもなく、すでに家光を三代跡継ぎたらしめるべし、と決めていたのだという説さえあるのだ。
あえて、その決定を忍法合戦の結果にゆだねたかのように見せかけたのは、国千代（忠長）支持派を納得せしめるための、いわば苦肉の策だったというのだ。
あり得ることである。あの二枚腰、三枚腰を常套とする家康のことだ。それぐらいのことはしかねない。むしろ、それでこその家康だとさえいえる。
そうであれば、現実に、どちらが勝利するのかは、そもそも最初から問題とされてはいなかったわけなのだろう。伊賀が最終的に勝利することは最初から決められていた――つまりは八百長、出来レースに他ならなかった。
それがほんとうだとしたら、無用の殺戮戦に投入され、むざむざ命を棒に振った忍者たちの運命は、なおさらに悲惨なものになるわけなのだが。――
それでは、どうして弦之介、朧の二人だけがことさらに助命されたのか？　という疑問は残る。徳川家にしても、その走狗たる服部家にしても、たかの知れた忍法者ふたりの命など、臼で挽き、粉々に砕いて、捨て殺しにしてもよかったはずなのに。――
ほんとうのところは八郎、響にもわからない。が、推測することはできる。それは――あまりに弦之介、朧の瞳術が凄まじいものでありすぎたからではないか。
自分に向けられる害意、敵意を、ただ一瞥するだけで、そのまま相手に反転させること

ができる弦之介の矛眼術……。

あまりに無垢で、純粋でありすぎるために、これもただ相手を一瞥するだけで、いかなる邪法、凶術も一瞬のうちに無効ならしめる朧の盾眼術……。

これら凄まじい瞳術を知って戦慄しない者があるだろうか。これを羨まない者があろうか。——それらをあたかも弊履を棄つるが如くにむざむざ捨て去っていいものか。

そう——。

忍法合戦において無惨に殺しあった伊賀、甲賀の忍者たちの、あの奇怪幻妖きわまりない忍法の数々が、代々、長年にわたって血と血をかけあわせ、まぜあわせ、濃密なる交配の結果、生まれたものであろうことを思いあわせれば——。

弦之介、朧がつがえば、いかなる超絶の瞳術を持った子供が生まれることになるか、忍法宗家たる服部一族が、いや、これより幕府大黒柱を支えるべく永劫の使命をになった大徳川家が、これに興味を持たないはずはなかったのだ。

が——。

動機はどうあれ、服部響八郎が弦之介、朧のふたりの命を拾ってくれたのはまぎれもなしに事実なのである。おそらく、ふたりはそのことに感謝したにちがいない。だからこそ双子の名に、響、八郎の名をつけたのであろうから。——

それではその双子たる響と八郎はどうか。生を授かり——わずかな捨て扶持ではあるが

——養育の糧さえ与えられたことにそれなりの恩義を覚えはした。

しかし、それ以上に、ふたりの少年少女は、忍者の宗家たる服部家が、ひいては徳川家が自分たちに寄せている期待がどういうものであるか、それを察するだけの知恵を持っていた。

彼らに期待されているのはただ一点、

——まぐわうべし、つがうべし、さらに血を濃くすべし。

これのみであった。

忍者にあっては、その幻妖、剽悍たる体質をさらに強固たらしめるために、近親が交接するのはめずらしいことではない。異常なことですらない。

大徳川家、服部家がひそかに期待していたように、響、八郎も、その自然な流れに身をまかせるべきだったかもしれない。期待されるままに瞳術のより完成型を目指すべきだったかもしれない。

しかし、そうはしなかった。二人は、世間的に、男女の仲となるべく公認される十二歳を迎えるまえに、別離することを選んだのだった。なぜか？

たがいに心の底から愛しあっていたからである。それは、この世にあり得べからざるほどの、じつに奇跡のように透明純粋な愛であって、何者もそれを傷つけ、毀つことはあたわなかった。

十万人に一組、いや、百万人に一組――得ることができるかどうかの、まれなる宝石、この世の宝でもあったのだ。

そうであれば――

二人に別離する以外のどんな選択肢が残されていただろう。不幸にもこれほどまでに純粋な愛を得た人間が、ただ瞳術の血を濃くするためだけに交接する、などという侮辱に耐えられるはずがなかったからである。

ふたりの愛を純粋に守るためには――

別れるしかなかったのだ。それ以外に選択肢はなかったのだった。

三

響と八郎が永遠に訣別したのは三年まえのことである。桜が満開と咲きほこる頃、その樹の下で。――

おそらく、このときにはもう父の弦之介、母の朧はとうにこの世を去っていたことだろう。そうであればこそ、服部響八郎は二人を高野山の九度山へとともなったのにちがいない。ふたりはここで育った。

九度山には慈尊院村がある。

その里の、うち捨てられたような疎林の――そのさらに人目に触れぬ一隅に、幾つか土まんじゅうがあった。墓はもちろん、卒都婆のたぐいも一切ないから、それらが何者の墓群なのだかはわからない。

土まんじゅうは二十を数える。すなわち、これらは慶長十九年、甲賀・伊賀、死闘の末に果てた二十人の忍者たちの墓なのである。

思うに、服部響八郎が二人をこの地にともなったのは、彼らの菩提を弔うためもあったのではないか。土まんじゅうが二十を数えるというのは、すでに二人の両親も亡くなっていることを意味しているのだろう。

あの両親が生きているはずはない、と思う。が、いつ、どこで、どのように果てたのか、それを知らされることはついになかった。

ただ、仄聞するところ、それぞれの一族の非情のさだめ、血の枷、鉄の掟を果敢に打ち破り、二人は最期まで愛に殉じきったのだという。それほどの二人であれば、きっと死ぬときも一緒だったのにちがいない。

慈尊院村にいる間、ふたりは毎朝、土まんじゅうに花を供えた。

一度だけ、両親がどんなふうに死んだのか、二人は一緒に死んだのにちがいない、と話したことがある。

「きっと、そうだよね」

「ああ、きっとそうだ」

響は口に出してこそいわなかったが、内心、両親は自分たちよりずっと幸せだ、とそう思った。

両親は愛しあっているからこそ、（たぶん――）一緒に死んだのに、わたしたちは愛しあっているからこそ永遠に訣別しなければならないのだから……。

八郎、響の二人がそれぞれ甲賀、伊賀の異なる集団に組み入れられることになったのは、慶長十九年の殺戮戦が忍者社会に深刻な驚きと反省をもたらした結果からに他ならない。

そのとき無惨に犬死にした者のなかには――甲賀に如月左衛門、霞刑部、室賀豹馬などがいて、伊賀に薬師寺天膳、雨夜陣五郎、蓑念鬼などがいた。いずれも一騎当千のつわもの、畢生の忍法上手といっていい。

術をそれまで磨きあげるのに、どれほど凄惨な修行にはげみ、血を吐くまでの研鑽につとめたことか。それをあたら全員をことごとく血の海に沈めてしまった。何の益もないままに。

――あまりにも惜しい。あまりに悲惨でもあれば、愚かしくもある……。安らかに眠れ忍者戦士たちよ、もう二度と同じあやまちは繰り返さない……。

その深い反省と、後悔の念が、八郎、響の二人をして、忍者社会のいわば「宿命の子」として、一種の「象徴」たらしめることになったのではないか。そのために二人は、高野山の、その名も慈尊院村に預けられ、いわば甲賀、伊賀双方の総意のもとに育てられることになったのだった。

甲賀からは根来転寝という奇妙な名の、また伊賀からはこれもまた滑婆という奇妙な名の――いずれも十歳ほど年長の少年少女が派遣され、それぞれに御守り、世話女として、二人の世話をすることとなった。

さらにいたれりつくせりというか、甲賀から三人の男児たち――碁石才蔵、蜩七弦、甲羅式部――伊賀からは三人の女児たち――蓮、涙、現――いずれもやや年長の子供たちが遊び役として配され、一緒に育てられることとなった。

むろん、これが忍者社会の過去の殺戮戦に対する深い反省と後悔の念から起こったことであるのは嘘ではない。

が、それに等しく、いや、それにはるかにまさって――

その裏側で、八郎と響をともに育てることで、二人の間に男女の情愛を通わせ、育ませ、願わくんば無事に性交にまで至らせたいという、服部半蔵正広、およびその養子たる響八郎の深謀遠慮が働いていたことはいうまでもない。

これを滑稽な野心と見る向きもあろう。バカげていると嘲笑する者もあるかもしれない。

しかし衆目の一致するところ、響の盾眼術は母の朧にはるかにまさり、八郎の矛眼術は父の弦之介にはるかにまさっている。この二人が子をなせば、その子供の瞳術がいかなる超絶の域に達するか、まさに想像を絶するものがある。——その能力を徳川の官僚組織に組み入れることができれば、どれほど天下を経綸するの道を得るのに益するか、想うだに気が遠くなるほどだ。

もちろん伊賀、甲賀ともに、人をして一匹の淫獣に変え、あさましい性欲の奴隷に変える術、あるいは薬法の心得は数えきれぬほどある。どんなに行い澄ました聖人であろうが、清純きわまりない貞女であろうが、一夜もあれば、愚かしくも無慙破戒の性獣に堕せしめることは可能なのだ。

しかし、あいにくなことに、響に盾眼術、八郎に矛眼術があるかぎり、それが通用しないのだ。いかなる淫術も、ひとたび二人に視線を向けられれば、ひとたまりもなく霧散解消させられることになる。——どんなに迂遠に見えようと、二人をともに育て、成長させ、自然に男女の情が通いあうようになるのを待つほかはなかったのだ。

そして、その試みは見事に成功した。二人の間に男女の情が通いあった。いや、成功以上に成功したというべきか、彼らの間には世にもまれな至高の愛が育まれたのだから。

——しかし、これこそはいかなる名人上手の忍法者も予想だにできなかったことに、二人は愛するがゆえに性交することができない、という境地に入ってしまったのだ。忍者の世

界にプラトニック・ラブなどという言葉はないのだが。

響と八郎は三年前に永遠に訣別した。桜が満開と咲きほこる木々の下で——

その妖艶華麗に咲き乱れる桜の花々はいまも響の脳裏に絢爛とひろがっているのだが……。

御守りの根来転寝や、世話女の滑婆たちもすぐ横にいたはずだが、不思議なほど彼らのことは覚えていない。ただ春風に吹かれながら、霏々として降りしきる桜の花びらと、そのなかに淡い桃色の影となって静かにたたずんでいる八郎の姿だけが、鮮烈に記憶に焼きついて残されているだけなのだ。

いまも、いつまでも——。

当時の響、八郎はまだ九歳になったばかりで、いまにして思えば、あまりに子供でありすぎた。その子供心に、ふたりは別れなければならないこと、こうする以外に自分たちに生きるすべはないことを、悲しいまでにありありと自覚していた。

ふたりはそれ以前にそのことを明確に話したことがあったろうか。そのことをたがいに確認しあったことがあったか。たぶん、なかった。常識的に考えて、九歳の子供はそんなことは話さないだろうからだ。ましてや、響にしろ、八郎にしろ、ほかの子供たち——碁石才蔵や、甲羅式部、蜩七弦、蓮、涙、現たち——を交えて、みんなで遊ぶのに夢中で、二人きりでそんなことを話そうなどと夢にも思わなかったはずなのだ。

それなのに、どうして、その日、自分たちはこれから別れるのだ、別れなければならないのだ、ということを暗黙のうちに了解しあうことになったのだろうか？

それはいまにいたるも響にはわからないことだ。ただ――。

そう、ただ、たぶん、ふたりはそうと自覚しないままに、たがいの瞳術を読みあっていたのかもしれない。

八郎には父から受けついだ矛眼術がある……。響には母から受けついだ盾眼術がある……。それでは八郎の矛眼術に対するに、響の盾眼術をもってすれば、その結果はどうなるか。

どのような盾もつらぬく矛をもってして、どのような矛も跳ね返す盾を突けばどうなるか？　まさに矛盾としかいいようがない。――その結果がどうなるかは響にも八郎自身にもわからないことなのだった。

いや、じつは矛眼術にしろ、盾眼術にしろ、父の弦之介や、母の朧にまさって、ふたりの子供である八郎や、響のほうが、それよりさらに進化している、と見なすべきかもしれないのだ。具体的に、どう進化したのかはわからないが、さらに濃いものになりまさっている可能性は否定できないだろう。

もちろん九歳になったばかりの八郎や、響に、そのことを明確に自覚できようはずはない。ただ、そうと意識しないまま、瞳術の可能性を知らず模索していた可能性はある。

いま思えば、響は八郎の、そしてたぶん八郎は響の、心のうちを知らず知らずのうちに読み取ろうとしていたのではないか。言葉を交わさずに話をしていたのではないか。

そうすることが、ふたりは別れなければならない、そうする以外にこれから自分たちが生きるすべはない、という一致する結論に到達せしめたのではないか。

事態を入り組んだものにしているのは、ふたりがたがいに愛しあっている、というそのことだ。なにも瞳術などの助けをかりなくても、愛しあっているふたりは、自然に相手の胸のうちを読み取れるのではないか。それとも逆に、なまじ愛しあっているがために、妙な疑心暗鬼にかられ、相手の胸のうちを読み取ることができないようになってしまう、と考えるべきなのだろうか。

いずれにせよ――。

愛しあっていることが、ふたりのたがいに相手の胸のうちを読むという作業をより精妙なものにした、あるいはより混迷させることになったのは間違いないようだ。

そもそも、いま自分が読み取っていると思っているこれが、ほんとうに相手の想いだということを保証すべきは何もないのだ。もしかしたら、これは、相手の想いだと思いたがっている自分の想いであるかもしれないではないか。それにもう一つ――。

これはいまになって響が疑問に思うことだが、三年前、あのときの自分たちは、このまま二人の愛がたかまっていけば、いずれ性交することになる、と本気でそれを予想してい

たのだろうか？　わずか三年の違いにすぎないが、九歳の少年少女と、十二歳の少年少女とでは、まるで別の生き物といっていい。あのとき、九歳の響がどこまで男と女のことをわかっていたのか、自分でも疑問だ。

要するに、いろいろとわからないことが多すぎるのだ。あまりにも不確定要素が多すぎる。

たぶん、そうした歯がゆさ、もどかしさのようなものは、あのときの響も如実に感じていたのにちがいない。だから、ほとんど何かの発作のように、こんなことを口走ってしまったのかもしれない――

「これがわたしたちの最後なのだから――どちらの瞳術が優れていて、強いか、それを試してみようよ」

子供らしい無邪気な挑発のように見えて、それはある意味、少女のやるせない恋心の吐露でもあったのだが、むろん九歳の少女たる当人に、そんな自覚はない。

九歳の少年たる甲賀八郎にしても、それは同じことで――。

「バカいってらあ。そんなのできるわけないじゃないか。だって伊賀と甲賀の忍者が忍法試合をするのは禁じられてるんだよ。また、殺しあいになっちゃうからって――」

その声には恋の翳りなどまるで感じられなかった。

四

「また殺しあいに……」

「そうさ、なるかもしれない。また伊賀と甲賀の殺しあいに――おれと響の殺しあいに……そんなことになれば取り返しがつかないことになっちゃうよ」

「……」

十年まえの伊賀・甲賀の無惨にして凄惨なる殺戮戦は、この両派の忍者たちの心に深い傷跡を残し、そのことを公然と語るのはいまだにはばかられる雰囲気が強い。

第三者にしてからが慶長十九年の殺戮戦のことはめったに口にしない。いわんや、そのために両親を喪っているふたりであればなおさらのことに！　――八郎が響の申し出にすぐに応じようとしないのも、けだし、当然のことではあったのだ。

が、そのときの響は、自分たちはもうすぐ別れなければならない、しかもそれはみずからが選びとった別離なのだ、というやりきれない悲しみに、ほとんど冷静さを失っていたのだ。

せめて別れのあかしを残したい、という自分でも説明のつかない激しい想い――まさに恋の熱病としかいいようがないが――にとり憑かれていた。その別れのあかしが殺しあい

でもいい、何もないよりはいい、という自暴自棄の衝動にかられた。
「わたし――八郎となら殺しあいになってもいいわ」
反射的にそういい切った。
「それでも、かまわない」
「ダメだって」
「ダメでもいい」
「響、やめろ」
「八郎」
幼い響は自分でも自分が何をいってるのかわからずにこう口走っていた。
「一緒に死のう」
桜の花びらがふたりを包んで乱と舞った。いま響は自分も桜の精となってともに舞うのだった。
要するに、響は子供だった、ということだろうか。そうかもしれない。それは否定できない。――気がついたときには八郎の瞳を正面から凝視していた。それはもうすでに始まってしまっていた。
始まってしまった？　何が？　こういうことが。――
「……」

響は八郎の目を一心に見つめた。
八郎の目は湖のように深かった。わずかに褐色がかって潤んでいた。その瞳に響の必死の表情が映っていた。それをひたすら凝視した。
盾眼術が発動された。それが八郎の目のなかに飛び込んでいった……。
響の盾眼術はあらゆる術を無効たらしめる。それが兵法者の精妙きわまりない刀術であろうと、忍者の眩惑とどまらぬ忍法であろうと、たちどころにそれを、いわば武装解除してしまうのである。
母の朧も響と似たような力を持っていたという。ただ朧の場合は、あまりに無邪気にすぎて、自分の力がどんなものだか十分には理解していなかったらしい。無作為の作為というか、無技巧の技巧というか――自分でもよく、そうと意識せずに相手の力を無効にしてしまうことが多かったらしい。
このときの響はまだ九歳にしかならなかったが、もうすこし自分の力に自覚的だった。自覚的にならざるをえなかった。それというのも――。
このまま、ふたり一緒にいれば、いずれ、たがいに愛しさのきわみに心おぼれ、そのあまり、性交にいたらざるをえないだろう。その性交は、しかし忍者の宗家たる服部家の思う壺でもあって、瞳術をより濃厚たらしめるための――この時代にこんな言葉はなかったが――交配実験に他ならないのだ。

瞳術をより高度、完璧たらしめるために性交するのであれば、それは結果として、ふたりの愛を泥に投げ捨てることになる。ふたりの愛を否定する結果になる……それが嫌なのであれば、それを避けたいのであれば、ふたりは別離するのほかはない。

若くして、あまりに若くして、この「愛の自家撞着」、「愛の地獄」を自覚せざるをえなかった響が、どうして自分の力に無自覚でいられるはずがあるだろう。盾眼術は自分の身を守るための恵みであるのと同時に、八郎に対する「愛」を致命的なまでに妨げる呪いでもあるのだから。——

そう、響は自分の盾眼術がどんなものだか十分にわかっていた。わかっているつもりだったのだが。——

じつは、それでもなお十分ではなかったのだ。自分の瞳術がどんなものだか、それを完全には心得ているとはいえなかった。

八郎の目を覗き込んで、一瞬、ふたりの目に燧石を打つように火花が走ったとき、響はそのことに気がついたのだった。

——八郎兄ちゃんはわたしに何も悪いことしてない。意地悪もしてない。いじめてもいない。それなのに、わたしは八郎兄ちゃんに盾眼術をかけようとしてる。そんなこと、できっこないのに。

たしかに響の盾眼術をもってすれば、あらゆる相手の戦闘能力、戦闘意欲を削いで、いわば心の武装解除をすることが可能だ。けれども、それはその兵法者なり、忍者なりが、響に害意を持っている場合にのみかぎられる。——そもそも何もしようと思っていない人間、何の作為も持っていない人間の、いったい何を武装解除しようというのか。解除すべきものなど何もない。

響は八郎の目を凝視し、ほぼ反射的に盾眼術を発動したときに、自分のその錯覚に気がついたのだった。が、もういまさら後戻りはできなかった。響がどんなに自分の軽率を後悔したところで、いったん発動させた盾眼術を途中でとめることはできない。

しかし——。

ほんとうにそうだろうか。

ほんとうに八郎は響に対していかなる作為も持っていないのか？　そんなことはない。それこそ響の錯覚でしかない。なぜなら八郎は響に対して、ほかのどんな作為、どんな想いよりもはるかに重い「愛」を抱いていたのだから。それにしても——。

「愛」を「作為」と同列に論じていいものだろうか。それをすら盾眼術は解除すべき対象と捕捉するものだろうか。——たぶん、する。

これが思春期以降の「愛」——性愛であれば、盾眼術もそれを異物として検出することはなかったかもしれない。

その証拠に、彼らの両親たる弦之介、朧のふたりは、それぞれに強烈な瞳術を持ちなが

ら、それに阻まれることなく、順調に「愛」を育むことができたではないか。

が、響と、八郎はちがう。何といっても彼らは九歳の子供でしかなかったのだから。

思春期以前、第二次性徴以前のエロスがどんなものであったのか、ほとんどの人間は成長するにつれ、それを忘れてしまう。

大人になってからの「性愛」衝動があまりに生々しいものでありすぎるために、それ以前のエロスの衝動が必然的に忘れられてしまうのかもしれない。

しかし——

たしかに幼いが、いや、幼いだけになおさら、それは強固に純粋培養され、より狂おしく濃密に香りたつということもあるのではないか。ある意味、それは大人になってからの「性愛」をはるかにしのいで強烈なものなのかもしれない。

そうであれば響の盾眼術が八郎の「愛」を無視できようはずがない。——あたかも免疫細胞が体内に侵入した異物を排除するかのように、「愛」をも排除しようとしたのではないだろうか。

が、響に盾眼術があるように、八郎にも矛眼術がある。

矛眼術は自分に向けられた害意、悪意を反転し、そのまま相手に放つものである。八郎の「愛」を解除しようとした響の盾眼術は自分に対する害意として認識された。反射的に矛眼術が発動される。

つまり、相手の力を無力化せしめる響の盾眼術が、八郎の矛眼術にブロック、反転されて、そのまま彼女のもとにそっくり戻ってくることになったのだ。

これはある意味、「愛」を異物と見なし、それを解除しようとした響の盾眼術がそのままそっくり、ブーメランのように彼女のもとに戻ってきたと考えてもいいだろう。

つまり、響の盾眼術は八郎の「愛」を異物として検出し、八郎の矛眼術はそのプロセスを自分に対する害意、敵意として認識したわけだ。

が、響の盾眼術を受けて、八郎の矛眼術が発動され、それがそのまま、また響に戻ってきたために——

響の「能力」はそれをまた——無意識のうちに——自分に対する八郎の何らかの作為と受けとめることになった。九歳の少女の幼いエロスは自分に向けられた——これもやはり九歳の少年の幼い——「愛」を自分に対する害意と誤解したのだった。

いや、それを単純に誤解といい切ってもいいものかどうか——ローティーン以前の男女の「愛」はもしかしたらほんとうに相手に対する精神的な侵略であるのかもしれない。純粋なだけにそれは容赦なく相手を食いつぶそうとする。ついには相手を破滅にいたらしめるまでの——。

そうであれば、その、自分の精神に対する「侵略要因」を無効たらしめるために、響の盾眼術がふたたび発動されることになったのは当然かもしれない。八郎の「愛」を強制的

に解除しようとした。

そして、それはまた、八郎の「能力」から見れば、自分への攻撃と錯覚され、またしても——ほとんど必然的に——矛眼術が発動されることになるのだった。

幼いゆえに、「愛」を無意識のうちに恐れ、これもまた無意識のうちにそれを拒んで、はね除けようとする響の盾眼術……

幼いゆえに、何の疑いも持たずに、あらゆる障害を絶対的に排除し、どこまでも剛直に「愛」を貫きとおそうとする八郎の矛眼術……

まさに矛と盾——矛盾そのものだ。

ここに展開されているのは、性愛が芽生える以前、少年と少女の青いエロスが、魔法のようにあやなされ、不可能が可能へとつむがれようとする奇跡にも似た何かなのだった。

それまで誰も予想したことがない、その可能性を考えたことすらない、少年と少女のそれ以前のエロスが合奏してつむぎだされる忍法……。

もしかして、これこそはあの徹底して不毛で、凄惨、凄絶たる結果しか生まなかった慶長十九年の忍法合戦が、唯一、あとに残した成果たるべきものだったかもしれない。

どんな盾をもつらぬく矛を、どんな矛をも跳ね返す盾に突き入れたら、その結果はどうなるか。

その答えがこれだった。

すなわち、二人の視線が交叉するどこかの虚空に——。

それこそ、ほんの瞬きする時間のうちに、瞳術の無限ループが展開されることになったのだった。矛眼術と、盾眼術とが、無制限にループされ、その両者のパワーが混ぜあわされ、はてしもなく強大なものに育っていった。

いや、はてしもなく強大でありながら、しかし同時にそれは、まるで砂浜に偶然に描かれた風紋のように、繊細にして、はかなく、いまにもサラサラと消えていきかねない何かでもあるようなのだ。

矛眼術と盾眼術がループをなして無限につむぎだした何か——、もしかしたらこれこそが……

——愛？

五

人が人を見る、というのはどういうことだろう。

人が何かを見る……。

それは、その人が外界の光を捕捉し、弱いながらもそれを反射しているということだ。つまりは視線の方向に光が放たれる、ということなのだ。

光は波であるのと同時に、粒子でもある。

人に見られた人間は、自分の目に向けて放たれた光の粒子に、その眼底を反応させるのだという。フラッシュを焚かれて撮影された写真に人の目が赤く写るのは経験的によく知られていることだ。眼底の血管網が写るからだ、と説明されるが、それは要するに眼底が反射する光は赤い波長を選んでいるからに他ならない。もしかしたら脳は特異的に「赤」という色彩を選択しているのではないだろうか。

「赤」という色は人間にとって特別なものなのだという。人間が生存をより容易たらしめるために「赤」という色彩に敏感に反応するようになった——というのはどうも進化的に事実のようなのだ。

ふつうの人間でさえ「赤」という光の粒子を特権的に選別できるのだ。——ましてや忍者、それも響や、八郎のように「遺伝的に」選別された特別な忍者であればなおさらのこと。……

響や、八郎であれば、外界から捕捉した光の粒子を、相手の視神経から脳神経を経由させ、その特異箇所に衝突させることも可能なのではないだろうか？　——何といっても人の目は外界に露出した脳の一部といっても過言ではないのだから。

もちろん、この時代の響、八郎が、自分たちの瞳術がいかなるメカニズムによって発動されるものなのか、それを理解することができようはずがない。

自分の目から放たれた光の粒子が、相手の目のなかに飛び込んで、その奥部にある脳の機能を発動させる——などということは、とうていこの時代の人間の理解の外にあることだからだ。

が、ふたりの人間の目から放たれた——本来であれば相手の脳機能を発動させるはずの——光子が、どこか虚空の一点で無限ループされ、際限もなく増幅されるのだとしたら、どうか。そこにいかなる結果が生じることになるだろう？　それこそ響や八郎が絶対に予測できないことだろう。

その——予測できないことが起こった。

突然、なにか唸りに似た響きがふたりの間に湧き起こったのだ。もちろん、彼らの知識の範疇にあることではないが、それはまるでダイナモが高速回転しているような唸りだった。響にしろ、八郎にしろ、それを不審に思う余裕はなかった。何が起こったのか認識する暇さえなかったといっていい。わずか一秒、二秒のうちに、それは急速にのぼりつめていき、キィーン、という耳を聾する金属音にまでたかまって——ついに爆発したのだった。

そう、たしかに爆発した。しかし何が爆発したのかはわからない。そこには何も爆発するものなどないはずだったからだ。それなのに爆発した。

何かが。何が？　——目に見えないどこか、意識に捕捉されないどこかで、その何かは

強大なエネルギーを放散し、虚空に鮮烈に閃光をはためかせた。
それが、この「現実」にそのままフィードバックされた。
降りしきる桜の花びらが、目に見えない何かに圧搾されたように、ふいに宙の一ヵ所に凝集されたのだ。一瞬、二瞬、ふいに――それが下から猛烈に突きあげられ、大量に空に舞いあがったのだ。
舞いあげられた桜の花びらが、今度は花吹雪のようになって、地上のふたりのうえにザアッと音をたてて降りしきった。
――ああ、美しい。
響とも、八郎ともつかず、その嘆声が空にとどろいた。
たしかにそれはとてつもなく美しかったが、しかし響と八郎のふたりの顔は、その桜の花びらを桃色に透かし、なお青白いままだった。
このとき、ふたりは完全に子供時代に訣別したといってもいいかもしれない。ふたりは、愛しあう自分たちが、たがいに視線を交わしあうとき、そこにとてつもなく危険な力が発生することを知ったのだった。それはときにこの世界にヒビ割れを入れるまでの獰猛さを発揮する。そして、幼い二人は、いかにしても、それを制御することができないのだ。
彼らは何重にも呪われた恋人同士だった。矛眼術と、盾眼術……それは二人に無限の強

さを与えてくれるが、と同時に彼らを無限に拘束もする。それを知りながら、どうして無邪気な子供のままでいられるだろう？　このとき彼らの少年少女としての牧歌的な時代は永遠に終わりを告げたのだった。
花吹雪がおさまったとき……。
そこに二組の男たちが立っていた。四人、四人……。それぞれ別の組にはそっぽを向いている。そ知らぬふうを装っているが、たがいに――牙を隠すように――敵愾心を隠しているのが見てとれた。
いずれも一癖ありそうな――というか、どこかこの世ならざる別世界に身を置いているような雰囲気が強かった。見るべき者が見れば彼らを別派の忍者だと一目で見抜いたかもしれない。
「甲賀五宝連だ。おまえを迎えにきた」
と一群の男が八郎にそういい、
「おう、これは見事な花吹雪だ。われら伊賀五花撰がそなたを迎えるのにふさわしい」
と、もう一群の男がそう響に声をかけてきた。
これが最後の別れになると知りながら、響も、八郎も、もうたがいに視線を交わそうとはしなかった。
ふたりは愛しあっている。愛しあってはいるが、この世に、その「愛」ほど恐ろしいも

のはない。その「愛」はいずれ二人を殺すだろう。――響は八郎の、八郎は響の瞳術をそれぞれに恐れていた。なにより自分の瞳術の力があまりに悲しかった。愛しあっているのであれば……もう二度とは会わないことだ。たがいに視線を交わさないことだ。

これが三年前、ふたりが、桜の花びらが降りしきる樹々の下で別れた顚末のすべてなのだった。

そして――

今日このときにといたる……。

……あれから三年が過ぎた。響は十二歳になった。この時代の年齢感覚からいえばすでにもう少女ではない。あれ以降、八郎とは一度も会っていない。これからも会うことはないだろう、と思う。

それなのに、八郎がいつも自分の身近にいるのを感じていた。なにも八郎に対する思慕の念からそんなふうに思うのではない。事実としてそうなのだ。

九度山・慈尊院村を離れ、伊賀の里に戻り、五花撰のひとりに迎えられた。伊賀の宗家として公儀お庭番を一手に統べる服部家がある。その服部家からは、ふたりの「瞳術」をより完璧あらしめるために、願わくば響と八郎が結ばれんことを――という無言の圧力をひしひしと感じつづけた。

どちらかというと甲賀忍者は個人技能に長けている。それに比して伊賀忍者は集団において才を発揮することが多い。とりわけ伊賀五花撰は花防御陣なる陣形を敷くのに独特の才能を発揮した。少人数での防御陣としては最高の完成度を持つにいたったといっていい。――そして、響の盾眼術はその花防御陣の洗練に貢献するところ大だったのだ。そのことがなければ、いかに響に盾眼術があろうと、いずれ服部家の圧力に屈せざるをえなかったかもしれない。

たんに響に盾眼術があるだけなら、これほどまでに五花撰に重用されることはなかったはずなのだ。響の能力にはそれ以上のものがあった。いまや響の盾眼術はたんに自分に敵意を持つ人間の「術」を無効化するにとどまらなかった。

どうして響がそのような能力を持つにいたったのか。あの桜の里で、八郎と別離するまぎわに、自分でもよく説明することのできない、不思議な体験をした……じつに、あのとき以来のことなのだ。

あのとき――。

響の盾眼術と、八郎の矛眼術とが、どこか目に見えない「虚空」で交叉し、同調し、重層し、坩堝のように渾然と一つに溶けあうのを感じた。魂が宙に飛ぶかのような感覚を覚えた。

熱かった、冷たかった、荒々しかった、優しかった、激しかった、静かだった、嬉しか

った、罪悪感があった……。

もちろん響は、あのときも処女だったし、いまも処女のままなのだが、あれが性的な絶頂感に近いものだったことは本能的に感じ取っていた。響は処女でありながら、およそ女性が体験しうるかぎりの最高のエクスタシーをすでに体験していたといっていい。

が、あの体験はたんにそれのみにとどまらなかった。響と八郎との間、どことも知れぬそこに、あの絶頂感から生まれた、なにか奇妙な「場」のようなものが形成されるのが感じられた。その「場」を通じて、響はつねに八郎の存在を感じ取っていたし、それはおそらく八郎の側も同じであるはずだった。

ふたりはどんなに離れていても——その「場」に接触しさえすれば——たがいの情報を共有することができた。たがいの体験を分かちあうことができた。その感覚は、ふたりに近しい人間にまで拡大され、響はその気になれば甲賀五宝連の動向を知ることができたし、(たぶん)八郎のほうでも伊賀五花撰の動向を知ることができるはずだった。

響はいつしかその「場」を〝桜花〟と呼ぶようになった。八郎がそれをどう呼んでいるかは知らない。

いつも——〝桜花〟を介して——八郎の存在を身近に感じている。十二歳になった響はもう「愛」の何たるかを痛切に知るまでに成長した。ただもう、愛しい……。

でも、響に盾眼術があり、八郎に矛眼術があるかぎり、どんなに愛をつのらせようと、たがいの体に指一本触れることもできないのに変わりはない。触れれば、それは一穴の決壊となり、ついには最後の一線を越えずにはいられないだろう。それは二人の「愛」を泥濘に投げ捨てることになる。

それはできない、嫌だ……。

響はいつも〝桜花〟に茫乎とした視線を向ける。あの日のように〝桜花〟に桜の花びらが爛漫と咲き誇っている。それを一枚たりとも散らしてはならない。〝桜花〟の桜の花びらが散ったとき——響と八郎の「愛」もまた終わりを告げるはずなのだから。

六

ふいにお堂の闇のなかに「お成りーっ」という女性の声が聞こえた。

闇のそこかしこから衣擦れの音が聞こえてきた。手燭をともした女たちが何人かお堂のなかにしずしずと現れた。その火を幾つかの燭台に手際よく移していく。お堂のなかが昼と見まがわんばかりに明るくなった。女たちの動きに無駄はない。裾さばきもあざやかに動きまわり、まどの蔀戸を次々に開けていった。堂内の火あかりを受けて外の景色があざやかに浮かびあがった。外は真っ赤に染まっていた。

——桜。

一瞬、響はそう錯覚したが、いまは九月だ、そんなはずはない。
紅葉なのだ。
全山を紅々と染めあげて、目も覚めるような紅葉が、夜風に静かに揺れている。——江戸広しといえども、これほどまでに見事な紅葉に覆われた山はそんなにはないだろう。
それも当然、この小山はその名も紅葉山という。江戸城本丸と西の丸のほぼ中間にあり、前代大御所・家康公の廟所（東照宮）が祀られた、まさに徳川家の聖地といっていい。
その聖地のなかにある観音堂に、これほどまでに多勢の侍女たちをさきがけにし、いったい、いかなる貴人がお越しになられるのであろうか。
「これ、響殿、何という格好をなさっておいでじゃ。大御台所様のお成りであるぞ。いますこし、かしこまりなされい」
侍女のひとりがそう響に注意する。
「はいはい」
さすがに響は威儀を正した。といっても、裾みじかの軽装では限度がある。欅柱にもたれ掛かるのをやめ、かわいい膝小僧をきちんとそろえて、正座するのがせいぜいだ。
——大御台所様のお成り？
この世に大御台所様、といえば、ただひとり、大御所・秀忠夫人の江与しかいないはずだが、彼女はいま危篤の床にあるはずではないか。それがどうしてこの観音堂を訪れるというのか。
「お成りであるぞ、しずまりなされ、しずまりなされ」
その声とともに——。
まずは、目にもあざやかな蜻蛉に萩をあしらった打ち掛けを着た中年寄——といってもまだ二十代なかばのようであるが——が何人かの侍女をともなって、しずしず露払いのように現れた。
「あ、滑婆、わたしだよ、響だよ」
響が嬉しそうに手を振った。
「おう、響であるか。お役目ご苦労である。大御台所様はすぐにもお越しになられるゆえ、暫時、暫時——」
中年寄は鷹揚にうなずいた。
大理石から削りだしたような、玲瓏たる、気品に満ちた美貌である。——大奥の最高位たる上臈御年寄には、公家の出身が多いために、臈たけた美女が多いとされるが、さすがにここまでの美貌の主は少ない。まさに月から舞い下りたかと思わせるほどの美しさなのである。
「そちたち、先に行きゃれ」
彼女は冴え冴えと月光の輝くような顔を侍女たちに向けて、

「わたくしはこの下賤の娘とすこし話があるゆえに」
「げ、下賤の娘――」と、これは響だ。
「はい」
侍女たちは花々が風に吹かれるようにお堂の奥に去っていった。
中年寄はおもむろに響に顔を向けると、いきなり、このバカ、とそう決めつけた。
「へ？」
「その名で呼ぶなといってるだろが――それに何だよ、その格好は。大御台所様にお目見えだっていうのに、もうすこし、まともな格好はしてこれなかったのか。だから、あんたはバカだってんだ、このバカ、バカ、バカったら、バカ」
もしここに彼女の典雅なたたずまいに恍惚として見とれる男がいたとしたら――事実、そんな男は少なくないのだが――それこそ腰を抜かしてしまいそうな、口汚い言葉でののしった。
「あいかわらず口が悪いなあ、滑婆は」
さすがに閉口したらしく、響は苦笑して、
「だけど仕様がないんだよ。わたしのお役目は、大御台所様にお目もじするばかりでなしに、紅葉山に花防御陣を敷かなければならないお役目もあるんだからさ」
「そんなのはいつものように五花撰にまかしておけばいいだろうに」

「ところが、今夜はそうもいかない。敵が近づいてるんだよ」
「敵？」
滑婆、と呼ばれた彼女は、わずかに眉をひそめ、
「敵って何？　いまの徳川にどんな敵がいるというのよ」
「わたしにもわからないよ、滑婆」
「滑婆いうな。いまのわたしは、お登志局だ」
「はっきりいうけどさ。お登志局は、落としの局の意味でしょ？　滑婆と同じぐらい、おかしな名じゃない。だったら、もともとの滑婆のほうがましなんじゃないかしらね」
落としの局――十数年まえ、燃えあがる大坂城から、家康の孫たる千姫を落とし参らせたのは、じつにこの滑婆なのだった。
伊賀の女たちには、他家に嫁入りする貴人の女性に侍女としてつき従い、城が落ちるときには、その女性を救出するのをなりわいとする者が多かった。
賤ヶ岳の合戦において、北の庄城が落城し、柴田勝家・お市夫妻が自害したおり、茶々、初、江の三姉妹を落とし参らせ、秀吉の陣所に連れ帰らせたのは、滑婆の血筋の女だったという。
そのときの話を姉から聞き、滑婆一族の「落とし」の技術に寄せる江（現・大御台所）の信頼は絶大なものになった。

娘・千が秀頼の幼い妻として、大坂城に輿入れするとき、とくに滑婆を名指しして、侍女として同行するのを命じたのはそのためであったのだ。

滑婆の名の由来は、いかなる困難な情況にあっても、姫様、奥方様を、水のように「滑らかに」落とし参らせるという意味に、産婆の語感を混ぜたもののようだ。

滅びいく婚家、父の家から逃れ、新たなる天地を求めて生きる——という戦国の女たちのさだめが「第二の誕生」を連想させるから、ということもあるらしい。

最初の誕生を助けるのが産婆、第二の誕生を助けるのが滑婆ということだろう。

江の期待にこたえて、見事に滑婆は燃えあがる大坂城から無傷で千姫を落とし参らせた。

その後、滑婆は大御台所様に仕え、江戸城大奥に入ることになったが、幼い江を落とした血筋の娘で、おのれも千姫様を落とし参らせた——ということから「落としの局」の名を授かった。

伊賀忍者の前身を覚られるのを嫌い、いまは、お登志局と称しているが、それが同じ境遇にある伊賀の娘たちにはおかしくてならないらしい。

何かというとそのことをからかわれる。いいかえれば、それだけ滑婆がアネキぶんとして伊賀の少女たちから慕われているということでもあるのだが。

いまも響は滑婆をからかってこういう。

「そうか、お登志局は、お齢の局なんだ。もう、お齢なんだってことか」

と——、入り口のほうから含み笑いの低い声が聞こえた。

手燭を捧げ持った侍女がひとり入ってきた。十四、五歳か。

これもまた目を見はらんばかりの美貌の主だ。——響が女の子から少女にさしかかる青春美、滑婆が典雅な気品美だとしたら、この少女の美しさをどう形容したらいいか。

少女だ。たしかに少女ではあるのだが、美少年のような容姿だ。スラリと上背が高く、きりりとした男眉に、見るからに聡明そうな明るい目が印象的だった。——その左手の、掌だけに、五本の指を出した、赤い革バンドを巻いている。これは何のつもりか。

「あ、蓮、久しぶりだね、元気ィ?」

響が明るく声をかけると、その蓮と呼ばれた少女はニコリと笑って、ただうなずいた。

「わかった、わーった、もう滑婆でも、お局でも何でもいいよ。好きに呼びな。それより——」

滑婆の表情が真剣さを増し、

「敵が近づいてるってのはほんとうなのか」

「うん」

「だって、ここは江戸城なんだぜ。どこの誰が江戸城に忍び込むってのよ。不可能だろが——」

「うん、だよね。でも、ほんとうなんだよ」

まるで風が流れるように蓮が近づいてきた。その表情に緊張の面持ちが濃い。いつもながら蓮は極端に無口だが、いざというとき、これほど頼りになる少女はめったにいない。

「敵がいるとして——そいつらは、何のために近づいてきてるんだ」

彼らの会話はじつは伊賀忍者独特の話法によるものである。この話法を使えば、三間や、四間、離れていても忍者同士であるかぎり、話し、聞くことができる。——常人にはものの半間も離れれば、もうその声を聞くこともできないのであるが。

七

そこで二人が話すのをやめたのは、「お成り——」の声とともに、観音開きの正面扉が左右に大きく開かれたからだ。バタバタ、とあちこちから板の鳴る音が聞こえたのは、一斉に侍女たちが平伏したからにちがいない。もちろん、響たちもそれに倣う。

外には何灯ものかがり火が焚かれ、境内の紅葉をあかあか照らし出している。その真っ赤な色彩が燃えあがらんばかりのようだった。そのなかに三体の人影が浮かびあがった。お堂の階段をゆっくりと上ってきた。

「者ども、頭が高い。大御台所様のお成りである」

上臈御年寄のりんとした声が堂内にとどろきわたる。

「おいでなされませ、大御台所様」

平伏した侍女たちが、おいでなされませ、大御台所様、と声を合してそういい、さらに低く身を伏した。

——はて、大御台所様——江様——はいま重い病に臥せっておいでのはず、オン身動きもままならぬご容態とお聞きしたが。……

お目見え以下の女中のなかにはそう疑問に思った者もいるかもしれない。その者は階段を上がってきたそれを見て驚きに目を見はったはずである。

ふたりの侍女がしたがっている。——大奥の女たちにはあまり見覚えがないのも当然で、ふたりとも伊賀の女なのだ。

ひとりは涙という。青みがかった瞳に、繊細な顔だち、茱萸のように赤い豊かな唇、それにキュッとくびれた腰が何ともいえず色っぽい。眼病でも患っているのか。左目に黒い眼帯をかけていた。それがまた色っぽさをなおさらに増している。——いや、十四、五歳にして、この色っぽさでは、先行きどうなってしまうのか、とよけいな心配をしたくなるほどの妖艶さなのだ。

もうひとりは現という。やや丸顔で、頬から顎にかけての輪郭がけぶるように優しい。つぶらな瞳に、長い睫毛……これはまた清純可憐をそのまま絵に描いたような愛くるしさ

だ。――首に、これはどうやら南蛮渡りのものらしい、絹のスカーフを巻いていた。赤い花が刺繍されているのが目に鮮やかだ。

ひとりは天性の娼婦のように妖艶、ひとりは天使のように清純……ふたりながら未熟な男が異性に抱く、勝手で、幼い――といっておこうか――妄想、夢想をわざとのように体現したような忍者の少女たちではあった。

が――ここに居ながれているのは大奥の女たちなのだ。どんなに妖艶で、愛くるしい少女が現れようと、そんなものに目を見はったりはしない。そもそも美女には食傷している。

「……」

彼女たちが一様に目を見はったのは、涙と、現が、両側から手をそえて運んでいる釣り台のほうなのだった。――そのうえで病人が横臥している。見れば、初老の、小柄な女性で、病にやつれてはいる。が、それにしても人間一人の重さだ。少女ふたりだけの力で、彼女が横臥した釣り台を運ぶのは常識的にいって無理だろう。それを彼女たちは難なく運んでいる。

いや、運んでいる、といったのでは語弊があるかもしれない。運んではいない。実際には、彼女たちは両側から釣り台に手を添えているだけなのだ。その手の動きだけで、釣り台の進みいく方向はもちろん、階段を上るか、下りるかまでを的確に誘導している。つまり、釣り台はなかば自力で動いているのだった。

釣り台の脚部両側に幾つか小さな車輪が装着されているのは不思議はないとして、それを囲むようにして、楕円形の大きな履帯のようなものが付いているのが異様だった。――要するに、キャタピラ、なのだが、この時代の人間たちは誰もこれまでそんなものは目にしたことがない。――どうやら、その履帯が前後に動くことで、どんな泥濘の不整地も動けるし、階段すら上がり下りできる、ということらしいのだが。

どうして自力で動けるのかは、内部を見なければわからないだろうし、もしかしたら見てもわからないかもしれない。ただ、何かが噛み合うような音が絶えず聞こえてくることから、その内部で何かが動いているのだろう、ということが察せられるだけのことだ。

ここにいる誰も知らないことだが、その釣り台には、数日前、家光が禁裏におわす後水尾天皇をお迎えにあがる際、その行列のなかにあった、あの自走する鳳輦車を連想させるものがあった。似ている。

もちろん、その大きさにおいては、この両者は比較にならないほど違っているが、自力で動く、というその一点においては、大いに共通するところがあるようだ。この両者――両車というべきだろうか――が同じメカニズムで動いているかどうかは、いまのところ、まだ不明としかいいようがないが。

「それは、根来転寝が作ったものなのか」

滑婆が忍者話法で、涙、現だけに聞こえるように問いかける。
「うん」
と、これは涙だ。ちょっと笑って、
「気になる？」
「誰が――また、らちもないものを作って」
「あんなことといっちゃって」
「無理しちゃって」
と、これをいったのは現だ。ふたりしてコロコロ声をあわせて笑う。といっても、これも忍者話法のうちで、おそらく忍者以外、ふたりが笑っているのに気づくことはないだろうが。
「根来転寝はどこにいるの？」
滑婆にもここでは伊賀の女たちの最年長者だという矜持がある。あまり露骨に転寝のことを聞いて、少女たちに足元を見られたくないという計算もある。精一杯の威厳をもって、転寝のことなんかどうでもいいんだけど念のために聞いておこう、という様子を装って訊いた。ほんとうは転寝に会いたいという思いが強かった。
「残念でした――この釣り台を置いて帰っちゃった。かたっ苦しい大奥は性に合わないからって……」

涙は意地が悪い。ニヤニヤ笑いながらそういった。
根来転寝――は甲賀の出身である。
といっても忍者といえるほどのわざは何も持っていない。それどころか、成長するにつれて全身の筋肉が萎縮する奇病を患っていて、いまや日常の立ち居振る舞いにさえ不自由するほどである。
その名からも察せられるように、その先祖の誰かの運命が、根来僧（学侶方）、あるいは根来衆（行人方）のそれと交叉したことがあるらしい。――根来の男と甲賀の女が恋に落ちたか。
根来転寝は妙な男だ。奇病のために身動きもままならない、といえば悲劇性がきわだつように思うが、この男にかぎって、そんなことはない。それどころか、忍者としての才能を甲賀の誰からも期待されていないのをいいことに、いつも奇妙きてれつな機械の製作に没頭していて、その日常にはなにか妙なおかしみがある。
が、それをいうなら、そもそも根来衆それ自体に妙なところがあるのかもしれない。
根来衆は鉄砲を得意とする武装集団ということにされ、信長を狙撃したとされる杉谷善住坊も根来僧のひとりだったということになっている。が、じつは根来僧への鉄砲伝来が喧伝されたのは、およそ六十年後に禅僧・南浦文之が種子島領主の命で記述した『鉄炮記』によるのみであり、その信憑性にははなはだ疑問がある。

それなのに、どうして根来衆は鉄砲集団であるとか、はなはだしきは忍者集団である、などという説が、後世、これほどまでに流布されるにいたったのか？

じつは、それはよくわからない——としかいいようのないことだが、もしかして根来集団が「鍛冶」の技術に非常に優秀だったから、という可能性はないだろうか。たたら製鉄の技術に長けていたから、という可能性は考えられないか。

たたら、はすなわち「踏鞴」である。還元反応をうながすために鞴を踏んで空気を送り込む……その知識にくわしかったことが、根来衆をして、機械工作の技術に目覚めさせた、と考えるのはあまりに突飛すぎるだろうか。そのことが、鉄砲集団、という連想を生じさせた、とするのはあまりに空想がすぎるか。

いずれにしろ——。

根来転寝はじつに明治以前の日本にあってエンジニアのはしりといっていい奇才の持ち主だった。忍法にはまるで興味を示さず、その才能も皆無だったが、こと奇妙な機械を考案し、作ることにかけては、天性の才を発揮した。

その自力で動く釣り台などまさにその最好例といっていいだろう。もっとも甲賀においては、彼の才能はまったく評価されず、それどころか、あの甲賀五宝連などからはほとんど嘲笑されてもいたのだが。——

が、根来転寝はそんなことはまるで意に介さず、ただ楽しげにおのれの道を邁進していたのだった。

——そうか。転寝は帰っちゃったのか。

滑婆は内心でかすかに落胆している。

どういうわけか滑婆は根来転寝のことが気になって仕方がない。慶長十九年の一件以来、伊賀と甲賀の対立意識はいちじるしく緩和されたが、まったく解消されたわけではない。まだ、どこかにわだかまりを残していたし、もともとが別の忍者集団なのだ。かかわりは浅い。

ただ滑婆を筆頭とする、蓮、涙、現、の伊賀の女たち——それに根来転寝を筆頭とする甲羅式部、蜩七弦、碁石才蔵の甲賀の男たち——の関係は、一般的な意味での伊賀と甲賀の関係では説明しきれないところがある。

響、八郎の二人の御守り役、世話女、それに遊び役として、ともに九度山・慈尊院村で育った日々が、彼らのなかに独特の感情をつちかっていた。

幼なじみ、一種の同志愛、それに少年、少女期から思春期をともに過ごした、ふしぎに甘酸っぱい、どこか感傷的で、懐かしい日々……。

彼らの想い、ひとしなみに、桜、爛漫と咲き誇る、春うらうらな高野九度山・慈尊院村が、さながら失楽園、子供時代の桃源郷のようにかすかに揺曳しているようだった。

——そうなんだ、転寝は帰っちゃったんだ……。

となおも未練に滑婆は思う。
根来転寝のことが気になるからといって、それ以上なにがどうなるわけでもないが、それでも気になることは気になる。
それに——腹立たしいことに、どうも、そんな滑婆の気持ちが、年下でもあり、ときに配下でもある蓮、涙、現、もっとも年下の響にいたるまで——見透かされているらしい。
何かというとからかってくる。じつに怪しからんことではないか。すこし嬉しくないこともないけど……。
が、いまは根来転寝のことなど思い出しているべきときではなかった。
自動する釣り台のうえから、
「響はそこにいるかや」
と大御台所様が声をあげたのだ。——釣り台が静かに停止する。
大御台所様が半身を起こそうとする。急いで両側から、涙と、現のふたりが手を添えて支えようとする。
「手を離しや。まだ、体を支えてもらわねば起きあがれぬほど弱ってはおらぬ」
病にやつれてはいるが、さすがに二代大御所・秀忠公のご正室、天下の大御台所様だ。その威風、見事に堂々として、たいていのことには気遅れなどしない涙、現、二人の女忍者が、面を風にうたれでもしたように「申し訳ござりませぬ」とかしこまって、床に平

蜘蛛のように伏している。
「響はおるかや」
「オン前に」
さすがに響、流れるように江のまえに進み出て、ピタリと身を伏した。
「おお、響よの、息災であったか」
江の、響を見る目が優しい。
「はい、西の丸大御台所様、おかげさまにて——」
「今夜にいたす」
「は？」
「今夜、『両御台様』にお目にかかることにした」
「り、『両御台様』に？　——大御台所様、そ、それは——」
よほどのことがないかぎり、およそ動揺などしそうにない響が、どうしたのか、このときにはサッと顔色を変えた。
「今夜じゃ、今夜をおいてその機はもう他にない」
「で、ですが大御台所様——」
「わたしはもう長うはない、急がねば間にあわぬ」
「大御台所様……」

女たちの間に緊張が走った。
「早々に支度しやれ」
「は」
江の号令一下――女たちは一斉に動いた。
彼女が「虫気」――腹痛――を訴えて床に伏したのは今年の三月のことである。以来、半年もの間、重篤の身にあったはずの彼女の、この気迫の充実は信じられないほどだ。その病にやつれた顔に、いま、ほんのり血の気がさしている。
それもどうやら希望の精気ではなさそうだ。何に対してか、日本史上、ただ一人、「大」御台所様の尊称で呼ばれたこの女性が、怒りに頬を染めているようなのだ。――
二日前の九月十一日に江・危篤の飛脚は京に届いている。いま、すでに忠長は必死に東海道に馬を駆っているはずである。まさに江は重症の、明日をも知れぬ命にあるといっていい。
それがいきなり、紅葉山の観音堂に、響を召し出せ、いますぐ会う、との火急の召し出しがあった。
滑婆を除いて、響、蓮、涙、現の四人は、服部家指揮下にある伊賀の女ではあるが、大奥に属しているわけではない。召集するのに時間がかかる。
西の丸の女たちがその実現に風に追われる花々のように奔走したことはいうまでもない。
そして、いま――。
江は「両御台様」にお目にかかりたい、といい出したのだ。それがよほどの覚悟であることはいうまでもない。
「恐れながら、なめん――あ、いえ、お登志局様、蓮、涙、現の四人の者以外のお人払いをお願い申しあげまする」
「伊賀の女たちのみで儀をつかさどりたい、と申すか。さもありなん――いや、そのほうがわたしにとっても好都合でもある」
江はうなずいて、松月、と上臈御年寄に声をかけると、
「聞いたかや、ここまでご苦労であった。礼をいう。皆の者を早々に下がらしゃ」
「は、オン心のままに」
あっという間に、観音堂から女たちの姿は消えた。扉もぴたりと閉ざされる。その格子戸の隙間からかがり火の明かりが洩れて揺れた。
「これでよかろう、響。――もはや、ここにいるのは、そなたたち伊賀の女と、わたしだけじゃ」
「恐れながら、大御台所様に申しあげまする――」
滑婆がツッと膝を進めた。

「おお、おとしか。ますます女っぷりに磨きがかかったではないか」
「はい、ありがとうございます。されどお登志は肌がおとろえましてございます」
「よい化粧水がある。さしつかわそうか」
「もったいのうございます。それより――」
滑婆は声をはげまして、
「ここにひかえおりし、響なる者、ご覧のとおりの年少者ではございまするが、かの伊賀五花撰の末端に加えられしほどの者にて、その術の冴え、わざの切れ、われらの目から見ても恐ろしいばかりにて――まずは伊賀の女忍、随一の者にてございましょう」
「聞いておる。かの弦之介と朧の落としダネとか……酷いことであった。さぞかし徳川のことを恨んでいようほどに、のう」
「何を仰せられます。もったいないお言葉でございます。オン徳川家をお恨みするなど途方もないことを――あの死闘があればこそ、伊賀、甲賀の、血で血を洗う、積年の毒の宿命があたかも春の雪のごときに溶けたのでございますれば。ただ……」
「ただ、何じゃ」
「先ほども申しあげたように、この響の忍法、なかなかに侮りがたく――恐ろしゅうございます。怖うございます。されば、まことに恐れ多きことながら、大御台所様には、いま一度、ご覚悟のほどをお確かめいたされたく――大御台所様にはまことに『両御台様』にお会いになられるお覚悟がおありでしょうや。それは、それは……」
「すなわち、わたしが死ぬるときだと左様に申すか」
「はい」
さすがに気丈な滑婆がこのときには顔を上げることすらできずにいた。
「いうに及ばず――存じている。『両御台様』にお目にかかるからには、もとより死を覚悟してのこと――わが命など何ほどのことがあろうや、死を視る、鴻毛よりも軽しとす……忘れたかや、わたしはすでに小谷城、北の庄城、二度の落城にて、わが命を刃の下にさらしているのじゃ」
「あ」
一瞬、間を置き、滑婆は深々と一礼し、
「オン覚悟のほど、確かに承りましてございます」
といった。しかし、頭を上げたときには――
その顔が恐ろしいまでに蒼白になっていたのだ。
――え?
なぜなら、その刹那、紅葉山にて鉄壁の花防御陣を敷いているはずの伊賀五花撰の――そのうちの一人、諸行枯葉の声がこう頭のなかに聞こえてきたからである。
――敵が現れた。いまにも花防御陣が破られそうじゃ。われら、何人、生き残ることが

できるか予断を許さぬ。あるいは全滅させられるやもしれぬ。それほどの敵ではある。

「……」

滑婆の視線がすばやく伊賀の女たちの顔を舐めた。誰の表情にも変化がない。どうやら諸行枯葉は滑婆だけにその意を伝えてきているようだ。

響を一種の霊媒、というか——この時代にそんな言葉はないが——触媒のようにし、彼女が自分に近しいと感じている人間の間でのみ、声を出さずに、内心で思っていることを伝えることができる。それも——そうとうに距離が離れていても可能なのだ。

それが響の盾眼術から派生したものであることぐらいはどうにかわかるのだが、それ以上のことはどうにも説明がつかない。どうしてなのかはわからないが、とにかくできるのだ、としか言いようのないことなのだった。現代でいうクラウドのような「桜花」の働きはあまりに精妙複雑にすぎて、女忍たちはもちろん、当人の響にさえよく理解できずにいる。——現代人であれば、むしろそれにテレパシーという言葉を当てはめるかもしれないが。……

これまで滑婆はその一種の「思念術」をほとんど使ったことがなかったから——そもそも忍者話法の心得があればそんなものはほとんど必要ないのだ——、これほど遠くから、しかも触媒たる響に気づかれることなしに、こんなふうに特定の人間にあてて「思念」を届けることができる、などとは夢にも思っていなかった。

そのことには驚かされはしたが、さすがに伊賀女忍のアネキぶんたる滑婆だけのことはある。すぐにその顔が能面のように無表情なものになった。——頭のなかの声にじっと聞きいった。

——されど滑婆よ、このこと、かまえて響には覚られてはならぬ。響までも死なせてなるものか。この敵は恐ろしい。じつに恐ろしい相手であるわい。いまさら響が来たとてこの劣勢がどうなるものか。このうえ響を殺したとて何になろう。

諸行枯葉の声がつづいた。

——なにより、われら伊賀五花撰ともあろう者が、女子供を道連れに、死出の旅路についたとあっては後世までの名折れになろう。よいか、滑婆、響をここに来させるでない。頼む、頼む、くれぐれも、そのことしかと頼んだぞ……。

——承りましてございます。響にはこのこと内緒にいたしまするほどに——どうぞ、ご安心なされませ。諸行枯葉様、伊賀五花撰の皆様、ご存分にお働きあれ。

いまや滑婆の表情は凄いほどの無表情になっている。諸行枯葉に自分の「思念」を送りながら、ひたと正面を見すえ、その視線は揺らぎもしない。

滑婆の右腕ともいうべき蓮だけがわずかに彼女の異変に気がついたようだ。じっと滑婆を見つめている。

——おうよ、働かいでか。ここがわれら伊賀五花撰の死にどころよ、あの世で甲賀五宝

連と忍法話をするのが楽しみであるわい。
——されば諸行枯葉様、皆みな様、オン立派に——死に候え。
滑姿はぴたりとかしこまった。頭のなかで深々と一礼した。

八

観音堂に伊賀の女忍たちだけが残り、響が江のために忍法を披露しようとしていたまさにそのとき——
寛永三年（一六二六）九月十四日の朝が明けようとしていた。
新暦では十月の初旬ぐらいになるだろうか。
まさに紅葉、黄葉は江戸城・紅葉山に真っ盛りを迎えようとしていた。貴婦人の打ち掛けに金糸、銀糸であやなされる刺繍のように江戸城・紅葉山を華麗にいろどっていた。
しらじら明ける曙光のなかにパッと血しぶきが散った——
ように見えたのは見あやまりで、おりから吹き過ぎた風に紅葉が散ったにすぎない。
風が吹く、吹く、吹きわたる……おびただしい紅葉が空に舞う、地に蕭々と降りしきる……淋しい秋雨のように。
その降りしきる落葉のなかに人影がうずくまる。

地に耳を当てているのは——。
蔦法悦だ。
ここに——。
一滴の水も洩らさず、一匹の蟻も通さぬのだという、伊賀五花撰・鉄壁の花防御陣がある。——陣を張るのに、女郎花に、曼珠沙華、紅葉に、睡蓮を使った、と法悦は諸行枯葉にいったものだ。
まさにそのとおりだ。
伊賀五花撰は紅葉さえも防御陣に利用する。陣を破って、人が押し入ろうとすれば、必ずや落葉ふりしきる音に破調が生じる。落葉ふり積もる枯れ葉の褥に跫音が響く……。五花撰の忍者たちはそれを敏く聞きつけて逃さない。いずれも人間聴音器ともいうべき天性の警備者たちなのだった。
ましてや蔦法悦はすでに五十代もなかばにさしかかっている。その眼術、聴術の冴えはすでに名人の域に入っている。
斃死、惨死、刑死、窮死……非業の死を遂げるのが当然とされる忍者にあっては、きわめて例外的な長命といっていいだろう。
じつに天正十二年（一五八四）の小牧・長久手合戦を皮切りに、数えきれないほどの戦場を、忍者として跳梁してきた男なのだ。

それというのも、ほかの忍者に倍して視覚を研ぎ澄まし、聴覚を鍛えることに、努めてきたからに他ならない。臆病なウサギのように五感をきわだたせ、獰猛なオオカミのように牙を研いできた。

花防御陣の一翼を担うのに、これほどうってつけな人材もいないだろう。五花撰のほかの仲間たちからの信頼も抜群といっていい。何人といえども蔦法悦の五感を盗んで防御陣を突破することはできないはずなのだった。その蔦法悦が、だ。

「これはどうしたことか」

いま狼狽の極みに達している。混迷の淵に迷っている。

守るべき観音堂を中心にし、ぐるりを花防御陣が囲んでいる。その最外輪をなしているのは——ここは江戸城の紅葉山だから当然なのだが——この庭園に最も多い紅葉である。その紅葉の最外輪が破られたのだ。誰かが侵入した。じつにあっけなく。——

断じて破られるはずのない花防御陣ではないか。それが何ゆえ、いかにして破られることになったのか。……そう煩悶、苦悶するうちにも、跫音が——そう、まぎれもなしに跫音がヒタヒタと近づいてくるのだ。

恐ろしいのはその足どりがきわめて平静なことだ。花防御陣などなきがごとく、まるで無人の野を行くかのごときに。——

——何者か。

愕然として立ちあがった法悦の目に——

鶴のように痩せた老人の姿が映った。

長い白髪を唐人髷に結い上げ、これも白髭を長々と胸まで垂らしている。その白い長い眉になかば隠された目、漂白されたような顔は、まるで山水画に描かれた仙人のようでもある。それなのに、それとは裏腹に、なにか全身から妖しい虹のような精気を発しているように見えるのが不思議だ。——ながい柿色の道服を着て、支那沓をはき、手にとねりこの杖を持っていた。そんな老人がヒタヒタと近づいてくるのだ。

あまりにその足どりが自然で、平静なものに見えるので、

——はて、この老人は庭師でもあろうか。庭の見まわりでもしているのであろうか。

一瞬、法悦はそんな妙なことを考えたほどである。

が、その老人の歩行が、花防御陣の外輪たるべく敷きつめた紅葉の褥をいささかも乱していない、いや、それどころか触れてもいないことに気づいて、自分の顔から血の気が引くのを覚えた。

何と、老人の足はわずかにではあるが、宙に浮いているのである。歩行しているのではない。ふわふわと漂っているのだ。

「気がついたかや、伊賀者」

低く、しゃがれた、地の果てに野分きだつ風のように陰気な声だった。かすかに笑った

ようだ。――その灰色にわずかに残された歯が、苔むした墓石のように口腔の闇に浮かぶ。

「はてさて、哀れなるかな、伊賀五花撰の花防御陣、――いかに花をめぐらし、葉を敷きつめ、蔦を這わせようとも、ホッ、ホッ、ホッ、われら成尋五人衆を相手にすればかくのごとし。無用にして無用のものなり。見るべし、人外のわざを心得たわれらには、しょせんは児戯に類するものを――」

たしかに、わずか数センチであろうと、宙を浮遊する超人を相手にしたのでは、花防御陣など何の役にも立たない。いかに五花撰が鉄壁の守りを固めたとて、人外の化け物を相手にしたのでは無用の物でしかないだろう。

が、スルスルと後ずさりながら、法悦の表情に敗北の色はない。その目はランと光り、いささかも闘志の色を失ってはいない。

「成尋五人衆と申されるか。して、道士のご尊名は」

「涅哩底王……」

指で宙に字を書いた。陰々と笑う。また歯抜けの洞に木枯らしが鳴る。

「ねいりちおう――覚えておこう。いや、覚えておかねばなるまいて。卒都婆に戒名なりと書かねばならぬゆえに、な」

「ほう、嬉しやな、卒都婆をたててくれるとや。戒名をつけてくれるとや。それではわしもおのしの名をきかずばなるまいなあ」

「おれか、おれは――」

法悦の右手がすばやく印を切った。手刀のように宙にするどく突き上げられた。と同時に――

地を覆う大量の紅葉が火焔さながらに真っ赤に噴きあがったのだ。その舞いあがる紅葉の下から数条の蔦が投網のようにバアッとひろがりながら立ちのぼる。見るまに涅哩底王に襲いかかっていった。くるくると老人の体に巻きついた。

「蔦法悦、そしてこれはおれの忍法『蔦投網』」

その声を自分でも最後まで聞き終えたかどうか。

ふいに空気の色が鬱然とした暗灰色に変わり、真っ青に稲光がひらめいて――。

そのなかに、妖艶豊満なる美姫を抱き寄せ、怪奇なる容貌の牛魔神にまたがった、六頭六臂六足の巨大なる怪物が現れたのだ。不動明王であろうか。優に人間の倍はある。その怪物が咆吼を発しながら、全速力で疾駆してきたのだった。

どんと巨岩を打ちつけるように、その豪刀が法悦の頸骨を一刀のもとに断ち切った。のみならず、返す刀で背骨を両断し、臓腑を断ち割り、腹部まできれいに薙ぎあげた。頭を切り落とされ、胴を上下に切り離され、凄まじい血の噴水を撒き散らしながら、法悦の残骸は地にばらまかれた。怪物はまた咆吼を発しながら駆け去っていった。

時間にして、わずかに一秒、せいぜいが二秒ほどの出来事だった。紅葉であろうか、それとも血煙か、赤い煙幕が霧のように漂うなかに――

老人の陰々とした笑いが響いた。

「これは――忍法『魔獣召喚』」

「道士、妙なわざを使う」

水蓮秋月の声が聞こえた。かすかに笑いを含んでいた。

「が、おれの忍法『睡蓮掌』には通用せぬものと心得よ」

池だ。――その面を睡蓮にあおあおと覆われている。さわやかな香気が朝の光のなかにたちこめていた。

水蓮秋月はその睡蓮のうえにふわりと立っている。あたかも体重などというものはどこかに置き忘れたかのように。さながら宙に浮かぶかのように。――

のみならずそのうえを、ふわり、ふわり、と軽やかに移動する。それも睡蓮一葉そよとも揺らさずに。――じつに、あざやかなる体術だ。その域、ほとんど神技に達しているといっていい。

それに対する涅哩底王のほうはどうか。睡蓮のうえにふわりと――これは浮かぶようにではなく、事実として――その数センチうえに浮かんでいるのだ。まるで風に吹かれるようにに移動する。これも文字どおりの神技ではあるだろう。とうてい人間わざでできることではない。

しかしながら、睡蓮のうえを無音で移動することはできずにいる。それというのも――。

底王がそのうえを移動するごとに、その足下で、睡蓮が、ポン、と軽やかな音を発しながら、白い、可憐な花を咲かせるからだ。

むろん池に潜水し、睡蓮の下をくぐり抜けようとしても同じことにちがいない。その者はかならずや頭上に睡蓮の花が咲く音を聞くことになるだろうからだ。

じつにこれこそが花防御陣のうちの「睡蓮掌」なのだった。

世にこれほど風雅にして優美な防御陣があるだろうか。これではいかなる者もひそかに池を渡ることなどできようはずがない。

この睡蓮に覆われた池を渡ろうとする者は、あたかもお釈迦様の掌にある孫悟空のように、ついにどこにも行けぬままに終わってしまうことだろう。

が、涅哩底王はいっこうにそれに臆する様子は見せない。それどころか、そのとねりこの杖をしきりに睡蓮のうえにかざし、それら花々がポンと音をたてて咲くのをおもしろがっているかのようでさえある。

「いや、おもしろし、おもしろし――ホッホッ、おのし、若いのになかなかやるではない

か。いやさ、これほどまでに術を磨くからには、なまなかの修行ではできぬことであろうにな。それを思えばこのわしも感服せずにはいられぬて」

「そうか。感服してくれたとはありがたい。それでは――」

水蓮秋月は笑った。とはいっても若いオオカミが牙を見せるような獰猛そのものの笑いではあったが。

「感服ついでに、いま一つ、おれのわざを披露しようか。それで――せいぜいあの世でも感服してもらおうか」

「ホッ、ホッ、ホッ……そうか、そうか」

深い洞の墓石のあいだを死の木枯らしが吹き抜ける。睡蓮のうえに体が揺れる。

「あの世に送ってくれるとや。それは楽しみ、お楽しみ――」

「おうよ。送ってやるとも――」

水蓮秋月が懐から取り出したのは一葉の睡蓮であった。その手のなかで豊かに重たげに揺れている……。

「見よやい、老いぼれ。――これはおれの忍法『死花化粧』」

笑うなり――。

その睡蓮をピュッと投げた。葉一枚の軽さの睡蓮がまるで手裏剣のように一直線に底王の顔まで飛んだ。ピタリと張りついた。見るまに血を吸うように赤くなっていった。まさに「死花」のように。――

「どうだ、息ができるか。できまい。何があろうとその睡蓮は顔から剝がれぬ、剝がれぬぞ。真っ赤に血を吸う死に化粧。喉がふさがる。息もつまる……その皺だらけの顔に死に化粧をほどこしてもろうて死ぬをせめてもの身の果報と思え。さあ、早う、いそぎ死に候え」

秋月は自信満々に笑う。

事実、この「死花化粧」の術をほどこされた人間は、張りついた睡蓮を何としても剝がそうと、顔かきむしり、地に転がり、七転八倒の苦しみに身もだえるのをつねとする。そしてついには窒息、絶息し、苦悶のはてに無残な屍をさらすことになる……これまでただの一人としてこの術をかけられて生きながらえた者はいない。しかるに。――

「いやさ、わしが感服したというたは、このような子供だましの術を後生大事に磨いて、血を吐くような鍛錬のはて、やっとのことに修得したのかと思えば、そのあまりにムダな苦労に――」

いま笑うのは秋月ではなしに底王のほうなのだ。何があっても顔から剝がれないはずのその睡蓮が――見るまにクシャクシャになっていき、こともあろうにその口のなかに吸い込まれていく。顔が現れた。睡蓮を咀嚼しながら底王はなおも陰気に笑う。

「涙がこぼれる思いがするからじゃて。――ああ、気の毒に、と左様に感服したまでのこ

と。これではなかなかにあの世に送ってもらえまい。さすれば、やむをえぬ。当方がおのしをあの世に送って進ぜようほどに――よいかな」

「な、なにをバカな――」

さすがに水蓮秋月は混迷したようだ。その体が睡蓮のうえに大きく揺らいだ。

が、それでもその右手をふところに飛ばしたのは、とっさにマキビシを投げようとしたからにちがいない。――おのれの運命がいままさに尽きんとしているのを察したかどうか。あるいはまだ自分には勝算があると胸のうちにそれを数えたかどうか。

池の面がサッと晦冥のうちに翳ったかと思うと、睡蓮の花々が青白い燐光をおび、人魂のように点々と浮かびあがった。

機雷が爆発するかのように、にわかに水面が盛り上がり、その波の頂上で、それが左右に二つに分かれた。そのあわいから――。

らんと見ひらかれた真っ赤な目、二本の巨大なる角、長い巻きヒゲ、獰猛そうな牙、鉤のように折れ曲がった爪……。さらには鋼の胴体を黄金色の鱗に華麗にいろどられた怪物が――つまりは「竜神」が――轟っという水音とともに水面からのびあがった。

「わぁああーッ」

この剛毅な若い忍者がそれを見て悲鳴をあげた。竜神の頭部が秋月に突進した。秋月の体を引っさらいがてら、天に高々と舞いあがった。秋月の首は宙にて嚙みちぎられた。悲鳴すら発する余裕とてなかった。血が驟雨のように池に降りそそいだ。

竜神が消えたあと――。

池のうねる水面、その波間に、睡蓮の花花を白い血のように散らしながら、胴体だけの秋月の屍がゆらゆら揺れつづけた。――竜神が食べてしまったのだろうか。もうどこにも首はない……。

九

この世はなべて骰の目まかせ、
ゴザにころころ廻りきて、
さいの目二つ、
宇治の川瀬の水車、
誰を忍んで廻るやら、
さいの目三つ
淀の川瀬の水車、
誰を恨んで廻るやら

女だ。――それも妖艶無比、常人ばなれした美貌の女なのだ。美しさもここまできわまると、なにか妖怪じみてきて、それこそ怪物的とでもいいたくなる美しさだった。

箔絵の大帯、秋草摺りの小袖という姿はめずらしくないが、よく見るとその秋草のあわいに野ざらしの髑髏が点々と描写されている。その虚ろな眼窩から秋草が蓬々と生えているという異様さだ。あらためて見てみれば、首から下げたいらだか数珠にしても異常なまでに白すぎはしないか。もしかしたら、これは頭蓋骨のかけらではないだろうか。――帯に銀色の横笛をさしている。

そんな女が、細い、きれいな声で歌をくちずさみながら紅葉山を歩いている、その歌に浮かれるように紅葉が舞う。

骰を転がせ、転がして、
夢を見よ、見よ、
その果てに、
いずれは朽ちるこの身ゆえ。

ここは天下の江戸城内だというのに、しかも花防御陣が敷かれているというのに――それを知ってか知らずか、まるで無人の野をいくかのように、孤影を紅葉の乱舞に刻みながら、ひそひそと歩んでいる……。

その目は、あかあかと紅葉をうつし、まるで瞳に妖炎をたちのぼらせているかのようである。そして――その目路の先にあるのは、大御台所・江のいる観音堂なのだ。

すでに女郎花の防御陣に足を踏み入れている。紅葉林を背景に、黄色い可憐な女郎花があわあわと地を埋めている。そのなかに歩を進める女はさながら花の精――いや、花の魔女のようであった。

と、その足元でチャリンと音がした。何かが跳ね返った。見ると、数枚のビタ銭が女郎花のうえに転がっている。――女はべつに驚いた様子も見せずに、あたかもそれが当然のことででもあるかのように足をとめる。そして銭が投げられたほうに目を向けた。

そこにひとりの男が立っていた。

「いや、なかなかに聞かせる。いい声だ、いい歌だ――」

色衰逸馬だ。女のまえに立ちふさがった。仁王立ちで――といいたいところだが、この陰鬱な男に、そんな勇ましい言葉は似あわない。あいかわらずのボソボソした声でそういった。

「それで、この――」

女は足元の銭に視線を落とした。かすかに笑ったようだ。

「ご鳥目をいただけますのか」

「うむ、さしつかわそう。過分な鳥目と思われるかもしれぬが、なに、三途の川の渡し賃もこみでのことでな。要らざる遠慮だてはせずに取っておくことだ。あの世で、閻魔に、伊賀忍者は吝ん坊よの、と嗤われたのでは、先に逝った仲間たちが肩身の狭い思いをするゆえにな」

「そんな心配はご無用になさいませ。閻魔大王はこの世の常の者ではございません。かまえて亡者相手に、えこ贔屓などいたしますものか」

「ほう、それは嬉しいことを聞いた。そのように断じるからには、そなたはすでに地獄に行ったことがおありか」

「行かずとも、さ。――それぐらいのことはわかります。わたくしは閻魔大王とはいささか、かかずりあいの者でございますれば」

「閻魔大王とかかずりあいの者？」

「はい、縁戚の者と申しあげればよろしいでしょうか。もっとも、しごく遠い縁ではございまするが――」

「これは驚いた、閻魔大王とご縁戚の方と申されるか」

「はい、何かと昵懇にさせていただいております」

女は片頬ににっとえくぼを刻んだ。

「ふん、何をいうかと思えば」

さすがに逸馬は鼻じろんだようだ。

「閻魔と昵懇であれば、三途の川の渡し賃も不要であろう。さすれば、その鳥目も額に不満はあるまい」

「ご鳥目はいただきません。いえ、銭ではいただかぬ、という意味でございます。お心付けはほかの物でいただきとう存じます」

「ほかの物で？　ほう、何で？」

「あなた様のお命で」

「わしの命で」

「はい」

「それはやれぬなあ」

逸馬はふふと笑ったが、さすがにその笑いは悽愴の気を宿し、凶暴な響きをおびた。

「いや、女、命もやれぬし、ここから先に行かせもせぬ。行かせるわけにはいかぬ。行けば、その縁戚とやらの閻魔大王に会うことになる、とさよう心得よ。いや、行かずともすでに――」

「すでに何でございますか」

「おまえはもう死んだも同然の身ではあるのだが、な」

逸馬はすでに蔦法悦、水蓮秋月の二人が斃されたことは知っている。知っていながら、

いまだにそれが信じられぬ思いがする。悪夢にうなされる思いがする。

——あれほどの手練れの者を、こうもたやすく二人まで斃すとは、悪鬼羅刹のなすわざとしか思えぬ。そもそも人に可能なことなのであろうか。

さすがにそのことに、こころ粟立つ思いがし、血ぶるい、胴震いせずにはいられなかった。どのように恐ろしい敵が現れるか。——それを思い、念には念を入れ、女郎花の防御陣に万全を期した。

が、いざ現れてみると、それは思いもかけぬ極上の美女であった。そのことに拍子抜けせざるをえない。

美女ではあるし、手練れの女忍かもしれぬとも思う。しかし、いかに優れた女忍であろうと、やわか法悦、秋月ほどの男たちが、むざむざ、それに遅れを取ろうとも思えない。そう思う一方で——しかしこの美女が紅葉、睡蓮の二重の防御陣を突破し、ここまでやってきたのはまぎれもない事実なのだ。これをどう理解すればいいのか。判断に苦しんでいた。

「女、身を惜しめ」

と逸馬はいう。

「いかに縁戚、昵懇であろうと、その美貌、その若さで、閻魔大王に会うのはいささか早すぎるとは思わぬか」

「さあ、どうでしょうか。思わぬ、と申しあげたら、わたくしはいかがあいなりましょうや」

「それがわからぬか」

「思いまするに——あなた様に殺され、たちどころに縁戚の閻魔大王にあいまみえることになるのでございましょう」

「それがわかっていながら——そちの話はくどい」

「ほほ、それは女ですもの——話がくどくもなりましょう」

「わしもな」

逸馬の目が光った。

「すこし、焦れてきた」

「まあ、怖い」

「女郎花の陣がどのようなものか見せとうなったわい」

「はい、わたくしも見とうございます」

「女郎花は女花、粟花、黄色花……愛しい殿御を忍んでの想い切なや、思い花……」

逸馬は呪文を唱えるようにそういった。ただでさえ半眼、眠るように閉ざされていた瞼が、さらに重たげに垂れさがり、その糸のように細く切り込まれた一筋の目に、ボウ、とけぶるように暗い霧がかかった。

その呪文につれて、足元に咲き乱れる女郎花が、おびただしい朝露を滲のようにあとに曳きながら、黄色い雲のごとく舞いあがった。さらにまた、そのあとを懊悩して追うかのように白い男郎花が乱々と舞いあがり、もつれ、ひろがった。

「男郎花は男花、米花、真白花……愛しい女子を追いかけて、恋にこがれる、焦がれ花……」

花と花とが交叉する。女郎花は誘うように逃げ、逃げるように誘う。男郎花はそれを追うように嬲り、嬲るように追う……。いつしか黄色い花々と、白い花々とが、逸馬の体のまわりに、雲霞のように集い、寄せては返し、群れては散じ、彩々と乱れ舞う。

いつしか女郎花が女体に、男郎花が男体にと幻視される。そこに変幻変転の幻術が展開される。——燦々と光こぼれる虚空に、若い、おびただしい裸身の男女が妖として浮かびあがる。

狂ったように求めあい、まさぐりあい、抱きあい、まぐわりあう。その嬌声、あえぎ、すすり泣き、はては咆吼までもがなまなましく幻聴される。——そこにつむぎだされるのは狂おしいまでに官能的で、幻想的な、男女交歓の大マンダラなのだった。

若い男のたくましい胸板、その筋肉に鎧われた二の腕、太股、なにより凶暴に猛りはやる刃物のように鋭い男根……若い女の白桃のようにみずみずしい乳房、そのくびれた腰、優しくけぶる女陰……それらがもつれあい、からみあい、あい打ちあう。悩ましい肉音を

放ち、汗の飛沫を散らせ、愛液をしとどに露滴らせる……その凄まじい光景は見る者の脳髄をジーンと痺れさせずにはおかない。理性も、常識も、あえなく消滅させ、あさましい一匹の淫獣に変えずにはいられない。それほどまでに強烈な衝撃力、吸引力がある。

それでは、それを見る女はどうなったか。その雌しべのように濡れぬれと赤い唇はかすかに開いてあえいでいる……その美しい両の目は官能の霧雨にボウと優しくけぶっている……もはや完全に、甘やかで恐ろしい愛欲の虜になってしまったかのように見える。何人といえどもその蜜の檻からは逃れられないのではないか。

「見たか」

美しく悩ましい愛欲マンダラのなかに逸馬の笑い声が轟いた。

「もうおまえはここから逃れられぬ。愛欲地獄の亡者に成り果てるほかはない。あえぎ候え、のたうち候え、腰を振り候え。すぐにもおまえの精気は枯れはてようほどに。命も尽きようほどに。——わが女郎花は『よみかえし』と知れ。すなわちこれは——伊賀忍者・色衰逸馬の忍法『黄泉返し』なり」

逸馬の笑い声は、しかし、それより朗々と響きわたった女の笑い声にかき消されたのだった。女が笑いながら、なればここは紅葉山にあらず、黄泉路山なり、という。

「そして、わたしは『成尋五人衆』の夜叉至という。——これはわたしの忍法『宿命通』と知れ！」

何が起こったのかはわからない。おりから吹きすぎた強風に、それまで机上にあったジグソーパズルの完成画が、そのすべてのピースを吹き飛ばされてしまうのに似ていた。あれほどまでに幻妖華麗、壮麗無比のうちに展開されていた極彩色の愛欲マンダラが一瞬のうちにあとかたもなしに消え失せてしまったのだ。完全に消えた。そして——。

その瞬間、魂消るような悲鳴が長く尾を曳いて虚空に谺した。ありうることか、何に恐怖したのか、色衰逸馬ほどの忍法者がまるで子供のように泣きじゃくり、ふがいないまでの悲鳴をあげたのだ。その悲鳴がぷつりと切れた。

女郎花、男郎花が、力を失い、その色香さえをも失って、急に凋んで、ふらふらと舞い落ちる。その下に——色衰逸馬の屍があった。しかし……。

これをたんなる屍と呼んでいいものか。胎児のように四肢を曲げ、ぎりぎり極限まで内側に体を丸めている。すべて、この世のことどもを拒否せずにはいられない、とでもいうように。いや、その姿勢もそうだが、特筆すべきはその顔だ。

その顔が見るも無惨にねじ曲がっているのだ。まるで恐怖の極致にさらされたとでもいうかのように。——両目は茨隠元の豆がはじけたように飛びだし、頬の肉さえごっそり削げ落ち、唇は干し肉のように褐色にひからびてしまっている。なにより奇怪で、恐ろしいのは、その髪が真っ白になってしまっていることだ。逸馬が悲鳴をあげたのは、わずかに一秒ほど、二秒とは費やさなかったはずなのだ。それなのに——。

その瞬きする間に、いかにしてこれほどまで無惨に人が変貌するものか。その体からさえも水分がことごとく蒸発し、全身が子供のように縮んでしまっているではないか。

それを見ながら女は謎めいた微笑を刻んでいる。……怪物的なまでに美しい、艶たる、妖たるこの女は、たしか自分を夜叉至とか名乗ったはずだ。おのれの忍法を「宿命通」と呼んだはずだ。

夜叉至とはどのような女忍であるのか。はたまた「宿命通」とは如何なる忍法であるのか。——色衰逸馬ほどの忍者を一瞬のうちに絶息せしめたるほどの恐るべき魔女、超絶の魔術……いずれもこの世の則に属するべきものにあらずして。——

十

彼女の背後から、ホッ、ホッ、という笑い声が聞こえてきた。見れば、あの涅哩底王が、紅葉の大樹の枝に腰を下ろし、まるで子供のようにその両足を揺らしているのだ。

「恐ろしやな夜叉至、戦慄すべきかな『宿命通』。——夜叉至に敵対し、『宿命通』をかけられし者こそ、悼むべし、哀れむべし。その者、来世、来来世まで、永劫に呪われるべきさだめにありしば——」

そういってまたホッホッと笑う。——足をバタバタさせる。

「またそのように子供じみたことを。人聞きの悪いことを仰せたもうな、涅哩老。わたくしにはあなた様の『魔獣召喚』のほうが何層倍にも恐ろしいものに思われまする」

と、そのとき――。

西の空に濛々と真っ赤な煙幕がまきあがったのだ。伊賀花防御陣・最後の「曼珠沙華」の陣だろう。それが赤い砂嵐のように迫ってきた。紅葉山に死人の風が吹き寄せる。

曼珠沙華は別名を死人花とも幽霊花とも捨て子花ともいう。不吉な別名を持つのも道理――曼珠沙華は有毒植物なのである。その鱗茎にアルカロイド系の「リコリン」という有毒成分を持つ。不用意に接触すれば中枢神経がマヒし、痙攣、呼吸不全を起こすのだという。致死量は十グラム。――

が、伊賀五花撰はそれに交配を重ね、さらに毒性を高めるのに成功した。曼珠沙華の花粉を猛毒ガスたらしめるのに成功したのだ。――その猛毒ガスを空に噴射した。

おのれが最後の一人となりはてたのを知った諸行枯葉は、ついに成尋衆にはかなわぬと覚悟したのにちがいない。われ、他者ともに死滅させずにはおかない曼珠沙華の猛毒ガスを空に噴射した。もとより自分も死ぬ覚悟なのはいうまでもない。

しかし――。

「……」

それを見やる二人の成尋衆の表情は変わらない。氷のようにしんと冷ややかに冴えて、どこかに軽蔑の色さえ湛えている。

「哀れ、はかなや、伊賀最強の精鋭たる伊賀五花撰がのう――あのように子供だましの術がわれらに通用すると思うているのか」

夜叉至が吐き捨てるようにそういう。

「あれらと遊ぶのも飽いたわい。あまりに歯ごたえがなさすぎるでのう。つまらぬ、つまらぬ。暇つぶしにもならぬ――こうなれば早うに引導を渡してやるのが功徳というもの。のう、かわいい、きれいな、恐ろしい夜叉至よ、そうは思わぬか」

夜叉至は氷のように冷たく美しい視線を向けて、

「そのほうがよろしかろうと存じます。急ぎましょう。おっつけ成尋御坊、輪廻孫六、孔雀啄のお三方も参りましょうほどに。――われらの仕事はこれからが仕上げでございます。その一筆を入れ忘れたのでは、まさに画竜点睛を欠くことになりましょう」

「おう、そのこと、そのこと――」

涅哩底王は嬉しそうにクスクス笑う。そして、何としても、江の――と大御所夫人の名を呼び捨てにして、

「命を救わねばならぬ。忠長が江戸城に到着するまえにあれを死なせたのでは成尋御坊の大計略に遺漏をきたすというもの――そなたのいうとおり、まさに画竜点睛を欠くことになる」

江の命を助ける？　……それでは彼らは人助けのためにその妖姿を現したというのか。そうであれば何のためにこれほどまでに殺生を重ねなければならなかったのか。しかし――。

「というても。せいぜい一日二日、忠長が江戸城にたどり着くまで命をつないでくれればそれで十分――それ以上、生きてもらったのでは、かえってこちらが迷惑いたす。そのうえで江には忠長に遺言してもらわねばならぬ」

「何としても、家光をしりぞけ、忠長に徳川を継ぐように江にくどいてもらわねばなりませぬものなあ」

「おう、そうよ。らちもない甲賀と伊賀の忍法合戦のために、家光が三代将軍を継ぐことさだまったが、そんなものに何の道理があろうか。それをぜひとも覆し、まずは忠長、将軍になるべし、と遺言してもらわねばならぬ。――慶長十九年のあの忍法合戦を無効あらしめるために、あれがいかにバカげたことであったか、その結果などには何の意味もない、ということを周知せしめるために、このように甲賀、伊賀の精鋭を殲滅してみせたのじゃもの。忠長にはどうあっても将軍になってもらう」

「忠長を徳川の――いえ、この国の『神』あらしめる、という成尋御坊の絵図を描きあげるために――」

「さらにその先、この国をふたたび血の海、屍の泥濘のなかに沈め込んで、悲嘆と怨嗟の声でぐつぐつ火にかけた鍋のごときに沸騰せしめるために」

そして――。

ふたりは曼珠沙華の毒ガスが押し寄せるほうへ向かって妖々と歩き出したのだ。まるで恐れる様子もなしに。――

見るまに真っ赤な毒霧がふたりの姿を覆い隠した。すぐに聞こえてきたのは悲鳴――ではなしに笑い声なのだった。それもいかにも楽しくてたまらないとでもいいたげな笑い声が。――彼らには曼珠沙華の毒も通用しないのか。

そして赤い毒霧のなかに夜叉至の透明な歌声が聞こえてきた。あの数え歌だ。

この世はなべて骰の目まかせ、
ゴザにころころ廻りきて、
さいの目四つ、
飛騨（ひだ）の川瀬の水車、
誰を慕うて廻るやら
さいの目五つ
紀伊（きい）の川瀬の水車、
誰を殺して廻るやら

その歌声にあわせて涅哩底王の影がヒラヒラと舞う。何と、この場面に、彼らは歌い、かつ舞っているようなのだ。涅哩底王はおどけて、片手で道服の裾をつまみあげ、もう一方の手で杖を頭上に振りまわしている。くるくる踊っていた。

夜叉至の歌声、涅哩底王の笑い声に重なって、一声みじかく、断末魔の悲鳴が聞こえた。まるで百舌が鳴くように。——

時をおかず、曼珠沙華の毒霧は薄らぎ、朝の光のなかに消えていった。が、すでにそこに成尋衆の姿はない。ただ諸行枯葉の死体だけが残された。死体には首がなかった。——曼珠沙華の花びらが赤いしとねのように降り積もるなか、それよりさらに赤く、血が散っていた。

骰を転がせ、転がして、
夢を見よ、見よ、
その果てに、
いずれは朽ちるこの身ゆえ。

伊賀・甲賀連合忍者隊十人

一

すでに朝を迎えて久しいというのにここはまだ夜のままのようなのだ。観音堂のなかのことである。

それでも蔀戸の格子からわずかに陽が射し込んではいる。曼珠沙華の毒ガスが空にたちのぼったときには観音堂のなかも血の赤に染まりはした。まったく外界と隔絶されているというわけではないのだ。

が、それでもふしぎに観音堂のなかは陰々滅々と翳っていて、暗雲がたちこめるように視界が閉ざされている。その四隅には、さながら漆黒の魔物が座してでもいるように、闇が不穏にわだかまっているのだ。四隅に、燈火がともされているのだが、ただ心細げに揺らめくだけで、闇を払うまでにはいたっていない。——この暗さにはどこか不自然にいびつなところがある。はっきりと異常といっていい。

その異常な闇のなかにこもり堂がある。格子戸を隔て、観音堂の奥にある。観音本尊が

鎮座されているはずだが、闇に隠され、それを見ることはできない。わずかに格子ごしに燈火を見るのみである。

まるで夜光虫の群れが浮遊しているかのように、いつもそこには青白い燐光が瀰漫している。どこからか鬼火が射し込んでいるようにさえ感じる。

どこからか？　どこから？　たぶん冥府から。……そして、いま、その盾眼術をもってして、その冥府を一心に見すえているのは響なのだった。

こもり堂からは江がひたすらお経を唱えている声が低く聞こえている。滑婆が鉦をたたいている。

その読経の声、滑婆が打つ鉦の響き、それにたちこめるお香の煙……それらが、こもり堂に漂う青い微光に、まるで心拍を拍つように強弱のリズムを刻んでいるのだ。

徐々にではあるが、青い光が虚空の一点に集まりつつある。——その一点に精神を集中させる。ひたすら視る。

そこに光を集め、亀裂を生じさせ、さらにそれを押しひろげてやるようにする。亀裂の縁にいわば指をかけてやるのだ。亀裂が、細い通路になるまで、それを懸命に押しひろげてやる……。

どこへの通路を？　冥府への通路を。……そう、これはじつに黄泉路の入り口に他ならないのだった。

じつは響にも自分がほんとうに冥府への通路を開いているのだという実感はない。おのれの盾眼術がいかなる作用をもってして、冥府への通路を開くのか、もとより響にわかろうはずがないことだからだ。そもそも、それが現実に起こっていることなのかどうか、それとも虚妄にすぎないのか。それすら自信がない。——実際には、なにか、ぜんぜんべつのことが起こっているのではないだろうか。それをたんに冥府から死者の霊を呼び寄せているのだと勘違いしているにすぎないのではないか。

そうかもしれない。そうでないかもしれない。……響にはわからない。わかるはずのないことだ。

ただ、誰かの霊を呼ぶには、生前、その誰かと近しかった人の、強い祈願の念を必要とするらしい、ということだけはわかっている。そして、霊を呼び出すほどの強い祈願の念は、その人の気力、体力をおびただしく削いで、ほとんど廃人同然にしてしまうということも。——

だから、響は、江が「両御台様」を呼ぶのに懸念の意をあらわしたのだ。ただでさえ江は重い病の床にある。そこへもってきて、盾眼術の「霊呼び」で気力を削がれれば、おそらく命にもかかわるのではないか。——が、それを承知のうえで、江は「両御台様」の霊を呼び出すのを願ったのだ。そうであれば響にそれを拒むことなどできない。

蓮、涙、現の三人は本堂に残した。

響と、大御台所様、それに滑婆だけがこもり堂のなかに入った。それ以上の人数は不要だし、なにより何か異変が起こったとき、外部からそれを救出にきてくれる人間が必要だったからだ。冥府に引きずり込まれそうになる人間をこの世に引き戻すのにはよほど強靱な精神力の主でなければならない。それには三人の女忍はうってつけの人材だった。

青い光が一点に集中し、ますます輝度を強めている。その一点にジグザグに亀裂が入っている。徐々にひろがりつつある。いや、こもり堂に漂う微光がその亀裂に集中するというより、それにも増して、向こう側から射し込んでくる光のほうが多いようだ。

それをたんに光といい切ってしまうのは語弊があるかもしれない。たんなる光とするには、何かねっとりとした粘度があって、青い、透明な水母のように漂い流れるものを感じさせるからだ。もしかしたら、それに手をかざせば、「光」に触れることもできるかもしれない。光を感じることができるかもしれない。

青い光はこちらに流れ込んできて、ゼラチン質のようにプルプルと震え、いっそう青い光の輝度を増し——ついには、こもり堂そのものが深い海底に沈んでしまったかのように全体にボウと青く発光し始める、そして。……

「————」

ふいに響はハッと意識が鮮明になるのを感じた。それなのに、どこか頭のなかに血栓が詰まりでもしているかのように、一点、脳髄が痺れているようなのを感じてもいる。——

その、鮮明でありながら、同時に朦朧ともしているような奇妙な意識のなか。——醒めながら、夢をみてでもいるかのように……。

真っ青な光が濛々とけぶる、その妖光を、一点、いや、二点に、徐々に凝結させたかのように、ふたりの女性が並んでたたずんでいるのが、そこに浮かびあがってきたのだ。

ふたりとも豪奢なかいどりに身を包んでいる、その衣装にも増して、なにより彼女らにおのずからそなわったその気品と威厳が、見るからに尊い身分であるらしいと感じさせた。

——これが幽霊？

「両御台様」

江が、この、あとにも先にも、この国の歴史を通じて、ただひとり、大御台所様の称号で呼ばれた婦人が、雷に打たれでもしたかのように、その場に平伏している。その声に万感の思いをこめて、琴弦のように震わせながら、

「お呼びだていたしまして申し訳ございません。おふたりに、ぜひともご相談いたしたき儀がございます。おふたり以外にかようなことをご相談できる相手とてあろうはずもなく——」

「要らざる遠慮だてをいたしますな。さあ、どうぞ、何なりと、お話しあれ」

ひとりがそういう。穏やかな、しかしその底に強靱な意志をひめた声だ。

「はい、高台院様」
「そなたは子供のころより話の前置きが長かった。幾つになっても変わらぬものよのう。高台院様もあのように仰せじゃ。遠慮は要らぬ。早うに話しゃ」
もうひとりがそう笑う。孔雀のように華やかで、驕慢で、しかし強い声だ。
「はい、姉上様」
江は顔をあげる。その表情にはふたりの貴婦人にまさるとも劣らない、美しい威厳がみなぎっていた。
「それではお言葉に甘えてご相談させていただきます――」
「……」
滑姿の手から鉦が落ちて音をたてた。落としの局の異名を与えられ、数々の修羅場をふんできた彼女が、その場に突っ伏してしまっている。身動きはおろか、息さえできずに突っ伏してしまっているのは若い響も同じだ。ふたりともカチカチと歯を鳴らして震えていた。
幽霊の恐怖に襲われたからではない。恐怖よりもなによりも――この世を去ってなお、いや、さらにいっそう、偉大なる存在感を放って、いまに光芒を残す、そのふたりの威に圧倒されてしまったからに他ならない。
江が「高台院様」と呼ぶのは二年前にみまかった高台院おねのことであり、「姉上様」

と呼ぶのは大坂城の炎のなかに消えていった実姉の茶々のことにちがいない。
すなわち、これは故太閤秀吉の二人の正妻、両御台様であらせられるところの――北政所おね、それに淀殿に相違ないのだった。
ちなみに、淀殿を側室とする説もあるが、最近、彼女もまたおねと同様、正室であったとする説が出た。太閤秀吉に二人の正室があってもおかしくないからである。
「わたくしは両御台様におりいっての大切なご相談がある」
江が響たちを振り返り、その表情に静かな決意をみなぎらせていった。
「ご苦労であった。――ふたりとも下がりゃ」

二

それまで部戸の格子から本堂に射し込んでいた青白い妖光がスッと潮が引くように遠のいていった。と同時に、これまで目にも見えず、肌にも感じなかった、しかし確実にこの場にいる全員に重くのしかかっていた、無形の圧迫感のようなものもフッと消滅したようだった。
「あ、消えた――」
と、これは現の声だ。

虚空に穿たれた亀裂がふさがり、この世とあの世をつなぐ通路が絶たれた、という実感があった。

もっとも響にしてみれば、自分の盾眼術にほんとうに霊を呼び寄せる力などあるのか、いまだに半信半疑ではあるのだが。

霊――それもよりによって北政所おねと、淀君の両御台様の御霊をなど……。

実際には、大御台所様・江がこもり堂にいたのは時間にして五分たらずのことであったろう。その短い時間に、江のいう「大切な相談事」をするのが可能なのか、という疑問は残されるが、霊の時間感覚と、人の時間感覚とはおのずから異なるであろうし、なにより江のゲッソリと消耗した顔を見れば、彼女はたしかに霊と共に濃密な時間を過ごしたのだ、ということに疑義をさし挟む余地などない。

「これへ、近う」

と江は五人の女忍にいう。その表情はそうして座しているのさえふしぎに感じられるほどにやつれきっていた。

「大御台所様、どうか、これにお凭れあそばせて――蓮、涙、何をしておる。大御台所様のオン体をお支えせぬか」

「よい、おとし、かまうな――これより、そなたたちに申しわたしたき儀がある。いや、この江より、そなたたちに、たっての願いがあるのじゃ。是非とも聞き入れてもらいたい。わたくしの余命はもはやいくばくもない。いまとなれば、この江が、五十余年の生涯を費やしたのち、頼みとするに足る者どもは、そなたたちを措いて、ほかにはおらぬ。そなたたち伊賀の女忍以外には誰も、のう――思えば、皮肉なことではある」

「われらのごとき、取るにたらぬ者どもに、そのように過分のお言葉をいただき――もったいのうございます。大御台所様」

と滑婆がいう。それはもういつもの剛毅な滑婆の声だ。

「何なりとお申しつけくださいませ」

「われら、女たちが、その血と涙をもってして、この徳川の礎を築いた。男たちが何と申そうと、それはまぎれもなしに事実なのじゃ。しかるに、男たちはその恩義を忘れ、われら女たちを再びおのれの膝下に踏みしだき、僭越なり、男だけの天下を築きあげようとしている」

これは事実だ。――戦国時代の、麻のごとく乱れ、群雄割拠した世を、まがりなりにも統一に導いた力のうち、最大の推力たるべきは、じつは「後家力」ともいうべき女たちの力であった。

関白の正妻・北政所が、大名なみの一万石の知行を与えられたのは、必ずしも秀吉の妻だったからばかりではない。秀吉はそんな甘い男ではないし、なにより他に所領を分け与えるべき諸大名、臣下の目がある以上、いかに妻だからといって、それに見合うだけの実

績のない者に一万石を与えられるわけがない。要するに、当時、おねの豊臣家への貢献の大きさは誰しもが認めるところだったのだ。そして、じつは北政所おねの真価がより発揮されるのは後家になってから後のことといっていい。

それは秀吉の次妻であった淀殿にしても同じことで、この二人の後家は、秀吉没後、ともに連携し、豊臣家の支配を維持するように最大の努力を払った。すなわち、彼女らは「両御台様」として、淀殿は大坂城にて秀頼の後見に当たり、北政所は京都にて朝廷との応接、豊臣社の運営に当たった。さながら豊臣家という車を動かす両輪のように。

このふたりの協力関係はきわめて密なものであったらしい。後世、この二人を対立関係にあったもののように見なし、淀殿を愚かな悪女のように一方的に誹謗する見方が強まったのは、当時の「後家力」が軽視されるにいたった結果にほかならない。すなわち悪しき「男性中心史観」のなせるわざである。

事実、方広寺の鐘銘事件が悪化したとき、高台院おねは大坂まで行こうとして伏見で思いとどまっている。秀頼の力になろうとしたからであろうが、淀殿との関係が悪ければ、そもそもそんなことを思いたつはずがない。

この国における「後家力」には北条政子以来の伝統があり、家をたばねる要としての象徴性を担わされるのと同時に、実質的に最高権力者としての力も付与されてもいた。その「後家力」は、大坂冬の陣にいたって、「女たちの力」として最大限に期待される

ところとなった。——両家の講和交渉に当たったのは、淀殿の実妹であり、家康の側室であった。そのかげで、どれだけの女たち——後家たち——の知恵と配慮が働いたか、はかりしれないものがある。

彼女たちはさまざまな戦国の試練と悲劇を越えながらその叡智と優しさと忍耐力を積みあげてきたのである。その外交能力の高さには比類なきものがあった。

しかし徳川の男たちはそれら女たちの叡智と努力を裏切った。北政所おねの平和への希求と奮闘は踏みにじられ、両家の女たちの外交努力に重きをおいた淀殿の信頼は無残にうち捨てられた。このときの徳川には義もなければ信もなかった。あまつさえ淀殿は、後世、そのことで愚かな女として嘲笑され、家康の老獪さのみが認められることとなった。

大坂夏の陣において、豊臣家が完全に滅ぼされると、徳川体制は手のひらを返したように、女たちから家督権を奪い取り、政治と軍事のすべてを男性が独占するようになった。女性は完全に幕藩体制の支配システムから排除されることとなったのである。——恩知らずにも、恥知らずにも、といおうか。

「そのことは我慢もしよう。黙ってもいよう。ときと場合に応じ、我慢をし、沈黙するは女の優れた処世の術でもあろうからの。されど、わたくしにもひとりの娘として、妻として、母として、女として——いかにしても我慢できず、黙っておられぬことがある」

江の語調がきびしさを増した。舌鋒するどく男たちを弾劾した。

「それは――何を思いあがったか。徳川の男どもがみずから『神』になろうとしていることじゃ」
「『神』に、でございますか」
「そうじゃ」
「何の『神』に？」
さしもの滑婆がそんな妙な言葉づかいになったのは、むろん話そのものが妙な方向に向かっているからに他ならない。徳川の男どもがみずから神になろうとしている――というのはどういう意味なのか。
「先代大御所様は、ご崩じになられたあと東照大権現になられた――すなわちオン『神』に祀りたてまつられた。そのことはそなたも承知しておろう」
「はい、ですが、それは――恐れながら、お話のご趣旨がいささか違うのではないのでしょうか」
「話の趣旨が違う、とな？　何が？」
「いえ……」
滑婆は言葉につまった。彼女にも江の言葉のどこがどう違うと具体的に指摘することはできない。知識がないというより、端的に権力者の神号などにさしたる興味がない、というのが滑婆の――そして、たぶん多くの庶民の――偽らざる本音であろう。

たしかに家康は死後、東照大権現に祀りあげられた。が、それをいうなら、秀吉は死後、豊国大明神に祀りあげられた。――その結果、どうなったか。秀吉が生涯をかけて築きあげた王国ははかなく浮き世の塵となりはてた。思えば、豊国大明神の神号もはかない。
そうであれば権力者が死後に神号を授かったからといって、それを必ずしも「神」になったと考える必要はないのではないか。滑婆はそれをたんに権力者の戒名のようなものだと理解しているのだが。――
「そなたのいわんとするところもわからぬではない。徳川家は天下の経綸を『天道』より預かったにすぎぬ。『まことに天下は天下の天下』であるがゆえに、と。……わが、お舅様、神君・家康公は常々そのように仰せだったという。すなわち忠信や義は、徳川家のためにあらず、『天道』のためにあるのだと。天下が治まるか否かは、ひとえに将軍のまつりごとの正否にかかっている。ひとたび将軍が天下を経綸するを踏みあやまれば、なんじょうもって『天道』それを許すべし、たちどころにそれを徳川家から取り上げるであろうと……されど、あえていう。いや、いわせてもらおう。それは、はたして家康公のご本心からのお言葉であろうか。恐れながら権現様のきれいごとではあるまいか――」
「き、きれいごと……お、大御台所様。それはあまりに――」
「言葉が過ぎるとお言いやるか」

「いえ、あの、その……はい、しかるべく――」
「ほほ、そちはまれに見る正直者であることよな。女忍がそれほど正直では処世にこまりはせぬか」
「はい、いえ、あの――」
滑婆はその美しいひたいに汗をかいている。背後では少女たちが顔を伏せて必死に笑いを噛み殺している。
「たまに困じはてることもございます」
「聞け、滑婆、伊賀の女たち――」
実際には、江はそれほど大声を張りあげたわけではない。が、その声は、滑婆たちの頭上に雷鳴のごときに轟いたかに感じられた。あたかも彼女こそがはたいた神と化したかのように。――瞬時のうちに五人の女忍はあらたまった。
「かの春日局は、『東照大権現祝詞』において、このように申したという。いわく、ご当代将軍・家光公がご始祖・家康公の名跡を無事に継いで、天下を思うがままに治めしことが叶うたのは、一にも二にも権現様のお恵み、ご恩があったればこそのことである、と。――ご始祖・家康公は崩御なされたのち、大守護の大権現となられて、家光公を昼となく夜となくお守りしているのだという。はっ、言いもいったり、吹きも吹いたり、さすがに天下の大乳母たりと称されるだけのことはある。すなわち家光公が天下を無事にお治めあられるは、『天道』から天下を委譲されたゆえではなしに、権現様より委譲あらしめられたゆえなのだという理であろう。すでに徳川のオン血筋の尊さは帝のご血統をも優に上まわるとのことらしい。これが神をも恐れぬ増長、慢心でなくて何だというのか」
「……」
「口にするのもはばかられることながら、徳川は三代にわたって、天下を経綸するをもってして、ついに驕慢、その極致に達し、初心を忘れはてるまでの高慢地獄にあい堕ちたのであろう。――思え、徳川家のもとに天下が巡りきたるまでに、どれほどの良民たちが無惨にあい果てることになったことか、どれほどの無辜の女たちが悲嘆の淵に沈むことになったことか。どれほど大勢の後家、尼僧たちが身の危険もかえりみず、戦地を往還し、持てる外交術のかぎりをつくし、平和浄土の実現のために奔走したことか。いやさ、そのために両御台様がどれほどのご苦労をなされたことか、まさに血涙を絞らんばかりの悲嘆の極みの果て、見事に気高く、高台院おね様、姉上様のおふたりはその生をまっとうされたではないか。それを思えば、徳川の慢心、唾棄すべし、許すべからず」
ここで、江のいったことは、二十一世紀になってからの江戸時代研究のある傾向にも一致するところである。
――幕府権力は世俗的な意味においては強大無比であったが、それでもついに宗教的権威において天皇を越えることはなかった。……

というのが、これまでの江戸時代研究の主説であったが、最近になって、そうではない、徳川将軍こそが唯一の〈王〉であった、とする徳川王権説がにわかに脚光を浴びるようになった。

従来の説に反旗をひるがえし、徳川はその権力を正当化するためであれ、必ずしも天皇の権威づけなど必要とはしなかった、というのである。

それへの反・反論に、そうはいっても二代将軍・秀忠は、徳川家を盤石あらしめるために、元和六年（一六二〇）、五女の和子を後水尾天皇の妃として御所に嫁がせたではないか、という主張がある。

が、のちに、これもまた「徳川王権説」の有力な傍証とされるにいたる。

それというのも、あれほどまでに無理に無理を重ね、横車に横車を押して、徳川の血を天皇家に入れたにもかかわらず、その後、徳川家はバッタリ天皇家との婚儀に興味を示さなくなった、という事実があるからである。

いざ和子を入内させたものの、そもそも将軍の権力を正当化あらしめるために、そんなことをする必要はなかった、ということに気がついた、ということのようなのだ。

いや、それどころか——。

ここで大御台所・江はじつに恐ろしい秘事を口にしたのだった。

「後水尾院様、ご譲位のち、これまで、和子中宮が授かりし御子以外は、ほかの御局衆どなたも、お子を授からなかったよし。——それも道理、徳川家の血筋以外は、いっさい他の血をお認めあらず、いかように他の局にお子を授かろうとも、これをことごとくおし殺し、あるいはオン流させ候えたとか。——無惨に赤子を殺し、流し候えて、なにが天道、なにが天下の仕置きであるものか！　いかにせよ、われら女たちが苦難の果て、血の涙を流し、営々と築きあげてきたるが、無惨に赤子を殺し、流し去る、そのような幕府であってよいものか。如何にしても、屍山血河、無惨に死脈、血の涙をつないできた戦国の女たちの——おお、そうじゃ、最後の生き残りとして——断じて、そのような無慈悲な幕府を受け入れるわけにはいかぬ」

「お、大御台所様——受け入れるわけにはいかぬとて、大御台所様は、大御台所様は——」

現大御所・秀忠公のご正室様ではあらせられませぬか。……滑婆はそのことをこそいうべきだったかもしれない。が、それを最後までいい切ることはできなかった。

そうであっても、いや、それだからこそなおさらの——その言葉だということが（じつに魂を震わすように）よく理解されたからであった。

江は徳川家の大御台所であるべきいまの自分より、戦国の世を生き抜いてきた一人の女としての自分を選ぶとそう断言しているのだ。

そこまでの覚悟をさだめた大御台所に、滑婆ごときに何をいうべき言葉があろうか。

秀忠の五女――といえば、表向きは、江の子供でもあるわけなのだか、家光同様、和子も江の実子でない可能性が強いという。

また、徳川幕府が強権をもってして、後水尾院のお子らを抹殺したということについては、それを暗にほのめかす書状が残ってもいる。――まずは事実と見なしていいだろう。恐ろしいことではある。

しかし、江はもっと恐ろしいことを口にした。さすがに唇を震わせながら、しかし決然とした口調でこういい切ったのだ。

「赤子を次々に殺し、流し去る、いまの徳川に何の正義があろうや。両御台様にお運びを願い、そのご意志をしかとお確かめした、お二人ははっきり申された。徳川、滅ぶべし！と――」

三

――徳川、滅ぶべし。

滑婆はもちろん、ほかの少女たちも一塊の雪風に吹きつけられたように、あっ、とひれ伏したまま、その顔を上げられずにいる。突っ伏したままで、寂として声をあげることができずにいた。

江はそんな女忍たちを見てフッと微笑を洩らし、

「そのように恐れずともよい。いかにわたくしとて、徳川に公然と弓を引こう、などと本気で考えているわけではない。いまの徳川に謀反いたすは、いや、その是非を問い、可否を論じるのすら、累卵のごときに危ういことであり、愚の骨頂ともいうべきことであるのは、誰よりもよくわたくしが承知していることである」

「それを、おわかりであれば、なにゆえもって大御台所様は――」

「待ちゃ。いましばし、わたくしの話を聞きゃ」

「はっ」

「いまさら徳川を滅ぼして天下を乱世に戻すは、その可否を考えるのさえ愚かしい、烏滸(おこ)の沙汰である。また当代将軍・家光公に将軍職を退いていただくのも、到底かなわぬことであろう。事実として、徳川家に対し、常人にでき得ること、やり得べきことは、ほとんど何もないといっていい。無念なことではあるが――」

「……」

「それでも何かしたい、せねばならぬ、と思いつめたあげくの、いわば苦肉の策が、さきほどの、両御台様にご相談申しあげることであった。されば、おふたりが申されるには――いまの徳川を滅ぼすのはもはや絶対の不可能事にて、でき得ることとして、次善の策を選ぶしかない。――徳川将軍が『神』と祀りあげられるのを阻止するに如くはなし、と

いうことであった。それをもってして徳川の慢心の鼻を折るべし、と……。せめてものことに、のう」

「将軍様が『神』とおなりあそばされるを阻止する……？」

「いかにも。いまでさえ胎児を平然と闇に葬り、恬淡として、恥じ入りもせぬ徳川じゃもの。これが代々・将軍が『神』となりせば、どれほどの傲慢、驕慢が生じ、はびこることになるか――思うだにおぞましい。悪政をもって民に当たり、豺狼のごときにこれを貪る仕儀にあいなるは、まさに掌を指すがごとく明々白々であろう。されば、何としてもそれだけは阻止せねばならぬ」

「恐れながら、お尋ねしたき儀がございます。こうして口にするさえ、あまりに恐れ多きことゆえ、舌の腐りはてたる思いがいたしまするが――」

滑婆は唇を震わせながらいう。

「ご当代様、家光公はご実子にあらず、されど駿河・忠長公は大御台所様のご実子であらせられる、とそのようにうかがいました。されば――『神』におなりあそばすが、家光公にあらず、忠長公であらせられるとしたら、いかがなさいますか。それでも大御台所様にあらせられましては、これをオン阻止なさるおつもりでしょうか」

一瞬、間を置き、しかり、そのつもりじゃ、と江は冷たくいい放ち、

「あれも徳川の男である」

そういい切った。――その鋼の響きに並々ならぬ覚悟のほどがうかがえた。

「これでいいか、お登志、得心いたしたか」

「はい、ありがとうございます。得心いたしてございます」

「されど口惜しや、わが命、まさに風前の灯にて、もはや床から体を起こすこともままならぬ境涯になり果てた。この敗残の身、いかんともしがたく――」

江の語調が先細りに衰えた。その体がグラッと前のめりに倒れそうになる。あわてて女たちが手をさしのべようとするのを、泳ぐように両手で振り払い、かまうな、と声を振り絞るようにいって、

「のう、お登志、この江与、ふかく頼みいる、歴代将軍が、いや、まずはご当代様が『神』となられるのを何としても阻止してはくれぬか。とめてくりゃれ。そちたち以外に、これほどの秘事、大事を託すべき者はほかにおらぬ。そちたちのみがわたくしの最期の頼みの綱であるじゃによって」

「さればとて、大御台所様――」

滑婆が身を揉みしだくようにいう。

「わたくしどもには、オン当代様が『神』になられるということが、いかなることであるのか、その見当さえつきませぬ。皆目わからぬことでございます。わからぬことをとめようなど、いかにしてもできぬ相談ではございませんか。――いかにして、それを阻止せし

めることなどできましょうや」
と、そのとき——
ふいに響が、ガバリと顔を起こすと、ああ、と悲痛な声をあげて、
「伊賀五花撰が滅んだ」
とそう叫んだのだった。
「あの者たちが——成尋五人衆が、やってくる」

四

——伊賀五花撰が滅んだ……あの者たちが——成尋五人衆が、やってくる……。
響はそう叫んだが、その内容を自分でそうと理解して叫んだわけではない。
そもそも「成尋五人衆」なる名称にしてからが、まるで聞き覚えのないもので、どこからか頭に湧いてきたものとしか思えない。
過去、自分の盾眼術と、甲賀八郎の矛眼術とが交叉し、ないまぜになり、それがいつまでも消えもせず、どこかに一塊の雲のように残留しているらしい。
いつもはそれを意識していないが、おりふし、なにかの拍子に、それに自動的に接触してしまうらしい。

あのときに見た、慈尊院村のあわあわとした満開の桜の光景が、その茫漠と「雲」を連想させるそれに重なって、自然に「桜花」の名がついた。
すなわち「桜花空間」である。
その「桜花空間」に接触し、それに呼応するようにして、何とはなしに成尋五人衆の名称も知れたし、その動向も知れたのだろう。
瞬時のうちに、すべてのことが意識のなかに飛び込んできて、それをほとんど反射的に叫んだにすぎない。一種の反射神経のようなもの、といってもいいかもしれない。
いつもであれば、その「桜花空間」を介して、いまはどこにいるのかも知れぬ八郎と触れあったような喜びをひそかに覚えるのであるが、このときばかりはそんな気にはなれなかった。
——伊賀五花撰が滅んだ。
自分でそう叫んでおきながら、そのときは内容をよく理解できないままでいたその言葉が、一拍遅れて、意味をともない、激しい悲しみをともなって、怒濤のように襲いかかってきたのだった。
とっさに、あの者たち、とは叫んだが、実際に彼らが何者であるのか心得たわけではない。「桜花空間」を隔てて、それこそ濃霧のなかを透かし見るように、ぼんやり彼らの姿をかいま見るのみだった。——その影法師は五人を数えた。

ただ、そのうちの三人、いや、ふたりが大井川にて甲賀五宝連を四人までも仕留めたのはすでにわかっている。斃されたなかに甲賀八郎がいなかったことも――。

江戸から大井川までは五十余里の距離を隔てている。それだけの距離があるというのに、いかにして彼らは瞬時のうちに、江戸城の紅葉山にまでやってこれたのか。じつに、あり得べからざることではないか。

もちろん、このときの響に、あの者たちのなかに、輪廻孫六、なる術者がいるなどという知識があろうはずはない。その超絶の忍法「金剛楼閣」が、この世に金剛摩尼宝頂楼閣なる虚空間を生じせしめる、などということは夢にも知らずにいる。ましてや……。

いったん、その金剛摩尼宝頂楼閣に入り込めば、時間を遡ることも可能であるし、どんなに遠方であろうとたちどころに到達することができる、などということも理解の外にある。――それこそ想像を絶したことなのだからして。

驚くべきことに、彼ら、成尋五人衆なる謎の者たちが、大井川で甲賀五宝連を斃してから、いままた伊賀五花撰のうち四人を斃すまで、わずか数時間を要したのみなのである。その超絶なること、まか不思議なることは、ほとんど魔法の域に入っているといっていいだろう。

いま――。

響はたまらないほどの悲しみと後悔の念にみまわれている。甲賀五宝連のうち四人までをも斃した相手なのだ。あれほど用心して戦って、といったのに、伊賀五花撰ともあろうあの者たちが、なぜにもうすこし慎重に敵に挑まなかったのか、という思いが強い。

万が一――それでもかなわずに、危機に瀕するようなことになれば、そのときにはすぐに自分に連絡して欲しい、とあれほど念を押したのに。――なぜに……。

このときにはまだ響は、すでに諸行枯葉が滑婆に連絡したのだった、ということを知らずにいる。響の身を案じ、響には何も知らせるな、と枯葉がそのように滑婆に頼んだことも、また――。

「……」

蓮がすばやく窓に身を寄せて外の様子をうかがった。小袖のふところからサッと取り出したのは――。

「おう、それは……」

と江が驚きの、しかし弱々しい声をあげるのに、滑婆はにこりと笑ってみせて、

「はい、これがその者の、蓮の、蓮根銃でございます」

蓮の蓮根銃……。

銃身の長い、肉厚な銃口の、短筒だ。いや、それは短筒ではない。馬上用の火縄銃でもない。驚くべきことに――。

それは蓮根のような、回転弾倉が装着された、回転式拳銃なのだった。それも六連発

——。輪胴式拳銃のメカニズムそのものはすでに十六世紀にはあったというが、何といってもここは極東の日本国なのだ。そんなものが存在すること自体がありえない。ありえないことではあるが……。

現に、蓮は輪胴式拳銃をその手に持っている。さすがに一発撃つたびごとに撃鉄を起こさなければならない、シングル・アクションのようだ。——であれば、彼女が左手に赤い革バンドを巻いているわけも理解できようというものだ。引き金を絞りっぱなしで、撃鉄を連続して起こす、いわゆるファニングをするためには、手のひらを保護する革当てが必要だろうからだ。

もちろん、これは、あの天才エンジニアの根来転寝の発明によるものに相違ない。自走する釣り台を発明したほどの転寝であれば、六連発の輪胴式拳銃を発明するぐらい何でもないことなのかもしれない。

さすがに伊賀の女忍たちだ。敵が近づいたのを知っても、それに臆することなく、機敏に行動している。

「敵は五人だけじゃない。大勢だ」

と、そういったのは涙だ。蔀に耳を寄せている。——左目の眼帯に指をかけている。いざというときにはそれを外すつもりでいるらしい。でも、何のために？

「あれ、何でかな、五人の先頭にたっているのは——どうも黒鍬衆らしいよ」

とこれは現だ。——低く身を伏せ、床に耳を当て、外の様子をうかがっている。彼女もまた首のスカーフに指をかけていた。

「五人……七人……十人……」

涙はしきりに口のなかで寄せ手の人数を数えている。蓮は無言のまま、すでに拳銃の撃鉄を起こし、それに左手の革を当てていた。

「十二人……十三人……十五人……」

現もまた観音堂を囲む人数を数えていたが、数えきれないや、とつぶやいた。

「どうする？　お姉ちゃん、わたし、眼帯、外そうか。外したほうがよければそうするけど……」

涙がそういう。

滑婆のことを「お姉ちゃん」と呼ぶのは、子供時代、慈尊院村で一緒に過ごしたころに回帰しているからだろう。あのころは誰もが滑婆を、お姉ちゃん、と呼び、根来転寝をお兄ちゃんと呼んだものだ。それにしても、涙が眼帯を外したらどうだ、というのか。

「まだ早い。それに——」

滑婆は首を傾げて、

「これだけの人数だ。しかも相手は黒鍬衆とはいいながら、忍者であることには違いはないんだからね。たぶん、あんたが眼帯を取ったぐらいじゃ追いつかない」

「ということは、わたしがこれを取っても同じということか」
と現がスカーフの端に指をかけながらそういう。そして、ヤベえ、ヤベえ、とその清純可憐な顔だちに似あわない行儀の悪い言い方をして、
「凄え殺気だよ。黒鍬衆、本気でわたしらを襲うつもりらしい。でも、何でー、わけわかんないし。黒鍬衆って、城内の作事、それに警護がお役目じゃなかったっけ。それが、敵のお先棒をかついで、わたしらを襲うって、話が逆なんじゃない？」
将軍の直轄軍、いわゆる「旗本八万騎」が後年のような形にさだまるのは、秀忠の死後のことである。
このころにもすでに大番、書院番、小姓組番などの徳川軍団はあり、書院番は本丸に四組、西の丸に六組、小姓組についても本丸に六組、西の丸に六組を数えた。
本丸の将軍家光と、西の丸の大御所秀忠が、それぞれに旗下とする軍団を擁していたわけなのだが、作事（工事）、造園、清掃などを仕事とする黒鍬衆は、いずれにも属してはいなかったらしい。要するに、別組織ということか。
黒鍬衆に、伊賀の出自が多かったというのが、どこまで事実かわからないが、あまり重用されなかった、ということは間違いないようだ。
にわかには信じがたい話であるが、そういう背景があるなら、組ごとそっくり組織を乗っ取られる、という可能性も皆無とはいえないかもしれない。——

そのときには江は滑婆にしっかり背負われていた。江はすでになけなしの体力を使いはたしたらしく、グッタリ体を滑婆の背中に預けている。その顔を上げることなく、弱々しい声でこういった。
「天海大僧正は天台宗のオン僧であらせられる。祈雨、安産、病気平癒、それに変成男子などの加持祈禱に長けていらっしゃる」
変成男子、というのは、女児を男児に変える祈禱であり、懐妊中の女性を対象にして唱えられることが多かったらしい。徳川家としては女児より男児の誕生のほうが好ましかったからだろう。
「とりわけ、ご当代様は天海僧正の加持祈禱には絶大なる信頼を寄せておいでらしい。ただ、天台僧であらせられる天海僧正には、吉日調べ、方位調べ、などの易占の心得はおありでない。それゆえ加持祈禱は天海僧正に頼み入り、易占は臨済のオン僧であらせられるところの崇伝僧正に頼み入ることが多かった。しかるに、このところ、しばしば天海僧正に易占までも依頼するようになった。はて、解せぬこと、とは思うておったが、近頃、さながら影が本身に随するように、べつの僧が天海僧正に随身するようになったと耳にした」
「……」
「その僧は恐ろしいまでに易占をよくするとのことじゃ。それゆえ、いつしか天海僧正と

ともに本丸奥深くへの出入りを許されるまでになったという。もとより、滅多な者を本丸に出入りさせるは、心得よろしからず、とは思うたものの、わたくしはもはや本丸の者にあらずして、西の丸の者であるじゃによって。要らざるさし出ぐちはひかえておったのじゃが……。聞けば、その僧侶はいつしか城内の黒鍬衆をいいように手なずけ、おのれの手足のごときに動かすまでになったとのこと。あたかも魔物に魅入られしかのように……おお、そうじゃ、たしか、その僧なる者の名は――」

「何でございますか」

「成尋……」

五

そこで力つきたのか江は滑婆の肩に顔を伏せた。どうやら昏睡にいたったらしい。

ここで江がいったことは、すべてほんとうだ。――

とりわけ金地院崇伝が没したあとは天海が加持祈禱はもちろん、吉日、方位調べなどの易占まですべてを一手に託されるようになったらしい。易占を依頼する書状、易占の結果に感謝する礼状などが残されている。

しかし考えてみればこれはおかしい。天海は密教系の天台僧であり、易占の心得はないはずなのだから、これは理屈にあわないことであるはずなのだ。――が、その天海に随身し、天海にかわって易占をよくする僧侶がいたのだとしたら、話はべつになる。

そういえば――これはここにいる女たちの誰も知らないことではあるのだが――たしか成尋は、家光が疱瘡を患ったとき天海の平癒祈禱に大奥まで随身した、と忠長にそういったのではなかったか。

それにしても、江戸城の警備、作事に当たるべき黒鍬衆をいつのまにか手なずけ、おのが思いのままに動かすようになった、という話がほんとうであれば、成尋なる僧、たしかにこの世の常ならざる人物のようである。

一種の魔物、怪物、というべきかもしれない。わからないのは――この魔物、怪物が何を目的として動いているのか、というそのことだが……。

「お休みなされませ、大御台所様」

そう滑婆は優しく肩越しに江に囁きかけ、その顔を響に向けると、聞いたかい、と一変して厳しい声で響にいった。

「うん、成尋五人衆……」

さすがに響の顔が青い。

「たぶん、奴らの棟梁がその成尋という僧侶なのだろうと思う」

「その成尋なる怪僧が城内の黒鍬衆まで手足のように動かしている、ということは――つ

まり、わたしたちは孤立無援ということになる。西の丸に戻るか、本丸に行けば、お旗本衆がおいでになられる、大御台所様のオン身あやうし、となれば、おっとり刀で助けに来てもくれるだろうけど……さて、難問は、いかにして西の丸まで行き着くか、紅葉山を突破するか、ということだ」

「敵は成尋五人衆とやら」とこれは現――。

「それに黒鍬衆――」と、涙――。

「まさに絵に描いたような多勢に無勢」

滑姿が片頬にニッとえくぼを刻んだ。美しい、かわいい、しかし凄絶きわまりない笑いだった。

「どうする、お姉ちゃん――」と、これは現だ。

「どうもこうもないさ。何があっても大御台所様を西の丸まで落とし参らせるだけのことだ」

「お姉ちゃん……」

異口同音に少女たちはつぶやいた。その目がじっと滑姿に注がれる。

「かまわないよ、妹たち、逃げたければ逃げてもいい。隠れたければ隠れてもいい」

「誰が」

少女たちの表情に決意がみなぎった。その顔がパッと明るくなった。一斉に動いた。戦

闘態勢に入った。蓮の蓮根銃の輪胴がカチリと鳴った。

「わたしが先に出る――お姉ちゃんたちはわたしのあとからついてきて」

真っ先に立ったのは響だった。両手をひろげるようにして少女たちのまえに立ちふさがる。

「わたしには瞳術がある。盾眼術があるんだからね」

「バーカ。ガキがカッコつけんじゃねーよ。わたしたちだって伊賀の女忍だ。あんな奴らにみすみすやられるもんか」

と、これはあいかわらず、そのお姫様のような清純可憐な風貌からは想像もつかない口の悪さの現だった。いまもそのスカーフに指をかけている。

「それはそうだけど……それはそうなんだけど……あいつらは、あいつらは……」

響は胸のまえで両手を揉みしだいた。それはそうだけど……なにしろ奴らは、甲賀五宝連の精鋭四人、それに伊賀五花撰の精鋭四人を、信じられないほどの短時間のうちに殲滅せしめた化け物たちなのだ。いかに滑姿たちが腕と術に覚えがあるからといって、とうてい太刀打ちできるような相手ではない。

「成尋五人衆――それが何よ」

涙が、野獣が牙を剝くように、白い歯をひらめかせたが、彼女の場合、それさえ色っぽい。

「わたしたちだって伊賀の女忍五人だ」
「ご安心なされませ。わたくしはおとしの局でございます。何があっても、大御台所様を西の丸まで落とし参らせます。あやつら、不浄のやからに指一本触れさせるものではございません」
滑婆はまた背中の江にそう囁きかけると、その唇に凄絶華麗な笑いをきざんだままで、少女たちにいう。
「涙、現、ふたりが先頭だ。眼帯をお取り、首の布をお取り、そのあとにわたしが大御台所様をお連れする。そのあとに響……」
「お姉ちゃん、わたし――」
響が抗議しようとするのを、
「そのあとに、響」
うむをいわさず滑婆はそう決めつけて、
「蓮、あんたがしんがりだ。頼むよ」
という。
蓮はにこりと笑う。蓮根銃をスッと胸のまえにかまえた。
「いいかい、それじゃ打って出るよ――妹たち、はぐれんじゃないよ」
「おお」

お花畑が風に波うつように少女たちが一斉にうなずいた。
「出る」
が――。
「いや、それはお勧めしない。やめたほうがいいな」
そのとき、そう声が聞こえてきたのだ。どこか笑いを含んで、おどけたような、緊迫感に欠けた声だった。
その、耳にしただけで脱力しそうな声に、全身に気迫をみなぎらせ、高揚感、それに一種の悲愴感までもたぎらせていた少女たちは誰もが心のなかでたたらを踏んでいた。気勢を削がれたというべきか。
さすがに滑婆はほかの誰より立ち直るのが早かった。苦笑まじりの声でいう。
「どこにいる？　出といで、根来転寝――」
「あいよ」
と声がしたのはあの自走する釣り台のなかからだった。
少女たちの視線が注がれるなか、釣り台の正面にはめ込まれた板が何枚かカタカタ鳴って外側に外れて落ちた。
そのなかから異様なものが滑るように出てきた。
現代人ならそれを見てまっさきにリュージュを思い浮かべるのではないか。橇に仰向け

に寝て、足を先にし、氷上を滑って、スピードを競う競技だ。その橇に形が似ている。細い鋼から出来た、骨組みだけの、しかし、これは氷上を滑る橇ではなしに、両側に二輪ずつ計四輪の車がついた乗り物なのだった。どうやら両足で漕ぐようになっているらしい。足部にペダルのようなものがある。——そのうえに仰向けに寝ているのが根来転寝なのだ。

まだ滑婆と同じ二十代なかばのはずだが、痩せに痩せて、手足がヒョロリと枯れ枝のように細くて、とてもその年齢のようには見えない。かといって老けて見えるというわけではない。その目が英知と、好奇心をたたえて、ふしぎなまでにキラキラと輝いているからだ。

ひたいに深いしわを刻んでいる。しかし目だけは若々しい。——要するに、年齢不詳としかいいようのない、ふしぎな風貌の若者なのだ。

いつも、その橇とも、車ともつかない奇妙な乗り物に仰向けになって移動する。もちろん、根来転寝自身の発明によるものだ。足で全力で漕げば——もっとも、ただでさえ怠け者の転寝のことだから、そんなことは滅多にしないが——かなりの速さが出るらしい。車輪に独特の工夫がほどこされている、ということで、かなりの荒れ地、泥濘でも不自由なく移動することができると聞いた。

歳を重ねるにつれ、全身の筋肉が萎縮する奇病を患っていて、それでやむをえず、そんな車に乗っている……と人にそう説明し、まわりの人間も何とはなしにそれで納得させられているのだが、じつはそれは嘘なのだ、と滑婆は当人から聞いたことがある。

あまりに怠け者すぎて、起き上がるのさえ面倒で、それでそんな車に乗っているのだ、と説明された。自分は度を越したものぐさなのだ、と。——そのとき、ものぐさ、は悪癖、短所のように思えるかもしれないが、そのヘキがあればこそ、いろんな工夫、発明に頭がまわるのだ、とも聞かされ、なるほど、それはそうかもしれない、と妙に納得させられたのを覚えている。

が、あとから考えれば、あれはからかわれたのかもしれない、とも思う。そんな話をまともに信じるほうがおかしい、という気もする。とにかく、じつに何というか、とらえどころのない若者なのだった。

奇人、変人、怪人、ときには魔人さえもが群れをなす甲賀衆にあっても、とびきりの変わりダネといっていい。使い道にも、扱いにも困り、放っておかれている、というところがほんとうのところだろう。それをいいことに、甲羅式部、碁石才蔵、蜩七弦、といった、やはり変わりダネの仲間たちと気ままに時を過ごしているらしい。

あの者らは甲賀の面汚しだ、と吐き捨てる長老もいると聞いたが、そもそもそんなことを気にするような連中ではない。

その根来転寝が、こともあろうに、この緊迫した時と場に現れた。

現れて、何かの役に立つとも思えないが——とにかく現れた。

六

そして——。

「全員で、一気に打って出ようという策、勇ましいし、悲愴でもあって、それがおまえたちであるだけに、なおさらに美しくもあるが、ただそれだけだ。あっというまに玉砕して、何の意味もない。そうさ、おれはあまりお勧めしないよ」

そういうのだ。

「根来転寝——」

少女たちのあいだを笑い声が波うった。現や涙にいたっては、おたがいに肩を叩きあって涙をこぼさんばかりに笑っている。それまでのピンと張りつめた彼女たちの緊張がにわかに緩んだ。

この根来転寝には、ぜんぜん頼りにならぬが、何かあったときには、必ず味方にはなってくれる——その意味では信頼できる——親戚のおじさんのようなところがある。それも周囲からいささか軽んじられている、居候のおじさんのようなところが。——

あの五花撰の男たちは、たしかに伊賀きっての精鋭ではある——いや、あった——が、

それだけに一点、気を許せないようなところがあった。

かたくるしいし、怖いし、窮屈だ。……要するに、取っつきが悪い。術者としては尊敬できても、異性としては、あまり近づきたくない相手ではある。

それも当然だろう。彼女たち五人の女忍は、いちばん年長の滑婆にしてからが、二十代なかばの若さなのだ。蓮が十七歳、現、涙が十五、六歳……響にいたってはまだ十二歳になったばかりである。

それがあの、伊賀、甲賀の凄絶な忍法合戦の残影を、いまだに体の底に悲愁とともに揺曳させているような「前世」の忍者たちに親しみなど持てようわけがない。——おじさん臭いし。

それでも響だけは、伊賀五花撰とか、甲賀五宝連に対して、ある種、独特の思い入れのようなものはある。滅びていくものに対する、かぎりない哀惜、惜別の念、とでもいえばいいだろうか。——誰が見ても、盤石の礎を固めつつあるいまの徳川体制にとって、忍者などというものは無用な存在になりつつあるのは明白だからだ。

伊賀響自身が、甲賀八郎と並んで、過去の甲賀・伊賀の忍法合戦の申し子のようなところがあるから、その種の感慨を抱くのかもしれない。——とりわけ、伊賀五花撰に関しては、彼女自身がそのひとりに数えられていることもあるし、ほかの女忍たちと異なる印象を持ったとしても不思議はない。それはそうなのだが……それでもやはり根来転寝に対す

るほどの親しみは持てずにいた。
なにより根来転寝は、おじさん臭いが、おじさんではない。滑婆と同年輩の二十代なかばの若さなのだ。——少女たちにしてみれば、九度山の慈尊院村で一緒に育ったということもあり、会えば懐かしさを感じずにはいられない。ちょっと、ほっぺたを突いて、からかってやりたいような、おかしみさえ感じさせる。
ただ、滑婆だけは、ほかの少女たちのように、懐かしさのみを感じてばかりはいられない。大人だけあって、もう少し複雑な感情がある。
滑婆の、根来転寝に対する感情は、一言でいえば、
——しょうがない奴。
というところに尽きるだろう。
滑婆の見るところ、たしかに根来転寝は、これまでの忍者とは多少、毛色が変わっているかもしれないが、それでも上にしかるべき人さえ戴(いただ)けば、その才能は大いに生かされることになるはずである。それだけの力は十分にある。
その異能、異才ぶりは、他のどの忍者にも増して、甲賀に益するところ大だと確信している。それが、甲賀の幹部たちが無能だからなのか、それとも転寝自身にやる気がないからなのか——伊賀の女忍である滑婆にはそれを知るよすがとてなかったが——何年たってもくすぶったままで、まるで芽の出る様子がない。しかも当人すらそのことをいっこうに

気にしている様子がない。
それが滑婆には口惜(くや)しくもあれば、歯がゆくもある。人ごとながら、男ならもうすこし奮起すべきではないか、と思う。もっとも——あんなことといって、お姉ちゃんにとって根来転寝のことは人ごとなんかじゃないんじゃない、と現や、涙にからかわれて、蹴飛ばしてやったことはあるが。——あのときの妙にウキウキした気分はいまも忘れられない。
が、もちろん、いまは事情が事情であり、場合が場合でもある。
——大御台所様を早くお床にお戻ししなければオン体にさわる。いや、お命にさえかかわる。
その焦燥感が強い。江はすでに滑婆の背中で昏睡している。その息が乱れて、いかにも苦しげだ。——根来転寝が現れたからといって、浮かれてばかりはいられない。
「どうしたのよ、転寝、あんたが何でこんなとこにいるわけ」
どういうわけか、いつも決まって、根来転寝に対するときには、こんなふうに怒った口調になってしまう。
「いや、この『阿修羅(あしゅら)』のなかを——」
「阿修羅？」
「これさ。この車のことだよ」
「ああ」

と滑婆はうなずいて、
「何で、阿修羅っていうの」
「何でかな？　ただ、何となく、だ」
「ただ、何となく、ね」
いつものことだが、根来転寝と話していると、徐々に脱力してくる。相手は仰向けに寝そべっているわけだから、どうしても話がいわば盛り下がってしまうわけなのだ。調子が狂ってしまう。
「あれこれいじっているうちに、眠くなってしまって、ついなかに入り込んで、うかうか寝込んでしまった」
「これまで？」
「うん、これまで」
「この騒ぎのなか？」
「うん、この騒ぎのなか――」
「……」
「おれはよく寝る。それだけは自信がある。だからこその根来転寝じゃないか」
変なところで威張っている。さすがに滑婆は苦笑した。
「それじゃ何のために現れたわけ？　何の助けにもならないじゃないか」

「そうバカにしたものでもないぜ。おれにちょっとした考えがある」
そう偉そうにいってみせて、おい、響よ、と声を放って、
「おまえ、いま、八郎に触れることはできないか」
と尋ねた。
「触れるって？」
響は問い返して、ああ、そうか、とうなずいた。
「『桜花』を間に挟んで、ということね」
「『桜花』、おまえはそれをそう呼んでいるのか。――どうだ？　その『桜花』とやらを介して、八郎に接触することはできるか」
「いま？」
「ああ、いまだ」
「『桜花』に触れる……それで八郎に触れる……？」
「そうだ。できるか」
響には響の「桜花」があり、八郎には八郎のそれがある。それぞれ盾眼術、矛眼術という、一見、似てはいるが、しかしある意味、真反対の瞳術から派生しているために、そのスペックは多少、異なるようだ。ただ重なりあって、共有される部分があるだけだ。
響のそれは、滑婆たち、それから五花撰にも共有されていて、だからこそ五花撰が斃さ

れたのを知ることもできた。

遠く離れた大井川で、甲賀五宝連が斃れたのを、響が知ることができたのは、微弱ながら、八郎との「回路」がいまも保たれているからにちがいない。

転寝がそのことに言及したのは、八郎の「桜花」は五宝連ばかりではなしに、転寝たちにも共有されているからだろう。

「できないことはないけど……」

響はためらった。

「桜花」を介して、いつも八郎のことは身近に感じている。ヒリヒリと切ないまでに……それはほとんど癒えない傷に似ている。新たに八郎との接触を試みるのは、その傷口を掻きむしるのに似ている。また血が噴き出してくることだろう。

この時代、いまのような意味で、「愛」という言葉は使われていないが、しかし二人はたしかに愛しあっている。愛しあっていればこそ、二人がその愛をまっとうし、ちぎることは許されない。それはその愛を冒瀆する行為になるからだ。

そうであれば、できれば八郎とのこれ以上の接触は避けたい。みずから望んで苦しみを増してどうする、という思いが強いからだ。

が、それを説明したからといって、その機微を根来転寝が理解してくれようとも思えない。そもそも十二歳の少女が、このまま八郎とともに在れば、いずれはちぎりを交わすことになり、それは二人の愛を汚すことになる——などという大胆なことを口にできようはずがない。

「いや、まあ、響の乙女心もわからぬではないが……」

根来転寝はぜんぜん実感をともなわない声でそういい、しかし、とそれをことさら押し返すように声に力を込めると、

「そこをおしてぜひとも頼みたい。八郎のあの矛眼術から生じたと思われるもの——おまえが『桜花』と呼んでいるもの——を、八郎は『有情』と呼んでいた。八郎の『有情』は、五宝連に共有されていたが、と同時にわれわれにも——というのは、おれ、甲羅式部、蜩七弦、碁石才蔵の四人のことだが——共有されている。五宝連が滅んだいま、もう、おれたちしか『有情』を分かちあう甲賀者はいない」

「有情」というのは仏教用語だ。ここでは「意識」というぐらいの意味あいに使われているようだ。厳密にいえば、「有情」は意識とはちがうのだが、この時代には「意識」に該当する言葉がないのだから、やむをえないだろう。

「おまえはあの連中のことを成尋五人衆とかいったが……おれの見るところ、その、成尋五人衆なる連中にも、どうもおまえの『桜花』とか、八郎の『有情』に似た術があるらしい。そうとでも考えなければ——いや、そう考えたとて不思議なことにはちがいないが——いかにして、大井川からこの江戸までの五十余里をこうまで瞬時に飛びきたることが

できたのか説明のつけようがない」

むろん、このとき根来転寝が偶然にしろ言い当てたのは輪廻孫六の「金剛楼閣」の術のことだろう。

この世に金剛摩尼宝頂楼閣なる異次元の「虚空間」を現出せしめる術。——

たしかに、それは響の盾眼術に、八郎の矛眼術に……いや、ふたりの術が合して、混交され、そこに茫漠と浮かびあがる「桜花＝有情」に多少似ているところはある。

が、それはあくまでも多少であって、そもそも「桜花＝有情」が何であるのか、どんな機能を有するのか、当事者のふたりにもはっきりとわからないのだから、ほかの何物かと比較のしようがないのだ。

そもそも「桜花」や「有情」が完全に形成されるまえに、響は八郎との関係がこれ以上深まるのを恐れ、その愛の行き着くところを本能的に恐れ、いわば途中で引き返してしまっている。

「桜花」はいまだ形成途上にあるといっていい。完成にはいたっていないのだから、なおさら「金剛楼閣」とは比較しようがないだろう。それに——。

敵に「桜花」に似た術があるのではないか、と喝破したのはさすがだが、根来転寝もそれがどれほど凄絶にして、超絶の術であるかを見抜くまでにはいたっていない。

成尋に、孔雀啄、そして金剛楼閣を創出せしめた輪廻孫六の三人は、その「金剛摩尼宝

頂楼閣」に踏み込んで——いにしえに伝わる「夢の架け橋」よろしく——何十里もの距離を一瞬に踏み越えてきた。妙なことをいうようだが現代の東海道新幹線よりも速い。そして江戸城・紅葉山で、涅哩底王、夜叉至と合流したわけなのだが。……さすがにこれを想像しうるは人間の能力の限界を超えているだろう。根来転寝の想像力もそこまでは届いていない。

「転寝、いまはそんな悠長なことをしてるときじゃないよ。このままだと大御台所様の容態が取り返しのつかないことになる」

さすがに滑婆があせって、声を尖らせるのに、

「かといって——ただやみくもに飛び出したからといって、それでどうなるものでもあるまい。せいぜいがところ玉砕するのが関の山だろう。それでも、それで大御台所様を無事に西の丸までお送りできればいいが、さて、おれの見るところ、それもいささか危なっかしい。それより、まずは、きゃつらがどのような敵なのかを探ってから、動いたほうがいいんじゃないか。迂遠なように見えて、結局はそれが一番の早道なんじゃないかね」

根来転寝は諭すようにそういって、あらためて響の顔を見ると、

「どうだい、やってくれるかね」

「わたしに、八郎に触れろとそういうのね」

「そうさ。うまくいったら、でんでん太鼓と、笙の笛を買ってやろ」

「バカにしないで。わたしはもう子供じゃない」
「バカにしてるつもりはない」
根来転寝はこの男にはめずらしく真顔でいった。
「ほんとだぜ、伊賀響ほどの忍者をバカにするような者は、おまえたちの伊賀にもいなければ、おれたちの甲賀にもいない」
「それだったら——わたしにも瞳術があるよ。わたしの盾眼術だけじゃ不足なの」
「さあ、不足かどうか——それはおれにもわからんよ。敵がどれほどの力を持っているのかもわからないのだから。……いや、甲賀五宝連、伊賀五花撰ほどの者たちを鎧袖一触、あっというまに殲滅せしめたのだから、それはもう恐ろしい敵だ、というぐらいの見当はつくが——それにしても、だ。相手がどれほどの力を持っているのか予想もつかない」
根来転寝は人さし指でボリボリと頬を掻きながら、
「響の盾眼術は文字どおりの盾だ。相手が何か仕掛けてこぬかぎり、その力を発揮しえない。しかし、いまのこの状況は、悠長に相手の出方を待ってなどいられない。なにしろ大御台所様のことがあるからなあ。ここは一つ、どうあっても、こちらから仕掛けてみたい——それにはどうしても八郎の矛が必要なんだよ。八郎の矛眼術がな」
「……」

響は、まず滑姿の顔を見た。滑姿は、おやり、というようにうなずいて見せた。たしかに根来転寝のいうとおり、やみくもに敵中突破をはかったところで、無事に江を西の丸に送ることができるかどうか覚つかない、と思ったのだろう。つづいて蓮、涙、現と、順々に視線を転じていく。誰もがコックリとうなずいた。みんな響の姉さんたちだ。——よし、決まった。……
響は根来転寝に視線を戻して、
「わかった」
と、うなずいた。
「やるよ」

七

その、やるよ、といった自分の声の余韻がまだ耳のなかに残っているうちのことだ。そこに一瞬の間が挟まれた、との自覚すら覚えなかった。事実、間があったとしても、それはマイクロセカンドほどの、脳がそうと把握しえないほどのものであったにちがいない。彼女の感覚にあってはほとんど同時のことといっていい。
ほとんど同時に——。

それが起こったのだ。

たとえていえば、一瞬の稲妻が、暗々たる雲海を浮かびあがらせるのを見るのに似ているかもしれない。その青く、するどい閃光に、視覚ばかりか、自分自身までもがあっというまに拉致されて——気がついたときにはすでにそこにいたのだった。

そこ——甲賀八郎の「有情」のうえに——すなわち「意識」の表面に……飛翔したとも覚えずに飛翔し、着地したとも覚えずに着地したのだった。はるばると。

すでに響の実体は消失していた。そこには響の「意識」だけがあった。

あわあわと絢爛たる全開の桜をひろげる「桜花」として。——

響の「意識」が瞬時のうちに、八郎の「意識」に到達しえたのは、つねに響の想いが八郎のもとにあったからにちがいない。もしかしたら、八郎のほうもそうなのか。八郎の想いもいつも響に寄り添っていたのだろうか。しかし——。

そうだとしてこれはまた何という寄り添い方であることか！

八郎の「有情」の表面はとてつもなく広大な氷の丸天井に似ていた。恐ろしいばかりに硬く氷結し、視界を湾曲するように覆ってはいる。が——。

それはむしろ丸天井というより、氷の隔壁といったほうがいいかもしれない。その半透明な隔壁を透かして、その下で氷結し、深く沈み込んでいる八郎の「心」をボンヤリ見ることができる。

もちろん、響にフロイト心理学の知識などあろうはずはないが、もしすこしでも囓っていたら、八郎の「心」をこんなふうに表現したのではないだろうか。すなわち、八郎の心は、青く煌めく「下意識」から、憂愁のうちに沈み込む群青の「深層心理」まで、何重もの氷層を形成しながら、漆黒の「無意識」までなだれ落ちているのだ、と。……

かろうじてそれを透かし見ることはできる。しかし、触れることはできない。それどころか近づくこともできない。近づくにはあまりにそこが寒すぎるからだ。ブリザードのように氷点下の風が吹きつけていた。

それというのも——。

その氷の隔壁には、「有情」から「桜花」を截然と遠ざけておきたい、という八郎の強固な意志が凍結されているからなのだ。八郎もまた——響がそうであるように——自分から彼女を遠ざけようとしているのだった。それこそ死にもの狂いで。

いや、響と八郎とは違う。響は八郎ほど強くはない。

たしかに響は自分では必死に八郎を遠ざけているつもりでいた。その愛を懸命に忘れようとしていたつもりだった。——しかし、現実にはそうではなかったのだ。そうでないことは、響の「桜花」と、八郎の「有情」とのせめぎあいを見れば一目瞭然なのだった。

響の「桜花」から燦々とおびただしい花びらが八郎の「有情」のうえに舞い落ちているのだ。花よ届けとばかりに。——それは抑えようとして抑えきれぬ慕情のあらわれだ。届

けてはならぬと自分をいましめながら、それでも届けずにはいられない必死の想いだ。その、哀切なまでに美しく、陶酔せずにいられないばかりに官能的な桜の乱舞は、しかし……。

八郎の「有情」に触れるまえに凍ってしまうのだ。燦々と煌めくその輝きはそのままに、すべてが氷の結晶と化し、「有情」の氷の隔壁に触れるなり、もろくも砕け散ってしまう。きらきらと飛び散る氷片は、その上空に舞う花びらの色に映え、まるで血しぶきのように見えた。慟哭の血しぶきに。

八郎はみずからの「心」を氷に閉ざしてしまうほどに強い。強くはあるが、いや、それだけになおさら——八郎もまた苦しんでいるのではないか。おのれの恋情を氷のなかに冷えびえと閉ざし、響の想いを氷の隔壁で遠ざけ、その淋しさ、切なさを、ひとり昂然と頭をもたげて、耐えしのぼうとしているのではないだろうか。

しかし——。

八郎に触れる、ということは、響の瞳術をもってして、八郎を見る、ということでもある。響の盾眼術が発動されるということだ。そして、八郎の瞳術もまた、それに反応せざるをえない、ということだ。

が、敵からの、あらゆる悪意、害意を無効たらしめる響の盾眼術は、それゆえに、どこまでも受け身たるべき術にならざるをえない。それがどうして八郎には、自分への攻撃と認識されるだろう？　それがわからない。八郎の矛眼術は、自分に対する敵意を、そのまま相手に返す術なのだから、理屈からいえば、あくまでも受け身であるべき響の盾眼術に反応するはずはないのだが。——

ともあれ、響は八郎を視た。そして、八郎の矛眼術は発動された。が、たしかに、それを励起したのは響の盾眼術であったのだが、八郎の矛眼術は響に向けられたのではなかった。

——やった！

どこからか根来転寝の叫声が聞こえてきた。転寝の思惑どおり、響が八郎に触れたことで、八郎の矛眼術が成尋五人衆に向かって発動されたのだった。それが敵の存在をあぶり出した。

あぶり出しはしたが——それはあまりに思いがけない形象で、響の「桜花」、八郎の「有情」のなかに現れたのだ。

「有情」の上空、「桜花」のさらにその上空に……。

圧倒的な量感と質感をともなって、とてつもなく広大な空間、膨大な時間の集積がひろがったのだ。

それも一気に。——

もちろん、響にそんな知識があろうはずはないが、まるで巨大な空飛ぶ母艦がいきなり

頭上に出現したかのようだ。全天を占領されたかのような凄まじい圧迫感に押しひしがれた。

ゴ、ゴ、ゴ……という轟音が天地をどよもして鳴り響いた。天地が晦冥した。

それは――。

まるで雷雲のように暗々として重く垂れ込めているのに、金剛石にも似て、銀色のあざやかな輝線が全体をくまなくあやなしているのだ。閃光が走り、分岐し、おびただしく結ばれ、ほどけるなかに。――

何体もの人影が浮かんでは没し、没しては浮かぶ。これは何だ？　静謐なる座像、魁偉な金剛力士のような巨体、たおやかにして妖艶な女体……。

いや、それらは人影ではない。それらは……

――羯磨マンダラの彫像だ。

と、また根来転寝の声が響いた。

羯磨マンダラとは立体マンダラのことだ。

真言密教の教義を視覚的に理解あらしめるために、マンダラを立体的に構築したものをいう。――とはいっても、煩雑、精密なマンダラをすべて立体化するのは不可能なことだから、密教寺院のなか、正面に第二法悦如来を安置し、その左右に中台八葉院の四仏四菩

薩像だけ安置することが多い。

が、いま、そこに再現されているのは、簡素化された立体マンダラではなしに、仏教パンティオンともいうべき、めくるめく立体マンダラの大パノラマのようなのだ。さまざまな御仏、菩薩、不動像などがあまねく立像されているのを見てとることができる。いや、そればかりではない。そこには――。

これはめまぐるしく走る閃光、輝線のなかに、一瞬、明滅されるのみで、はっきりとした姿形を見さだめることは難しいのだが、たしかにそこに何人かの武将の姿を見てとることができた。生身の人間を模した彫像のようなのだ。そのうちの一体、あれは……。

――東照大権現！

根来転寝の狂おしい声が天界にこだまする。どういうわけか、ほとんど有頂天のようになっている。

――そうか、やはり成尋五人衆の狙いは徳川将軍を「神」に祀ることにあるのか。しかし、きゃつらは何のためにそんなことをする必要があるのか。そも、きゃつらの狙いはいずこにあるのか。

と、どこかから――。

「これは輪廻孫六の『金剛楼閣』の術なり――」

という声が聞こえてきたのだ。ホッ、ホッ、というしゃがれた笑い声が頭上を陰々と流

れきて、流れ去ると……。
「そして、これは――」
と、雷鳴がとどろき、凄まじい閃光が奔るなか、頭上の立体マンダラのなかに、黒々とした巨人の裸身像が浮かびあがったのだった。
その血走った目が真っ赤に燃えあがる。獰猛な牙から滴り落ちる涎が驟雨のように地上に降り注いだ。両手を頭上に振りかざしている。金剛杵を持っていた。ということは、その怪物巨人はヒンドゥー神話の帝釈天であろうか。その力瘤がまるで山塊のようだ。スカイダイバーのように天を占めて墜ちてきた。
笑い声、そして――。
「わしの『魔獣召喚』の術であるわい」
という声！

八

その怪物巨人がさらに体を反らして金剛杵を大きく振りかざした。
金剛杵から稲光がつづけざまに放たれて、轟音が地を満たした。
稲妻はつづけざまに「有情」の氷の隔壁に落ちた。青い閃光が氷壁に映えて、パッ、パッ、と黄色い光点を浮かびあがらせ――その光点が見るまに線となって結ばれて、ジグザグにひびを走らせた。
――あ、危ない。
八郎の「有情」の氷隔壁が破られる！　とっさにそう思った。何者かが八郎の心のなかに侵入しようとしている。おそらく、そうすることで八郎を意のままに操ろうとしている！
その心の悲鳴が何かの引き金を引いたようだ。響は自分のなかから力がほとばしり出るのを感じた。いや、それがはたして自分の力なのか、それとも自分を介して八郎の力がほとばしったのか、それは何とも判断しようのないことだった。
なおも落下しつづける怪物巨人の醜怪たるその裸身に、稲光を発しつづけるその金剛杵に――。
桜の花びらが大量に、どっと渦を巻きながら――あたかも錐の尖端を揉み込むように――襲いかかっていったのだ。
怪物巨人の体はあっというまにビッシリ桜の花びらに覆われて原型をとどめないまでになった。なお降下の姿勢にありつつ、そのまま虹のように桜の花びらを後方に曳きながら、失速し、フッと消えた。
「おう、これはやりよる、やりよる――」

その陰々滅々と老いた、苦笑混じりの笑い声に覆いかぶさるように、今度はうって変わって若々しい笑い声が天に響きわたった。

「今度は、おれに遊ばせてくれい、『時逆鉾』だ」

その笑い声の余韻がまだ消えもやらぬうちに――。

「有情」の氷壁一面に、ビシビシと凄まじい音を発しながら、見るまに蜘蛛の巣のようにひびが走ったのだった。その多さはこれまでの比ではない。

いや、そればかりか、「桜花」のなかに絢爛と咲き誇り、憂愁を散らせ、哀切を漂わせながら、それまでしんしんと風に舞っていたはずのその大量の花びらが、あろうことか、ふいに逆転し、宙から枝に舞い戻っていったのだ。現代人ならフイルムを逆回転させたかのように、というかもしれない。

どっ、と烈風がたたきつけるように、なにか目に見えない抗力のようなものが押し寄せてきて、いやおうなしにそれに巻き込まれ、どこか後ろに――いや、過去に――体が押し戻されそうになるのを感じた。

――ああ！

響は、一瞬、意識が空白にさらされるのを覚えた。これまでこんな異様な感覚は覚えたことがない。

それはそうだろう。仮に、意識にベクトルのようなものがあるのだとしたら、その方向はつねに一方向であらねばならないはずだ。時間はつねに過去から未来への一方向に向けて流れているはずだからだ。突然、そのベクトルの向きが逆転したりするのに、意識が耐えられるはずがない。

それと同時に――。

何とも名状しがたい嘔吐感が喉をつきあげてくるのを覚えた。体が過去に押し戻されたために、鼓動、胃腸の蠕動運動までもが逆転したのかもしれない。猛烈な時間酔いを感じた。

ありうべからざる、じつに信じべからざることだが、

――時が逆流している！

いやでもそのことを認めざるをえなかった。驚きと、それに数百倍する恐怖にみまわれた。たしかに響は怖いもの知らずで、勇敢な少女ではあったが、これはあまりに度を越していた。悲鳴をあげることもできないほどに心底から震えあがった。

あの、突然、虚空に出現した立体マンダラの怪奇……金剛杵を振りかざした帝釈天の恐ろしさ……それにまざまざと肌に実感していながらもそれでもなお信じられずにいるこの時の逆流……これらがほんとうに人間のなしうるわざなのか。いや、彼らはほんとうに人間なのだろうか。

――この敵は恐ろしい。

響は恐怖した。おそらく、その恐怖は、滑婆にも、蓮にも、涙にも、現にも、そして根来転寝にも共有されたはずだった。が、響にかぎっていえば、恐怖してばかりもいられない事情があったのだ。

八郎の「有情」を覆う氷の隔壁のひびが急速にひろがりつつある。いまやそれはもう亀裂といえるまでになっていた。

——どうして時間が逆流すると八郎の「有情」に亀裂が走るのか。

考えるまでもないことだ。

それは八郎が時間をかけて自分の心を凍てつかせていったからにちがいない。時間をかけて自分の響に対する想いを徐々に封印していった……。時間が逆流すれば、その無理やり凍てつかせた心も元に戻らざるをえないだろうし、封印するまえの八郎の想いが露呈されることも避けられない。

——いけない、八郎……。

「桜花」といい、「有情」といっても、それはしょせん、響の盾眼術と、八郎の矛眼術とがないまぜになり、無限ループされた結果、そこに生じた虚構の時空間でしかない。交叉する二人の想いと、その「愛」を具象化し、そのなかに封じ込めるために、仮想的に構築されたものにすぎないのだ。

その仮想空間、仮象時間に亀裂が走れば、その下から露呈されるのは、ふたりの真心でしかないだろう。いやおうなしに「愛」が剝き出しにされずにはいられない。

——やめて、八郎、もうわたしは苦しみたくない。

どうしたら抑えてもあふれ出るこの「愛」の想いをせき止めることができるだろう？

どうしたら、この切ない想いを隠すことができるのか。葬り去ることが可能なのか。

ふいに「有情」の氷の隔壁が爆発するようにドッと噴きあげられた。その下から、秘しても秘しきれない、抑えても抑えきれない八郎の熱い想いが噴泉のように噴きあげてきたのだった。

「響——」

八郎の悲痛な声が虚空をつんざいた。

「おれは耐えに耐えた。抑えに抑えた。しかし、もう耐えきれない。抑えきれない……」

「わたしも——」

哀しみよりも喜びがまさった。あふれる想いを耐えることも抑えることもできずにいるのは響も同じなのだから。

「同じだよ、八郎」

この愛は絶対に成就されない……なぜなら響と八郎がそれを回避するからだ。そうせずにはいられないからだ。愛をまっとうし、ちぎりを交わせば、それはふたりの愛を泥にまみれさせることになるだろう。ふたりの瞳術をより完成あらしめるために愛を利用したこ

とになるからだ。かといって、このままちぎりも交わさずにいることは、自然な愛のかたちに背くことになりはしないか。それもまた愛に対する裏切りではないか。――

――愛を成就するためには愛を成就してはならない……。

ふたりの瞳術が矛と盾なのではない。ふたりの愛が矛と盾なのだ。ふたりの瞳術をもってしてもこの矛盾を解決することはかなわないのではないか。

「八郎、ふたりで死のうか」

「これはどうだ、何とマセたガキどもではないか」

ドッと虚空の空を成尋五人衆の笑いがどよもした。面も向けられないほどの、嘲笑と、悪意に真っ黒に染めあげられた笑いだ。――愛はもちろん、献身も、善行も、すべてこの地上の美しいもの、良きものを、背徳の泥濘に沈め、糞尿にまみれさせずにはいられない、醜悪で凶暴な人間獣たちの笑いだった。

その笑いのなか、いかにも不機嫌そうな声が混じって――。

「『愛』と申したか。気にいらぬ。その愛とやらがどれほどのものか、このおれが思い知らせてくれよう。おれが本気になれば、いかに愛しあう二人とて、頼むからあっちを先に殺してくりゃれ、と頭を地にすりつけ泣いて慈悲を乞うようになろうものを――」

「ホッ、ホッ、輪廻孫六がいたく立腹であるわい。頭を冷やせ、冷やせ……。それより、二人を嬉し恥ずかし、色地獄に追い落としてやってはどうか。孔雀啄、おまえなら、男、女ともに、おまえの尻を泣いて追いまわす雄犬、雌犬にしたてるのは造作もなかろうほどに」

「あいにく、わたしはおのれ自身が、ご覧のとおりの青二才なれば――とてものことに歳たらずの、雄しべ、雌しべを摘みとるだけの風流心、親切心の持ちあわせなど一点もござりませぬ」

若々しい、なのに死灰のように冷えびえとした声だ。

「わたしは、おこない澄ました禅坊主、修行一筋の兵法者、忠義一徹のがんこ侍、清楚貞淑な貴婦人、清純可憐な姫君を、愛欲地獄、色地獄の犬畜生に堕とし参らせるのがなによりの好物でござって――お子供衆のお相手など、考えただけでも、ハ～、このようにアクビが出てまいりますれば」

「ホホ、ホ……とはまた何とまあ、いつもの孔雀様とも思えぬ淡白ぶりではございませぬか。よろしゅうございます。さすれば、このわたくしが、かわいや、この若いふたりの『愛』とやらをみごと泥まみれにしてご覧にいれましょう」

「ホッ、ホッ、ホッ……それよ、それよ。やはりこういうことは夜叉至にまかせるにしくはない。楽しみ、楽しみ、まずはお手並み、拝見つかまつろうか」

修羅にうごめく人間獣たちの笑い声がススキ原を無情に薙ぎたおす野分のようにびょう

と押し寄せたとき、
「やめい」
雷鳴のような声が轟いた。
「その者たちは捨ておけい。帰る」
「何と仰せられます？　帰ると申されたか、成尋僧正どの――」
あの、子供の相手などはできぬ、と憎体にいった若々しい声の主がいささか慌てたように、
「されど、大御台所の命をしばしのあいだ、引き延ばし、おのれが『神』になれ、兄になり代わりて『将軍』になれ、と忠長に遺言させるのではござらぬか。お袋の口をかりて忠長めを焚きつけるのではござらなんだか。――最後の念押し、一押しを怠ったとあっては、九仞の功を一簣にかく、ことになりはしませぬか」
「孔雀、小賢しい口をきくな、やかましい」
「ハッ」
「気が変わったのだ。いやさ、こうなればもう大御台所も、駿河大納言もどうでもよい。ものの数ではないわ。大御台所はこのまま静かに崩じさせればよい。大納言はこのまま舞い上がらせておけばよい。いまはもうそれどころではない。わしはな、もっとおもしろいことを思いついたのじゃ」

「ほう、大御台所や、忠長をあやつるよりも、もっとおもしろいことがあるとかや」
「それは何でござろうか」
「僧正様、せめて、わたくしにだけでも子細をお聞かせ願えませんか」
声、声、声がからみつくのを振り払うように――
「まずは数年後のことと知れ。数年後にはまた戻って参るゆえ、そのときを楽しみに待つがよい」
成尋が断固とした声でそういう。
「いざ、帰る」
と。――
「ホッ、ホッ、ホッ。楽しみ、楽しみ……」
という声をこだまのようにあとに残し、雷雲が頭上から遠地に去るように、まがまがしい存在感が消えていって……。
その笑い声だけはいつまでも耳に残り、だがそれもしだいに遠ざかっていったかと思うと――ふいに大きな声が耳もとに鳴りわたって、
「これ、しっかりせぬか。気をたしかに持て」
という根来転寝の声が届いた。

ハッ、と目を覚まし、あわてて上半身を起こし、響は自分が観音堂の外の築山のかげで眠り込んでいたことに気がついたのだった。

「滑婆たちは？」

「ありがたいことに敵が立ち去ってくれたのでな――大御台所様を西の丸にお送りしていったよ」

「敵が立ち去ってくれた……根来転寝、あの敵は、あれは――」

「何者かはわからぬ。なにが狙いなのかもわからぬ……ただ数年後には戻ってくるという。そのときにはすべてが明らかになるだろうよ。できればそのときには、おれはどこか遠くに避難していたいものだが――まあ、そうもいかないだろうよ」

根来転寝はいつもの彼からは想像もつかないほどに憂鬱げな顔をして、

「響よ、おれたちは運が悪い。どうやら数年後には、おれたち全員があやつらと死に物狂いで戦うことになりそうだぜ」

「数年後にはわたしたち全員が……」

「そう――こともあろうにあの化け物たちとな」

根来転寝は茫とした目を紅葉にあかあかと染めあげられた空に転じた。その目はすでに数年後の死闘を幻視しているかのようだった……。

寛永三年（一六二六）、忠長は上洛し、従二位・権大納言に叙任されたが、母の危篤を知り、九月十二日に京を発った。十五日には江戸に到着したが、母の死には間にあわなかったと伝えられる。

忠長はついに母の口から遺言を聞くことがかなわなかったのだという。

それから数年後、正確には六年後の寛永九年（一六三二）に、大御所秀忠が没し――そしてここにこの物語は第二章の幕を開けることになる……。

九

大御所・徳川秀忠が没したのは正月二十四日のことだという。没年――くしくも妻・江と同い年の五十四歳だったという。当代公方・家光はただちに諸国に触れを出し、喪に服するように宣したが、それとはかかわりなしに自然はめぐり、この年にも桜花が絢爛と山野をいろどった。

その桜の花に誘われるように、大和路から紀ノ川筋に入り、高野政所（慈尊院村）のほうに奇妙な男女のふたり連れが分け入っていた。

女は滑婆――あれから六年を経て、すでに三十路を越しているはずだが、その美貌に衰えはない。いや、衰えるどころか、その美貌はろうたけて、ますます磨きがかかり、凄味

さえ増している。

男は根来転寝――六年たっても、あいかわらず、あの「阿修羅」に寝そべったままだ。人が通りかかるときには、滑婆が押すようなそぶりをするが、そうでないときには「阿修羅」は自走している。何か改良がほどこされたらしく、「阿修羅」はときに人が――というより忍者が――走るよりも速く疾走することができた。

「おれは桜の季節はどうも好きになれぬ」

と寝そべりながら根来転寝がいう。言葉の内容とは裏腹にじつにうらかとしかいいようのない口調であり、声であった。

「桜の花びらが体に降ってきてどうにも取り払うのに面倒でならぬでなあ」

「とはまた不精がすぎよう」

「おれの身内にな。例の忍法合戦の選手であった地虫十兵衛なるものがおった。おれと同じように手足が不自由であったが、一念発起し、その災いを福と転じるべく、必殺のわざを身につけた。ところが皮肉なことに、その必殺のわざがかえって災いし、みずからを滅ぼすはめになった。おれはそれを教訓にしているのだ」

「どんな教訓？」

「何もせぬほうがええ」

「この不精者――」

それを聞いて滑婆がにやりと笑う。

ふいに「阿修羅」を桜の木の下に押しやるとその樹木をどんと蹴った。

桜の花びらがどさりと大量に落ちてきて「阿修羅」を埋めた。

「わっ、ぺっ、ぺっ……何をする」

「不精が罰じゃ」

ふたりの笑い声の先――その桜の満開の下あたりから、鍛冶の音が聞こえてくる。どうやら、その先に鍛冶村があるらしい。その鍛冶の槌の響きに混じってつづけざまに破裂音のような音が聞こえてきた。

銃声だ。

蓮だ。――両手に革の帯を巻いている。機敏に身をおどらせる。走る。片膝をつく。ときには腹這いに身を投げる。二挺拳銃だ。例の蓮根銃だが銃身が長い。あざやかにそれをあやつる。銃口から火箭がほとばしる。銃声が炸裂する。

標的がいる。男だ。そちらも動いている。全身に鎧のようなものを纏っている。ただし鎧にしては妙に軽快な印象がある。肩、両手、腰、両足にかけて細いフレーム状に鋼索が延びている。両手にも手甲のように鋼索が巻かれている。どうやらそのフレームは伸縮自在であるらしい。男が動くたびに精妙に伸び縮みする。カン、カン、という金属音とも

に鎧に火花が散る。銃弾が貫通しないのか。ただし着弾の衝撃だけは避けられないらしく、弾が当たるたびに、両手をバタバタさせて、後ろざまに転倒する。起き上がっては、また撃たれて倒れ、また立ちあがる。そのくり返しだ。

鍛冶村の外れだ。村の人間たちは慣れているらしく、ふたりに見向きもしない。鍛冶場の煙が流れていた。

蓮が二挺の蓮根銃を撃ちつくしたのを見はからって、

「甲羅式部、蓮――」

根来転寝が声をかけた。

鋼の防具をつけた男がこちらを見る。牛のようにずんぐりした体格の男だ。僧形、まだ二十歳そこそこの若さだろうに、もう沈毅（ちんき）、半眼の、中年男めいた面がまえをしている。その顔にはやはり鋼の面頬（めんぽお）をつけていた。――見れば、鋼の防具の下には墨染めの衣を着けている。高野山の僧侶だろうか。

「どうかな、おれの作った犀防具（サイボウグ）は？」

根来転寝がそう声をかける。

「まずは――」

口が重いタチらしい。それだけをいって両手を開いてみせた。二発の銃弾が手のひらから地に落ちた。

「十二発撃ってどうにか二発手どることができた……まあまあ使い物になるかな」

蓮と甲羅式部は純粋に鍛冶への興味が共通していることから、ともに鍛冶村で暮らしている。蓮は蓮根銃の改良のために、甲羅式部は犀防具の開発のために、ともに相手を必要としている。――ふたりの間に恋愛感情があるのかどうかは根来転寝にも滑婆にも関係のないことである。

式部が、

「今日はまたおそろいで何の用かな？」

と訊いてくるのに、

「あいつらが戻ってきた――」

「あいつら？」

「成尋五人衆が――」

「……」

さすがに二人の顔色が変わるのを上目づかいに見ながら、

「悪いが――ふたりには出陣の用意をしてもらう」

根来転寝はそういった。

ボソボソと生気のない、いまにも消え入りそうな声だ。それがせせらぎの響きに打ち消

されそうになりながら、どうにか聞きとることができる。
「おれの身内の芸は代々、碁打ちであった。碁打ちなぞが忍法稼業の何の役に立つかと思われるかもしれぬが、碁打ちの芸があればこそ、大名家のふところに入り込むこともできる。それだけではない。おれの身内、なかでも碁打ちの名人に、碁打ちの念を破れ障子に映すことができる者がいた。もともとは囲碁における『目』と人の『目』とをかけて思いついた芸ではあったらしいが——つまり目をもののうえに移動させて自在にものを見ることができる芸だ。おれも苦心惨憺のうえ、どうにかその芸を身につけることはできたのだが……」
「おれはいま何を喰ってる?」
根来転寝のその問いに、一瞬、間があいたが、すぐに、大根だ、とつまらなそうに返事が戻ってきた。
「もうすこし泥を取ったほうがよいのではないか」
「なに、泥も滋養のうちさ」
根来転寝は笑って、
「なるほど、ほんとうに見えるようだな」
「それは——見えるさ、嘘はつかぬ」
その声はあいかわらずつまらなそうだ。

紀ノ川の河原にいまにも倒れそうなさしかけ小屋がある。狭いし、むさいし、臭いし——のほったて小屋だが、碁石才蔵はもう十日あまりもその小屋から出てこないのだという。
「こういうことはよくあるのか」
と現に聞いた。
「今年に入ってから二度目かな」
現は屈託なさげにコロコロ笑う。
彼女もすでに二十歳を越えた。が、その清純可憐な乙女めいた容貌にはいささかも変わりがない。いまだに瞳がつぶらに光ったりするのだから始末におえない。
その現がつかず離れず、この碁石才蔵と一緒にいるのだが、これだけは根来転寝にも理解できない。滑姿もこれには首を傾げている。——なにがつりあわぬといって、このふたりぐらいつりあわぬ相手はいないからだ。万が一にも、このふたりの間に男女の関係などあろうはずはないが、それでは何の必要があって、このふたりが——いや、かわいい現が、貧相な碁石才蔵などと一緒にいるのだろうか。
「小屋のなかにいながら小屋の外の様子がすべてお見通しか。それで外に出たとて同じことだと世をはかなんでひきこもりをしているわけなのか。そうではあるまい。話す気にはなれぬか。どうして、おまえはひきこもりをしているのか」

しかしもう小屋のなかから才蔵の返事は戻ってこなかった。
河原を去るとき、「どうかな、才蔵は来るかな」と現に訊いた。
「心配しなくても大丈夫――なんであの男がこんなおもしろい話にとびつかないわけがあるものか」
「おもしろい話？」
根来転寝はさすがに眉をひそめて、
「相手は成尋五人衆だぜ」
「だからこそじゃないの」
現は自信満々に笑った。首のスカーフに指がかかっている。
「だからこそおもしろいんじゃないの――いつ、お宅にうかがえばいいのかな」
「お宅というほどの代物ではないが……」
オタクか。……何とはなしにその言葉が頭に残った。――やはり根来転寝にはこのふたりの関係はよくわからない。

わかりすぎるぐらいにわかるのが蜩七弦と涙の関係だ。
このふたりにかぎっては男女の関係は絶対にないと断言できる。
が、男女の関係がないのが不思議なような場所であり、情況でもある。

なにしろ、ここは紀州城下の傾城屋（遊女屋）の一室であり、しかも涙は体の線が透けてみえる、純白のうすぎぬをまとっただけの姿であり、蜩七弦にいたっては下帯一枚のほとんど裸体も同然の姿なのだ。
そのふたりが狭い部屋で正面から向きあっているのだ。ふたりが性的に興奮していないわけではない。それどころか――涙も、七弦もあからさまに息を荒くしている。涙は切なげに肩で息をし、その白桃のように美しい乳房をうすぎぬの下で悩ましく上下させている。七弦も全身にうっすら汗をかいているし、下帯が恐ろしいほどに隆起してズキンズキンと脈打っているのをはっきりと見てとることができる。
涙の色っぽさはほとんど犯罪的とまでいっていいほどだし、七弦も色白で目鼻立ちが整った――多少のっぺりとした公家顔のきらいはあるが――、なによりその体毛の少ない、しなやかな体つきに不思議な色気を漂わせた、まれといっていいほどの美男子なのだから……このふたりが懸命に性の衝動に耐えているその姿は何かしらおごそかでさえある。もちろん、滑稽でもあるのだが――。
「もうそろそろじゃないの、七弦――」
涙があえぎながら、しかしその苦しげな息の下からいう。
「何のこれしき――おまえのほうこそおれが欲しくてもう辛抱たまらぬのではないか」
七弦も苦しげにいう。

「なにを――笑わせないでくれる？　わ、わたしを誰だと思っているの」
「それをいうなら――お、おれを誰だと……」
こういうわけなのだ。
涙は眼帯をとっている、その目から涙がこぼれる。彼女の涙には男の性欲を異常なまでに亢進させる成分が入っているようだ。いわゆるフェロモンなのだろうが、ただでさえ色っぽい涙が、フェロモンを全開にさせるのだから、どんな男もこれに抗することはできない。一匹の性獣と化してしまう。いかなる男も彼女の奴隷のようになってしまうのだ。
蜩七弦のほうはどうかというと――七弦の身内では、代々、まれにではあるが、ひとたび女とまじわると、その女は彼をしたうあまり、さかりのついた雌犬のようになってしまうという術――というか一種の体質であろうが――を持った男たちが生まれてくる。
これはうらやましいように見えて、当の男たちにしてみれば、むしろ災難のような体質であるのだが、とにもかくにも忍法御用の役には立つ。
七弦もそうした体質に生まれたのだが、この男には奇妙に求道的なところがあり、相手とまじわらずして、その能力を発揮することはできないものか、という奇妙な観念にとり憑かれてしまった。
そのためにはこの能力を極限まで磨きに磨いて強化する必要があるだろう。
その格好の相手として選ばれたのが涙であったわけだ。

彼女のほうも涙を流さずに相手の男を自分の意のままにできないものか……という野心があった。
つまり、ふたりの目的は期せずして一致したわけで、たがいに相手を昂ぶらせ、そのことで自分も昂ぶり、また相手を昂ぶらせて、しかもそれに屈しない、という能力強化トレーニングに努めているわけなのだ。
滑姿が、「ふたりの修行のさまたげになるかもしれないから」といって、根来転寝がひとりで二人に会いにいくのを嫌ったが、たぶんそれは口実にすぎず、内心ではミイラとりがミイラになってしまうのを懸念したからかもしれない。
事実、さすがの根来転寝が、部屋に蜜のようにたちこめる性欲の赤い妖霧に、頭のなかがクラクラして、涙に襲いかからないようにするのが精いっぱいだった。必死にフスマにしがみついているのだが、そのフスマが小刻みにカタカタと鳴動しているほどなのだ。
「そ、それでは頼んだぞ」
転寝は早々に退散することにした。あえぎながら部屋を出ようとする。
「ま、待て、根来転寝――」
そんな転寝に、やはりあえぎあえぎしながら、七弦が声をかけてきた。
「あいつは来るのか」
「あ、あいつとは？」

転寝はフスマをバリバリと指で掻きむしりながら訊いた。苦しいのも苦しいが、おかしいのもおかしい。

「甲賀八郎のことだ。あいつは来るのか」

「来る――八郎は来る」

その甲賀八郎の姿はいま駿河国にあった。

徳川忠長に呼ばれたのだった。

このとき八郎は満で十七歳、数えで十八歳――。

臙脂色の袖なし羽織に、若草色の小袖、同色系統ではあるがやや色が濃いたっつけ袴を穿いている。

その姿は若々しく、青春美の極致にあるかのように、見るからに颯爽としている。

が、だれか心ある者が、その眼を覗き込めば、そこに見られる恐ろしいほどの虚無の深淵に粛然とさせられるだろう。まるで極北の氷のように冷たい光を秘めている。

もう九年まえの九歳の八郎ではないし、六年まえの十二歳の八郎でもない。さらに冷えびえと心を閉ざし、みずからを虚無のなかに封じ込めてしまっている。いまではもうほとんど響のことを思い出すこともない。

が、そうではあっても、その虚無感が、八郎の青春の息吹を完全に消し去るまでにはいたっていない。そのたくましい肩に降りかかる桜の花びらは彼の再生を願って舞っているかのようだ。

ふと八郎は満開の桜を仰いで、散る桜、とつぶやいた。歌がその口をついて出た。

「散るさくら、残るさくらも、散るさくら……」

もちろん、これは後世、良寛の辞世として有名になった歌だ。第二次大戦中には、これが戦意高揚の歌として使われ、いまでは妙な色がついてしまったきらいはあるが。

いずれにせよ、たまたま同じ歌になったのは偶然のことからだろう。偶然に同じ歌になったとしても不思議はないほど、こねくりまわした技巧のあとがなく、自然な心の発露から生まれ出た歌なのだから。――

桜が舞い散るなか、八郎の後ろ姿はそのなかに茫々として消え去っていった。

するとその桜の乱舞のなかに――。

「散るさくら、残るさくらも、散るさくら――」

と含み笑いの声がして、そのあとにはっきりと笑い声が聞こえ、

「見事に咲いた花ならば、心おきなく散り候え――」

ドッ、と何人かの笑い声がして、その笑い声に、妖、と桜の花が舞いあがる……。

（下巻につづく）

講談社 ノベルス

〈著者紹介〉

山田正紀（やまだ・まさき）

1974年、『神狩り』（早川書房）でデビュー、同作は第６回星雲賞日本短編部門を受賞した。『最後の敵』（徳間書店）で第３回日本SF大賞を受賞、『ミステリ・オペラ』（早川書房）で第２回本格ミステリ大賞と第55回日本推理作家協会賞を受賞。「神獣聖戦シリーズ」「五感推理シリーズ」など人気作が多数ある。

桜花忍法帖
バジリスク新章（上）

2015年11月18日　第１刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者……山田正紀

©MASAKI YAMADA 2015, Printed in Japan

発行者……鈴木　哲

発行所……株式会社 講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

編集03-5395-3506

販売03-5395-5817

業務03-5395-3615

本文データ制作……講談社デジタル製作部

印刷……株式会社廣済堂

製本……株式会社若林製本工場

カバー印刷……慶昌堂印刷株式会社

装丁フォーマット……ムシカゴグラフィクス

本文フォーマット……next door design

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸第三出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-294007-8　N.D.C.913　296p　15cm

この作品は、書き下ろしです。

「成尋、おれはおまえを切る」

桜花（おうか）忍法帖

バジリスク新章 下

2015年 12月20日発売！

講談社 ラノベ

美少年シリーズ

西尾維新

美少年探偵団

きみだけに光かがやく暗黒星

イラスト
キナコ

十年前に一度だけ見た星を探す少女——私立指輪学園中等部二年の瞳島眉美。彼女の探し物は、校内のトラブルを非公式非公開非営利に解決すると噂される謎の集団「美少年探偵団」が請け負うことに。個性が豊かすぎて、実はほとんどすべてのトラブルの元凶ではないかと囁かれる五人の「美少年」に囲まれた、賑やかで危険な日々が始まる。爽快青春ミステリー、ここに開幕！

講談社 ラノベ

Wシリーズ

森博嗣

彼女は一人で歩くのか？

Does She Walk Alone?

イラスト
引地 渉

ウォーカロン（walk-alone）。「単独歩行者」と呼ばれる、人工細胞で作られた生命体。人間との差はほとんどなく、容易に違いは識別できない。

研究者のハギリは、何者かに命を狙われた。心当たりはなかった。彼を保護しに来たウグイによると、ウォーカロンと人間を識別するためのハギリの研究成果が襲撃理由ではないかとのことだが。

人間性とは命とは何か問いかける、知性が予見する未来の物語。

講談社 タイガ

野﨑まど

バビロン　I　―女―

イラスト
ざいん

東京地検特捜部検事・正崎善(せいざきぜん)は、製薬会社と大学が関与した臨床研究不正事件を追っていた。その捜査の中で正崎は、麻酔科医・因幡信(いなばしん)が記した一枚の書面を発見する。そこに残されていたのは、毛や皮膚混じりの異様な血痕と、紙を埋め尽くした無数の文字、アルファベットの「F」だった。正崎は事件の謎を追ううちに、大型選挙の裏に潜む陰謀と、それを操る人物の存在に気がつき!?

講談社 タイガ

野村美月

晴追町(はれおいちょう)には、ひまりさんがいる。

はじまりの春は犬を連れた人妻と

イラスト
志村貴子

心に傷を抱えた大学生の春近(はるちか)は、眠れない冬の日の深夜、公園に散歩に出かけた。「二月三日は、『不眠の日』です」。そこで彼に話しかけたのは、ひまわりのような笑顔を浮かべる、人妻のひまりさんだった。もふもふの白い毛並みのサモエド犬・有海(ありうみ)さんを連れた彼女とともに、晴追町(はれおいちょう)に起こる不思議な謎と、優しい人々と触れあううちに、春近はどんどんひまりさんに惹かれていき……。

講談社
タイガ

《最新刊》

君と時計と嘘の塔　第一幕
綾崎 隼

「大好きな女の子が死んでしまった」という悪夢から、すべては始まった。
高校生たちの切ない青春を描くタイムリープミステリ四部作の第一弾！

桜花忍法帖　バジリスク新章（上）
山田正紀

天下の座を賭けた忍法殺戮合戦から十年、再び甲賀伊賀の精鋭が結集する！　若き棟梁、甲賀八郎と伊賀響の行く手を遮る成尋衆とは――？

僕と死神（ボディガード）の黒い糸
天野頌子

世界を動かす大富豪の家に生まれた十歳の御曹司――海堂凜。彼が出会ったのは、「ある秘密」を抱える〝最強〟のボディガードだった！

シャーロック・ホームズの不均衡
似鳥 鶏

犯行不可能な絞殺事件に遭遇した、天野直人・七海兄妹。推理をする彼らに迫る諜報機関の正体は……!?　直人は妹を守るため、探偵となる！